

中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内

# 埋蔵文化財発掘調査報告書 IV

本文編 (第2分冊)

重富遺跡

やつおもて古墳群

柳ヶ谷遺跡

1992年3月

教育委員会

中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内

# 埋蔵文化財発掘調査報告書 IV

本文編 (第2分冊)

1992年3月

島根県教育委員会

# 本文目次

(第2分冊)

第Ⅲ章 重富遺跡	1
第1節 調査の概要	(足立克己) 1
第2節 I区の調査	2
1. 尾根頂部の遺構・遺物	4
2. 南谷部の遺構・遺物	19
3. 南谷底部の遺構・遺物	28
4. 北斜面の遺構・遺物	38
第3節 II区の調査	45
1. 木棺墓群	45
2. その他の遺構・遺物	71
第4節 III区の調査	80
1. 南尾根部の遺構・遺物	80
2. 東斜面の遺構・遺物	87
3. 北斜面の遺構・遺物	92
4. 谷底部の遺構・遺物	112
第5節 IV・IV-2区の調査	118
1. IV区の遺構・遺物	122
2. IV-2区の遺構・遺物	162
第6節 自然科学分野の分析	170
1. 重富遺跡出土須恵器の蛍光X線分析	(三辻利一) 170
2. 重富遺跡瓦窯跡の熱ルミネッセンス年代測定	(長友恒人) 176
3. 重富遺跡瓦窯跡・住居跡(SII0) かまと・炭窯跡の地磁気年代	
(時枝克安・伊藤晴明)	179
第7節 小結	184
第Ⅳ章 やつおもて古墳群	191
第1節 調査の概要	(角田徳幸) 191
第2節 I区の調査	193

1. 18 号 墳	193
第3節 Ⅱ 区 の 調査	212
1. 遺構の配置状況	212
2. 17 号 墳	217
3. 19 号 墳	218
4. 20 号 墳	218
5. 21 号 墳	223
6. 22 号 墳	225
7. 23 号 墳	227
8. 1 号 土 墓	229
9. 2 号 土 墓	231
10. 3 号 土 墓	231
11. 4 号 土 墓	232
12. 5 号 土 墓	232
13. 6 号 土 墓	233
14. 1 号 牛 墓	233
15. 2 号 牛 墓	234
第4節 小 結	236
1. 弥生時代の遺構と遺物	236
2. 古墳時代の遺構と遺物	236
付論 やつおもて古墳群より検出された古墳時代人骨と近世牛骨について	
(井上貴央)	243
第V章 柳ヶ谷 遺跡	249
(松木岩雄)	249
第1節 遺跡の位置	249
第2節 調査結果	250
1. 発掘調査前の状況	250
2. 発掘調査の状況	251
第3節 結 論	253

## 挿図・表目次

### 第Ⅲ章 重富遺跡

第 1 図 重富遺跡の全体図と今回調査地点	2
第 2 図 重富遺跡調査区設定図	3
第 3 図 重富遺跡 I 区地形測量図（終了時）	5 ~ 6
第 4 図 重富遺跡 I 区尾根頂部集石墓位置図および遺物分布図	7 ~ 8
第 5 図 重富遺跡 I 区 1 号集石墓実測図	9
第 6 図 重富遺跡 I 区 1 号集石墓出土遺物実測図	9
第 7 図 重富遺跡 I 区 2 ~ 4 号集石墓実測図	10
第 8 図 重富遺跡 I 区 5・6 号集石墓実測図	11
第 9 図 重富遺跡 I 区 7・8 号集石墓実測図	12
第 10 図 重富遺跡 I 区 9 ~ 11 号集石墓実測図	12
第 11 図 重富遺跡 I 区 12・13 号集石墓実測図	13
第 12 図 重富遺跡 I 区尾根頂部 SK11・12 実測図	13
第 13 図 重富遺跡 I 区尾根頂部出土遺物実測図	14
第 14 図 重富遺跡 I 区南谷部東斜面遺構位置図	15 ~ 16
第 15 図 重富遺跡 I 区 SB1・2 実測図	17 ~ 18
第 16 図 重富遺跡 I 区南谷部造状遺構実測図	19
第 17 図 重富遺跡 I 区南谷部東斜面出土遺物実測図	20
第 18 図 重富遺跡 I 区古墓群実測図	21
第 19 図 重富遺跡 I 区古墓出土遺物実測図	22
第 20 図 重富遺跡 I 区南谷底部地形測量図	23 ~ 24
第 21 図 重富遺跡 I 区明褐色土上面 SK02 実測図	25
第 22 図 重富遺跡 I 区南谷底部焼土層および下面遺構位置図	26
第 23 図 重富遺跡 I 区南谷底部焼土層下面遺構実測図	26
第 24 図 重富遺跡 I 区南谷部上層実測図(1)	27
第 25 図 重富遺跡 I 区南谷部上層実測図(2)	28
第 26 図 重富遺跡 I 区南谷部溝状遺構実測図	29
第 27 図 重富遺跡 I 区土壤・溝状遺構出土遺物実測図	30

第 28 図	重富遺跡Ⅰ区南谷底部暗褐色土出土遺物分布図	31
第 29 図	重富遺跡Ⅰ区南谷底部黃褐色土出土遺物分布図	31
第 30 図	重富遺跡Ⅰ区南谷底部出土遺物実測図(1)	32
第 31 図	重富遺跡Ⅰ区南谷底部出土遺物実測図(2)	33
第 32 図	重富遺跡Ⅰ区南谷底部出土遺物実測図(3)	34
第 33 図	重富遺跡Ⅰ区炭灰跡実測図	35~36
第 34 図	重富遺跡Ⅰ区北斜面地形測量図	37
第 35 図	重富遺跡Ⅰ区北斜面溝状造構部分図	38
第 36 図	重富遺跡Ⅰ区北斜面出土遺物実測図	39
第 37 図	重富遺跡Ⅰ区北斜面 1 ~ 3 号ピット実測図	40
第 38 図	重富遺跡Ⅰ区北斜面 4 ~ 6 号ピット実測図	41
第 39 図	重富遺跡Ⅰ区北斜面 2・3 号ピット出土遺物実測図	42
第 40 図	重富遺跡Ⅰ区北斜面加工段・SX1 実測図	43
第 41 図	重富遺跡Ⅰ区北斜面拵張部造構実測図	44
第 42 図	重富遺跡Ⅰ区北斜面SX01壁客土内出土遺物実測図	45
第 43 図	重富遺跡Ⅱ区地形測量図	47~48
第 44 図	重富遺跡Ⅱ区第 1 木棺墓群全体図	49
第 45 図	重富遺跡Ⅱ区SK31・32実測図	50
第 46 図	重富遺跡Ⅱ区SK20・22実測図	51
第 47 図	重富遺跡Ⅱ区SK34・35・42実測図	52
第 48 図	重富遺跡Ⅱ区SK36・43実測図	53
第 49 図	重富遺跡Ⅱ区第 2 木棺墓群全体図	54
第 50 図	重富遺跡Ⅱ区SK03・05実測図	55
第 51 図	重富遺跡Ⅱ区SK06~08, 02・04・21・28実測図	56
第 52 図	重富遺跡Ⅱ区SK14・25, 26実測図	57
第 53 図	重富遺跡Ⅱ区SK37・38実測図	58
第 54 図	重富遺跡Ⅱ区SK39~41・46実測図	59
第 55 図	重富遺跡Ⅱ区木棺墓群出土土器実測図	60
第 56 図	重富遺跡Ⅱ区第 3 木棺墓群全体図	61
第 57 図	重富遺跡Ⅱ区SK01・10・11・27実測図	62
第 58 図	重富遺跡Ⅱ区SK12・13・15・16実測図	63

第 59 図	重富遺跡Ⅱ区第4木棺墓群全休図	64
第 60 図	重富遺跡Ⅱ区SK18・19・29・30実測図	65
第 61 図	重富遺跡Ⅱ区SK23・24・44実測図	67
第 62 図	重富遺跡Ⅱ区SK45およびSX01・02周辺図	68
第 63 図	重富遺跡Ⅱ区SK45実測図	69
第 64 図	重富遺跡Ⅱ区南端遺構実測図	69
第 65 図	重富遺跡Ⅱ区SK33実測図	69
第 66 図	重富遺跡Ⅱ区南斜面遺構実測図	70
第 67 図	重富遺跡Ⅱ区SK17実測図	70
第 68 図	重富遺跡Ⅱ区SK17出土須恵器実測図	71
第 69 図	重富遺跡Ⅱ区南端西斜面遺構実測図	71
第 70 図	重富遺跡Ⅱ区南端溝状遺構出土遺物実測図	71
第 71 図	重富遺跡Ⅱ区北端遺構実測図	72
第 72 図	重富遺跡Ⅱ区遺物包含層出土遺物実測図	73
第 73 図	重富遺跡Ⅱ区南東部遺構実測図	74
第 74 図	重富遺跡Ⅱ区南東部ピット実測図	75
第 75 図	重富遺跡Ⅱ区東斜面加工段実測図	76
第 76 図	重富遺跡Ⅱ区北端旧表土遺物実測図	77
第 77 図	重富遺跡Ⅲ・Ⅳ区地形測量図	81～82
第 78 図	重富遺跡Ⅲ区南尾根部遺構位置図	83
第 79 図	重富遺跡Ⅲ区古墳実測図	84
第 80 図	重富遺跡Ⅲ区古墳堅穴式石室実測図	85
第 81 図	重富遺跡Ⅲ区古墳墓壙実測図	86
第 82 図	重富遺跡Ⅲ区南尾根部土壤実測図	87
第 83 図	重富遺跡Ⅲ区南尾根部加工段実測図	88
第 84 図	重富遺跡Ⅲ区南尾根部南斜面出土遺物実測図	88
第 85 図	重富遺跡Ⅲ区下方斜面平坦部地形測量図	89
第 86 図	重富遺跡Ⅲ区東斜面SK01実測図	89
第 87 図	重富遺跡Ⅲ区東斜面出土遺物実測図(1)	90
第 88 図	重富遺跡Ⅲ区東斜面出土遺物実測図(2)	91
第 89 図	重富遺跡Ⅲ区北斜面遺構位置図	93～94

第 90 図	重富遺跡Ⅲ区SI01実測図	95
第 91 図	重富遺跡Ⅲ区SI01出土土器実測図	96
第 92 図	重富遺跡Ⅲ区SI02・04・05実測図	97
第 93 図	重富遺跡Ⅲ区SI02第1面遺物出土状況実測図	98
第 94 図	重富遺跡Ⅲ区SI04・05遺物出土状況実測図	99
第 95 図	重富遺跡Ⅲ区SI02・04・05出土遺物実測図	100
第 96 図	重富遺跡Ⅲ区SI05出土遺物実測図	101
第 97 図	重富遺跡Ⅲ区SI03実測図	101
第 98 図	重富遺跡Ⅲ区SI03かまど石組および煙道部拡大図	102
第 99 図	重富遺跡Ⅲ区SI06実測図	103
第100図	重富遺跡Ⅲ区SI06煙道口土師器出土状況実測図	103
第101図	重富遺跡Ⅲ区SI07実測図	104
第102図	重富遺跡Ⅲ区SI08実測図	104
第103図	重富遺跡Ⅲ区SI03・06～08出土須恵器実測図	105
第104図	重富遺跡Ⅲ区SI02・03・05～07出土土師器・瓦実測図	106
第105図	重富遺跡Ⅲ区SK03・04実測図	107
第106図	重富遺跡Ⅲ区北斜面西半出土遺物実測図	108
第107図	重富遺跡Ⅲ区北斜面東半遺構実測図	109～110
第108図	重富遺跡Ⅲ区北斜面東半出土遺物実測図	111
第109図	重富遺跡Ⅲ区谷底部遺構実測図	113～114
第110図	重富遺跡Ⅲ区谷底部（東側）出土遺物実測図(1)	115
第111図	重富遺跡Ⅲ区谷底部（東側）出土遺物実測図(2)	116
第112図	重富遺跡Ⅲ区谷底部出土遺物実測図	117
第113図	重富遺跡Ⅳ区遺構位置図	119～120
第114図	重富遺跡Ⅳ区SI09・12実測図	121
第115図	重富遺跡Ⅳ区SI09遺物出土状況実測図	122
第116図	重富遺跡Ⅳ区SI12遺物出土状況実測図	123
第117図	重富遺跡Ⅳ区SI09・12出土遺物実測図(1)	124
第118図	重富遺跡Ⅳ区SI09・12出土遺物実測図(2)	125
第119図	重富遺跡Ⅳ区SI10・14実測図	126
第120図	重富遺跡Ⅳ区SI10かまどおよび煙道部拡大図	127

第121図	重富遺跡Ⅳ区SI11実測図	128
第122図	重富遺跡Ⅳ区SI13実測図	128
第123図	重富遺跡Ⅳ区SI10・11およびⅤ区西半出土遺物実測図	129
第124図	重富遺跡Ⅳ区SK09および周辺ピット実測図	129
第125図	重富遺跡Ⅳ区SK06～08実測図	130
第126図	重富遺跡Ⅳ区SX01実測図	131
第127図	重富遺跡Ⅳ区SX01出土遺物実測図	131
第128図	重富遺跡Ⅳ区SX02・03実測図	132
第129図	重富遺跡Ⅳ区北東端構造物実測図	133～134
第130図	重富遺跡Ⅳ区SD01実測図	135
第131図	重富遺跡Ⅳ区SD02実測図	135
第132図	重富遺跡Ⅳ区灰原東側斜面出土遺物実測図	136
第133図	重富遺跡Ⅳ区明褐色土出土遺物実測図	137
第134図	重富遺跡Ⅳ区瓦窯跡および灰原地形測量図	139～140
第135図	重富遺跡Ⅳ区瓦窯跡実測図	141～142
第136図	重富遺跡Ⅳ区瓦窯跡焼成室瓦出土状況実測図	143
第137図	重富遺跡Ⅳ区瓦窯跡燃焼室瓦出土状況（第1面上面）実測図	144
第138図	重富遺跡Ⅳ区瓦窯跡燃焼室瓦出土状況（第1面および第2面）実測図	145
第139図	重富遺跡Ⅳ区瓦窯跡出土瓦実測図(1)	146
第140図	重富遺跡Ⅳ区瓦窯跡出土瓦実測図(2)丸瓦	147
第141図	重富遺跡Ⅳ区瓦窯跡出土瓦実測図(3)平瓦(1)	148
第142図	重富遺跡Ⅳ区瓦窯跡出土瓦実測図(4)平瓦(2)	149
第143図	重富遺跡Ⅳ区瓦窯跡出土瓦実測図(5)平瓦(3)	150
第144図	重富遺跡Ⅳ区瓦窯跡出土瓦実測図(6)平瓦(4)	151
第145図	重富遺跡Ⅳ区瓦窯跡出土瓦実測図(7)平瓦(5)	152
第146図	重富遺跡Ⅳ区瓦窯跡出土瓦実測図(8)平瓦(6)	153
第147図	重富遺跡Ⅳ-2区出土丸瓦実測図(1)	154
第148図	重富遺跡Ⅳ-2区出土丸瓦実測図(2)	155
第149図	重富遺跡Ⅳ区瓦窯跡灰原出土平瓦実測図(1)	156
第150図	重富遺跡Ⅳ区瓦窯跡灰原出土平瓦実測図(2)	157
第151図	重富遺跡Ⅳ区火葬遺構実測図	161

第152図	重富遺跡Ⅳ区炭素跡実測図	162
第153図	重富遺跡Ⅳ-2区遺構全体図	163~164
第154図	重富遺跡Ⅳ-2区SK10~13実測図	165
第155図	重富遺跡Ⅳ-2区遺物包含層出土遺物実測図(1)	166
第156図	重富遺跡Ⅳ-2区遺物包含層出土遺物実測図(2)	167
第157図	重富遺跡Ⅳ-2区遺物包含層出土遺物実測図(3)	168
第158図	重富遺跡Ⅳ-2区SK10出土遺物実測図	169
第1表	木棺墓計測表	78~79
第2表	瓦分類基準	158
第3表	瓦觀察表	159~160
第IV章 やつおもて古墳群		
第1図	やつおもて古墳群調査区配置図	192
第2図	18号墳主体部実測図	194
第3図	18号墳調査前墳丘測量図	195~196
第4図	18号墳調査後墳丘測量図	197~198
第5図	18号墳墳丘土層実測図	199~200
第6図	18号墳第1主体遺物出土状況実測図	201
第7図	18号墳第1主体実測図	203~204
第8図	18号墳第2主体実測図	205~206
第9図	18号墳第2主体掘り方実測図	207
第10図	18号墳第3主体実測図	208
第11図	18号墳墳丘出土土器実測図	209
第12図	18号墳墳丘他出土土器実測図	210
第13図	18号墳第1主体出土鉄器実測図	211
第14図	18号墳第2主体出土鉄器実測図	212
第15図	やつおもて古墳群Ⅱ区調査前地形測量図	213~214
第16図	やつおもて古墳群Ⅱ区調査後地形測量図	215~216
第17図	17号墳墳丘実測図	217
第18図	17号墳出土鉄器実測図	217
第19図	19号墳主体部実測図	218
第20図	19号墳墳丘実測図	219~220

第 21 図 20号墳主体部実測図	221
第 22 図 20号墳墳丘実測図	222
第 23 図 20号墳出土器実測図	223
第 24 図 21号墳出土器実測図	223
第 25 図 21号墳墳丘実測図	224
第 26 図 21号墳主体部実測図	225
第 27 図 22号墳墳丘実測図	226
第 28 図 22号墳主体部実測図	226
第 29 図 23号墳墳丘実測図	227
第 30 図 23号墳周溝内上土器実測図	228
第 32 図 23号墳出土器実測図	228
第 33 図 1号土壙実測図	229
第 34 図 1号土壙出土土器実測図	230
第 35 図 2号土壙実測図	231
第 36 図 3号土壙実測図	231
第 37 図 4号土壙実測図	232
第 38 図 5号土壙実測図	232
第 39 図 6号土壙実測図	233
第 40 図 1号牛墓実測図	233
第 41 図 2号牛墓実測図	234
第 42 図 18号墳の築造過程	237
第 1 表 弥生土器・須恵器・土師器観察表	235
<b>第V章 柳ヶ谷遺跡</b>	
第 1 図 柳ヶ谷遺跡の位置	249
第 2 図 発掘調査前の地形	250
第 3 図 石組み発掘調査前の状況	251
第 4 図 石組み周辺の発掘状況	252
第 5 図 柳ヶ谷遺跡土層断面図	252
第 6 図 土壙状遺構推定復元図	253
第 7 図 柳ヶ谷遺跡発掘後の地形	254



## 第Ⅲ章 重富遺跡

### 第1節 調査の概要

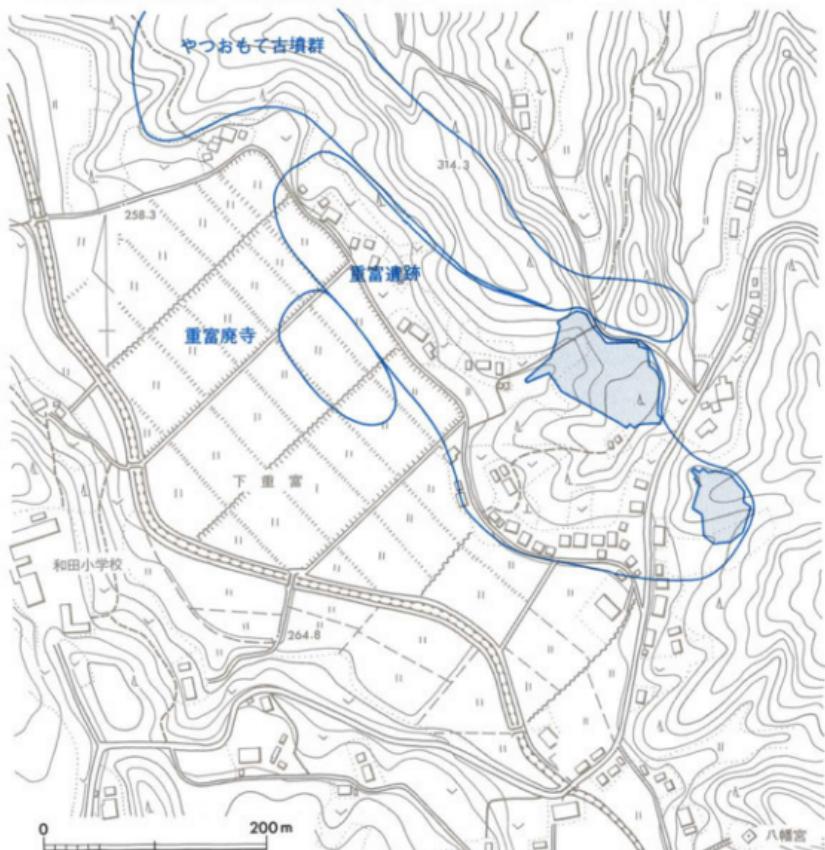
重富遺跡は、那賀郡旭町大字重富706-19外に所在する、古墳時代から中近世にわたる複合遺跡である。江川支流八戸川水系の重富川と本郷川に挟まれた、標高280mから310m程度の比較的起伏の小さい丘陵上に広がっており、同じ丘陵上のすぐ北西側にはやつおもて古墳群と新塚古墳群が続いている。また、丘陵南西側の水田には、昭和48年の圃場整備の折りに軒丸瓦等が発見された重富庵寺跡が隣接している（第1図、図版1）。

重富遺跡が立地するこの丘陵の表層地質は、新生代新第三紀鮮新世から第四紀の洪積世にかけての半固結状堆積物、すなわち海成粘土層を含む礫・砂・泥が互層に堆積した堆積層で、石央山間部を広く覆っている中生代から古第三紀の酸性火山岩マグマの活動によってできた凝灰岩質岩石や、深成岩の花崗岩質岩石とは異なっている。むしろ、江津市や大田市を中心に分布する都野津層に相当し、これに含まれる粘土は良質で瓦粘土などに利用されることも多いが、この地域においては砂礫層が優勢で、クサリ疊化している。土色は白色・黄褐色・赤褐色・褐色・紫色とさまざまである。

重富遺跡の発見は、中国横断自動車道広島浜田線の建設ルートの決定に伴い、昭和56年、島根県教育委員会が実施した一部試掘を含む分布調査によるもので、その際にも遺跡地内から多量の奈良時代遺物を採集している。自動車道は遺跡北東端の尾根上を走り抜ける形で計画されており、発掘調査には3年を要した。昭和63年度には、まず、遺跡の性格を把握し、発掘調査の必要な部分を最小限に絞り込むため、遺構のありそうなところを中心にトレンチ調査を実施した。そして31本のトレンチ調査の結果、9本のトレソチから遺構ないし遺物が検出され、3箇所4調査区、約7,000m<sup>2</sup>の調査範囲が確定した。平成元年度には、主要地方道浜田作木線を挟んでその東側のI区と西側のII区の本調査を実施した。I区では尾根頂部から南谷部で検出した遺構のほかに、北側部分でも溝状遺構や加工段などの遺構の広がりが認められ、II区の調査では、II区とIII区の間の遺構がないと考えていたところにも遺構・遺物が続いているのが確認された。また、この年新たに、この地点にバス停留所の建設が具体化して、南西側に大幅にルートが拡幅され、これに伴って調査対象地も大幅に増加したため、平成2年度は、その増加分を含めた3箇所（III区、IV区、IV-2区）約3,700m<sup>2</sup>の調査を行うことになった（第2図）。発掘調査に当たっては、調査区域全体に国土座標の軸方向に合わせた10m四方の方眼を組み、これをもとに遺構の実測や遺物の取り上げを行った。また、平成元年度には発掘調査期間の短縮を図るために、空中写真測量による遺構図化を実施した。

## 第2節 I 区 の 調 査

I区は重富遺跡の東端に位置し、尾根の頂上を挟んで南北両斜面に跨っている。南側の谷は南西に開いた谷で斜面は傾斜がきつく、谷底部はかつて畠地として利用されていたようである。東側斜面には調査以前から古墳の存在が知られており、用地買収の際に補償の対象として扱われたようで、墓壙はすでに掘られ、墓壙の上にあったと考えられる自然石が一角に寄せ集められていた。調査は、この古墳も含めて斜面部では遺物包含層を掘り下げてその下の遺構検出を行い、谷底部では土層ご



第1図 重富遺跡の全体図と今回調査地点

とに遺物の取上げを行った。また、谷奥部斜面では長柄円形の炭窯跡を発掘した。

尾根頂部では、広い範囲にわたって奈良～平安時代の須恵器片の出土が認められたほか、集石を伴った火葬墓と考えられる土壤を検出した。尾根の北側斜面は本郷川の沖積地から南に向かって深く入り込んだ谷の最深部にあたり、斜面に尾根筋と同じ方向に走る溝状遺構やそれに続く加工段等を確認した。

以下に南側谷部、尾根頂部、北側斜面の三地区に分けて、検出した遺構、遺物について概要を報告する。



第2図 重富遺跡調査区設定図

## 1. 尾根頂部の遺構、遺物

### (1) 集石墓

尾根頂上部とそこから北側に約1m下がった斜面から、合計13基の、集石墓と考えられる小土壙を確認し、尾根頂部のものを1号集石墓、北側斜面に並んだものは北西側から2号～13号集石墓と呼称することにした。いずれの土壙からも遺物は出土しておらず、年代を明らかにすることはできなかった。

**1号集石墓** 尾根頂上部でみつかった集石墓で、調査前から集石の上面の一部が地表面に露出していた。表土層を除去したところ、南北3.5m、東西3mの範囲に、長さ40cm程度までの自然石100個あまりが梢円形に散らばっており、特に中央付近から内側にかけて集中して残っていた。集石と地山面の間には褐色粘質土が堆積し、地山面には集石の中央に相当するあたりに、長径1m、短径0.9mの南北にやや長い梢円形の土壙が確認された。土壙は深さ約30cmで底面に平坦面があり、全体に捕鉢状を呈している。集石は土壙中ほどまで達しており、土壙内からは遺物は発見されなかつた（第5図、図版3、4-1・2）。

なお、集石のほぼ中央部で、石と石の間から刀子片が3点出土した（第6図）。長さ8.2cm、4.6cm、7.0cmで、いずれも脊と刃があり、同一個体と考えられるがどれも接合できない。切先は丸みを帯び、闊は曲線を描く。茎と考えられるところも刃部同様、片側が薄くなっている。時期は不明。

**2号集石墓** 土壙列の北半分にはほぼ等間隔に一列に並んだ4基のうち、北端に位置するものである。平面形は長径40cm、短径23cmの長梢円形で、深さは22cmと浅い（第7図）。

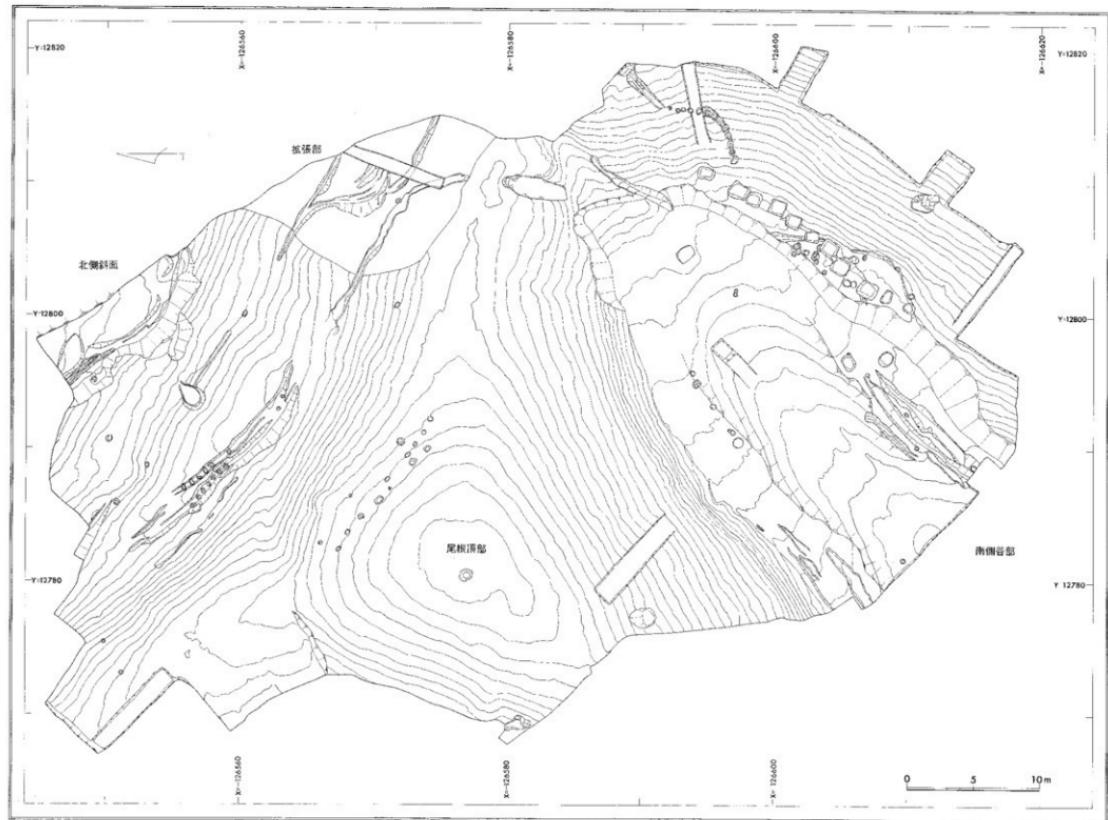
**3号集石墓** 長径40cm、短径32cmの梢円形を呈し、深さは約60cmである。土壙は垂直ではなく、やや頂上側に斜めに掘り込まれており、底面はほぼ水平である。

**4号集石墓** 上面で長径45cm、短径25cmのやはり梢円形を呈し、底面は短径20cmとやや狭くなるが頂上側に段をなして広がっており、底部平面形は円形に近い。3号集石墓と同様に底面に褐色の粘質土が堆積している。

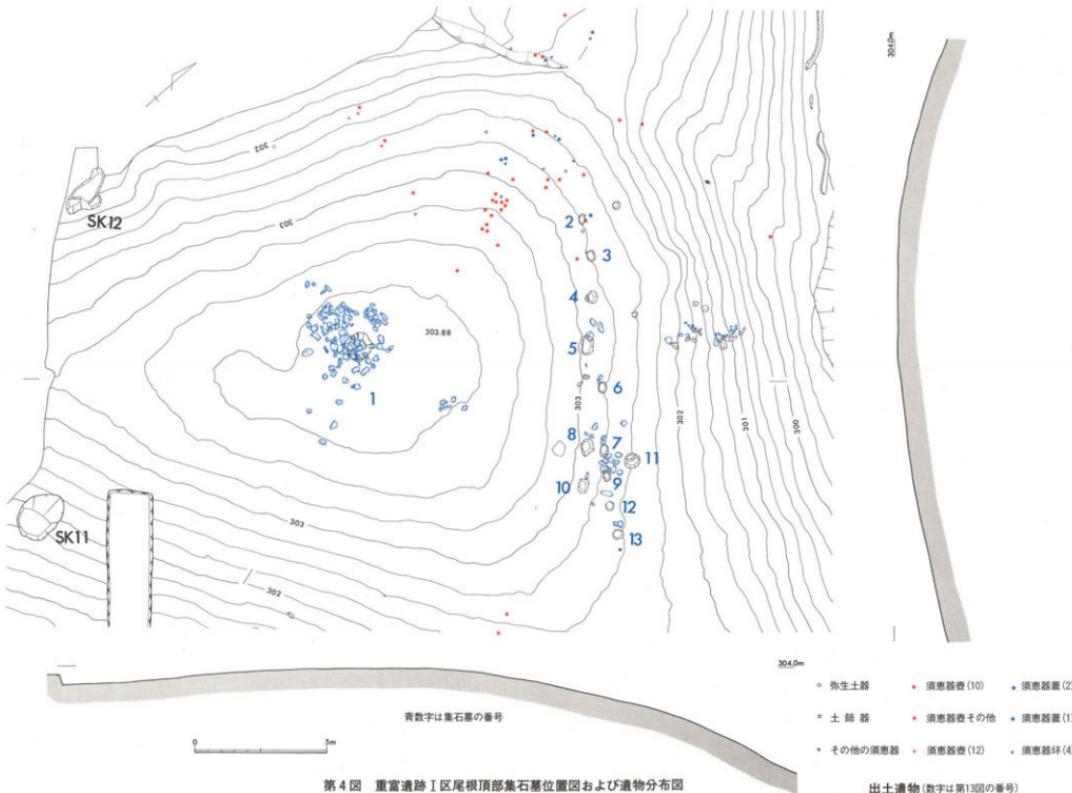
なお、4号集石墓の北東側約1.4mのところと、2号集石墓の北側約1mのところに直径がそれぞれ20cmと30cmの小ピットを検出した。どちらも同じ高さのところに位置しており、2～4号集石墓との幾何学的位置関係から、これらと何らかの関係があるピットと考えられる。

**5号集石墓** 地山面よりもやや浮いた状態で3個の自然石が残る。土壙は平面形が隅丸長方形を呈し、長さ約70cm、幅約40cmである。深さ約55cmで、底部近くの頂上側にわずかながら帶状に段が設けられている（第8図、図版5-2）。

**6号集石墓** 5号集石墓の東、約1mのところに位置し、5号集石墓とよく似た形態だがそれよりもひとまわり小さい土壙である。長さ43cm、幅25cm、深さ約50cmで、土壙直上に小自然石数個が



第3図 重富遺跡I区地形測量図(終了時)



第4図 重富遺跡I区尾根頂部集石基位置図および遺物分布図

出土した。

#### 7号集石墓

土壤列の南半には、標高差で50cmの幅の間に3段に渡って7基の土壤が掘り込まれており、7号集石墓はその内の中段北端に位置している。平面形は長径48cm、短径32cmの梢円形を呈し、垂直に掘り込まれた土壤は深さ約60cmにも達している。

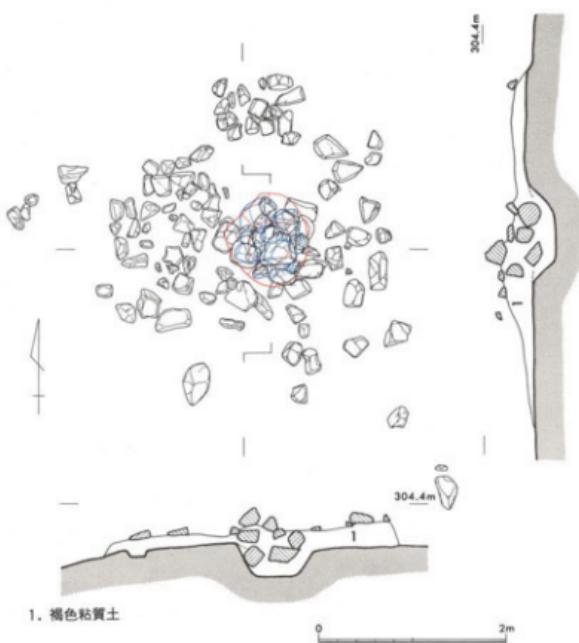
#### 8号集石墓

7号集石墓のすぐ上方にあり、長径約60cm、短径約45cmである。二段に掘り込まれており、底部の幅は約10cmとかなり狭くなっている（第9図）。

**9号集石墓** 平面形は長径36cm、短径24cmの梢円形を呈し、深さは約40cmである。頂上側中ほどに深さにやはり段を有する。土壤上面には人頭大までの大きさの自然石が10個程度固まっていた（第10図）。

**10号集石墓** 9号集石墓の斜面上方にあり、平面形は隅丸長方形を呈する。長さ52cm、幅38cm、深さ約40cmで、9号とは逆に斜面下方の壁部分にわずかな段を作りだしている。

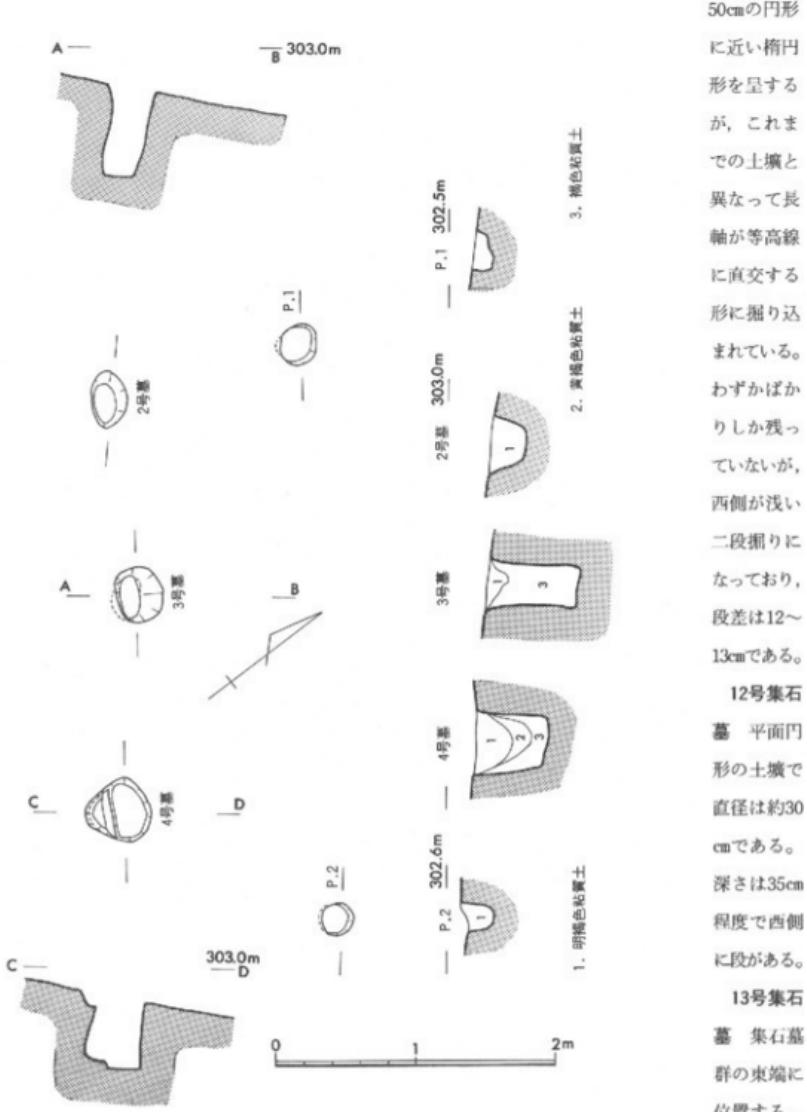
**11号集石墓** 9号集石墓の北側にあり、平面形は長径60cm、短径



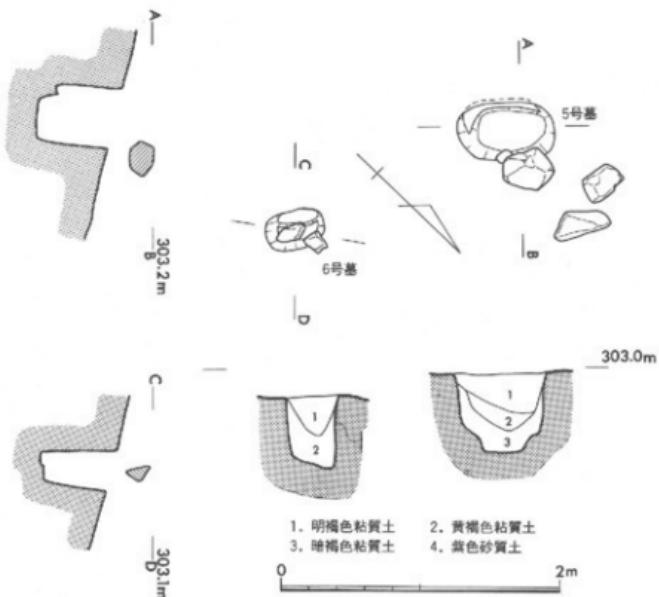
第5図 重富遺跡I区1号集石墓実測図



第6図 重富遺跡I区1号集石墓出土物実測図



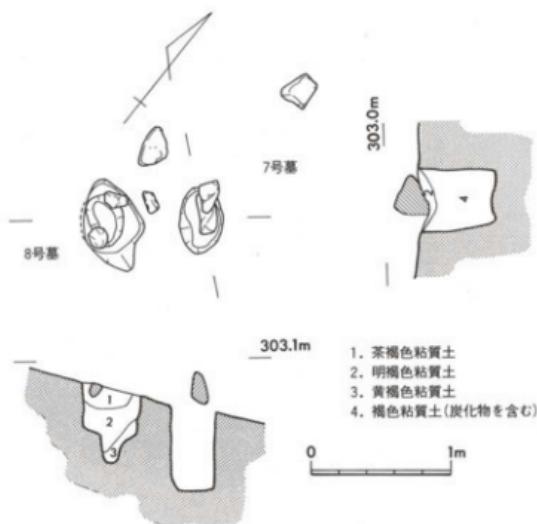
第7図 重富遺跡I区2~4号集石墓実測図



第8図 重富遺跡I区5・6号集石墓実測図

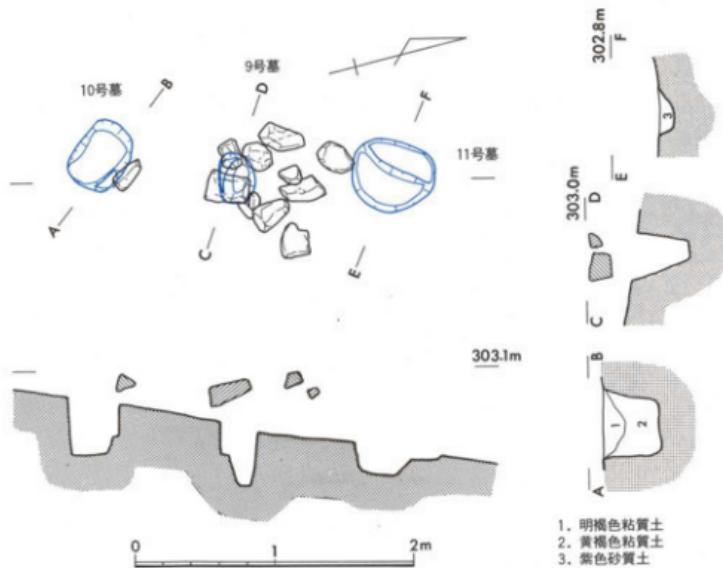
の円形の土壙であるが、深さ10cm程度しか残っておらず、土壙上には自然石3個が重なって出土した（第11図）。

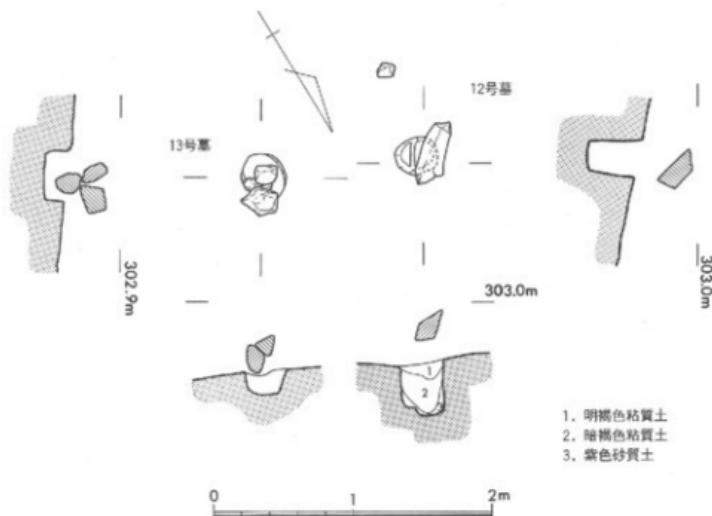
以上13基の集石墓は、その埋土中から骨片など墓壙と即座に決定づけられるような遺物は発見されなかった。しかし、1号集石墓を除くといずれの土壙も形態や規模が近似しているうえ、斜面のほぼ同じ高さのところに連続して掘り込まれているなど、墓壙としての要素を色濃く示しており、集石墓の可能性が強い。土壙の形態から、平面形が大形の円形を呈する第1群（1号集石墓）と小形楕円形で底の深い第2群（2号～13号集石墓）の2種類に分けられるが、どちらも火葬骨を納めたものと考えられる。これらの集石墓のうち、実際に集石が伴っているものは全体の69%にあたる9基である。しかも、1号集石墓を除いてその大半は、数個の石が土壙検出面からかなり高い位置で出土したのみである。このことは、本来の土壙が現在の検出面よりももっと高いところから掘り込まれ、そもそも土壙の直上に置かれていた集石も土砂の自然流出とともにその大半が流れ落ちてしまつたことを推測させる。ただし、8号および9号集石墓としたものは土壙底部が窄んでおり、13号集石墓は底面が平坦なものと土壙が著しく浅く、集石墓でない可能性もある。



第9図 重富遺跡I区7・8号  
集石墓実測図

第10図 重富遺跡I区9~11号  
集石墓実測図

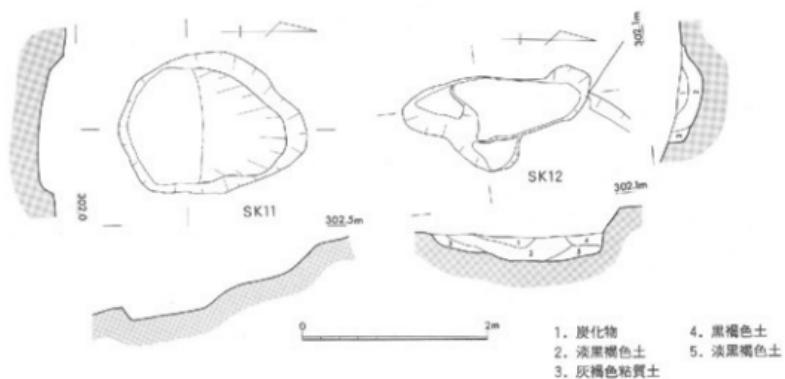




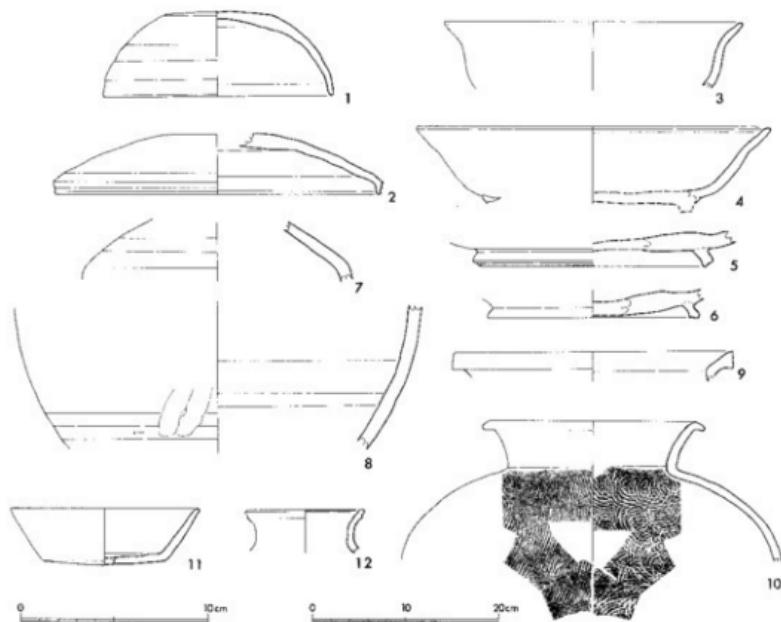
第11図 重富遺跡I区12・13号集石墓実測図

## (2) 土 壤

1号集石墓の西側の尾根部で土壤を2基検出した。頂上を挟んで南北両斜面に各1基ずつあり、南側のものをSK11、北側をSK12とした(第4図)。SK11は平面形が不整楕円形を呈しており、斜



第12図 重富遺跡I区尾根頂部SK11・12実測図



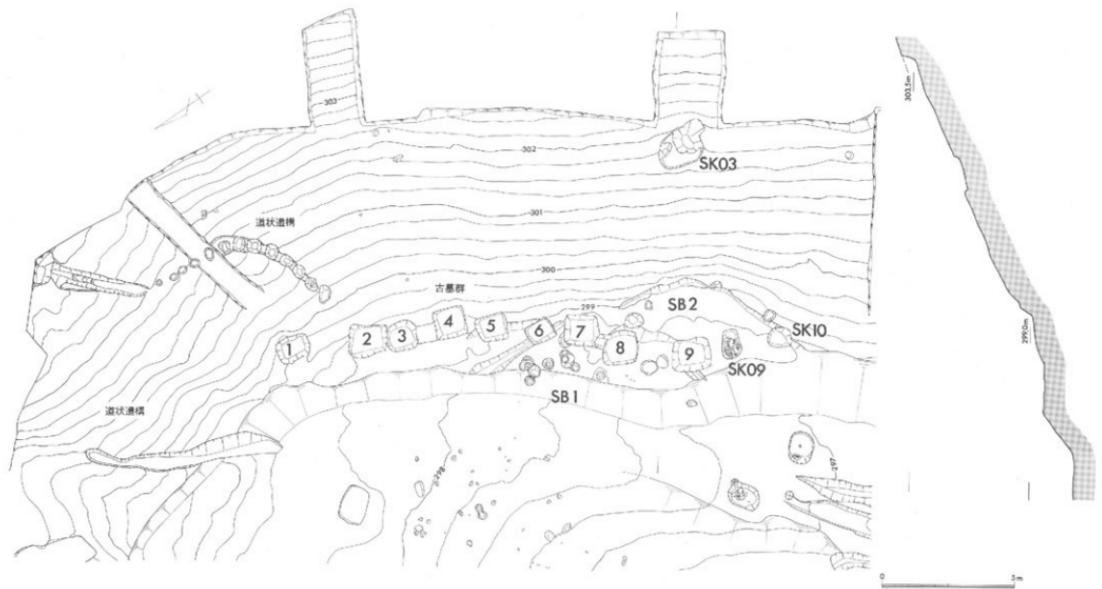
第13図 重富遺跡I区尾根頂部出土物実測図(11は東側斜面出土、10・12のみ1/6)

面の傾斜に添って20~30cmの深さに掘り窪めただけのものである。SK12は、等高線に直行するよう細長く掘られた不整形な土壇で、南と東に若干の段があるものの底面は舟底状に丸く作られている。2基とも遺物が含まれておらず、時期、性格ともに不明である(第12図、図版6-1・2)。

### (3) 尾根頂上部遺物包含層

1号集石墓のある尾根頂上部をやや北側に下ったところで、地山上面に堆積した茶褐色土から須恵器壺、蓋環類の破片が多数出土した(第4図)。最も多く出土したのは第13図10をはじめとする壺類で、数個体分が確認された。蓋環類では、同図2の直立した端部におそらく宝珠状つまみがつく薄手の蓋に、同じく薄手で、体部上半で一度屈曲してさらに外反する口縁がつく壺類(3・4)がそれぞれ数個体分出土した。年代ははっきりしないが9世紀ごろと考えられる。これらの遺物と集石墓との関係は不明である。

なお、このほかに、古墳時代後期の器高が高くかえりやつまみのつかない蓋(1)が1点出土したほか、土師器や弥生土器(9)もわずかながら出土した。

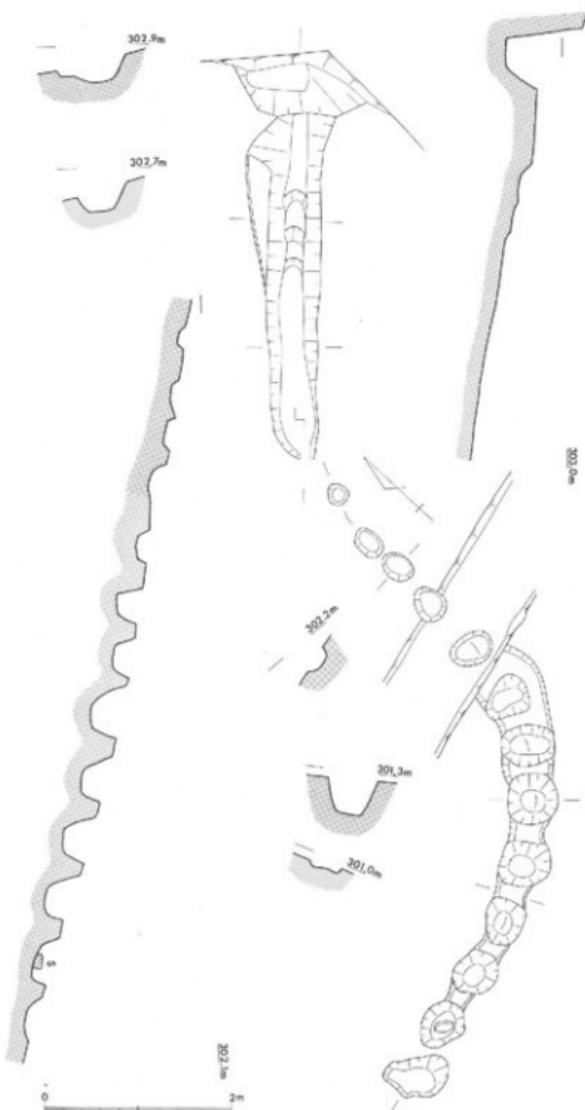


\*古墓群の数字は済標番号を示す。

第14図 重富遺跡Ⅰ区南谷部東斜面遺構位置図



第15図 重富遺跡1区SB1・2実測図



第16図 重富遺跡I区南谷部道状遺構実測図

## 2. 南谷部の

## 遺構遺物

## (1) 掘立柱建物

## 跡

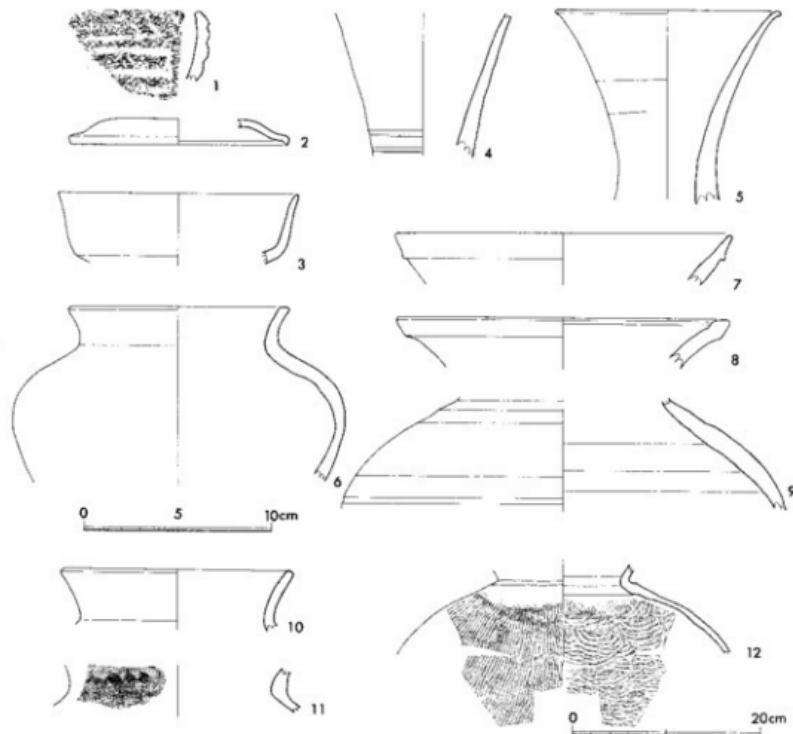
東斜面の裾部に平坦面を作り出し、それぞれの段に掘立柱建物を建てたものである。北西側の半分以上を谷底部の畑地造成の際に失っており、近世末の土葬墓によつても大きく乱されている(第14図、図版7)。

平坦面は全部で三段と考えられるが、北端の段はごくわずかに残るのみである。中央の一番低い段をSB1、その南の段をSB2とした。

**SB1** 平坦面の大半が無くなっているため、全体の形状は描めない。南東隅だけでみると平坦面は方形ではなく、145°程度

に大きく開いた多角形を呈している。東辺には壁面があったと考えられるところに、幅40~50cm、深さ7~10cmの溝が走り、平坦面の南端壁下にもわずかながら溝が確認された。柱穴は平坦面で10個余り、段の下から2個検出したが、建物として組めるのは桁行3間(5.6m)の1棟と、桁行、梁間ともに1間分(1.6m×1.8m)1棟の合わせて2棟である。柱穴の掘り方は円形で、直径40~50cm、深さは約50cmである。柱の大きさは痕跡が確認できるところで約20cmである。平坦面や柱穴から遺物は出土していない(第15図)。

**SB2** 平坦面はSB1と同様の形に作り出されているが、壁下に溝は確認されなかった。平坦面上に柱穴はほとんどなく、SB1側と南端壁面部に若干確認されたのみである。復元できる建物は桁行2間(2.8m)以上×梁間2間(4m)以上の1棟である(第15図)。平坦面に堆積した黒色土から須恵器壹片(第17図12)と坏片(同図3)が出土している。



第17図 重富遺跡Ⅰ区南谷部東斜面出土遺物実測図(3-12: SB2, 2: 6号古墓)

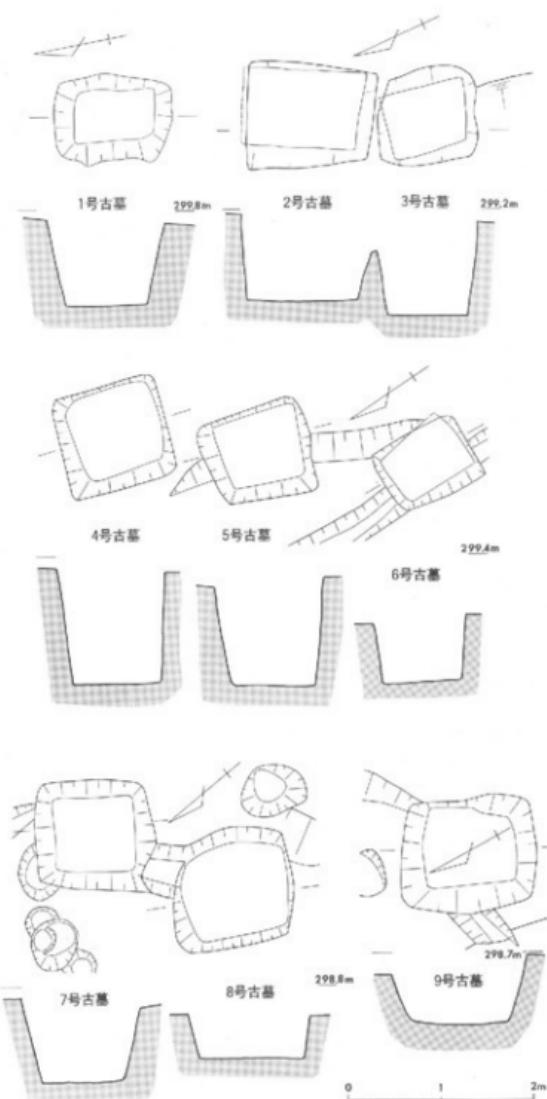
## (2) 道状遺構

南谷奥部の斜面に二種類の道状の遺構を確認した(第14図)。西側のものは底面を丸く削った溝状のもので、東側のものは、その底面に深さ20~30cmの円形のピットを掘り連ね、階段状にしたものである(第16図)。この階段状にピットが連なった遺構は、この南谷部だけでなく、北側斜面やⅢ区南斜面でも確認され、かつては遺跡地内に広がっていた人々を結ぶ道として利用されていたことが推定される。

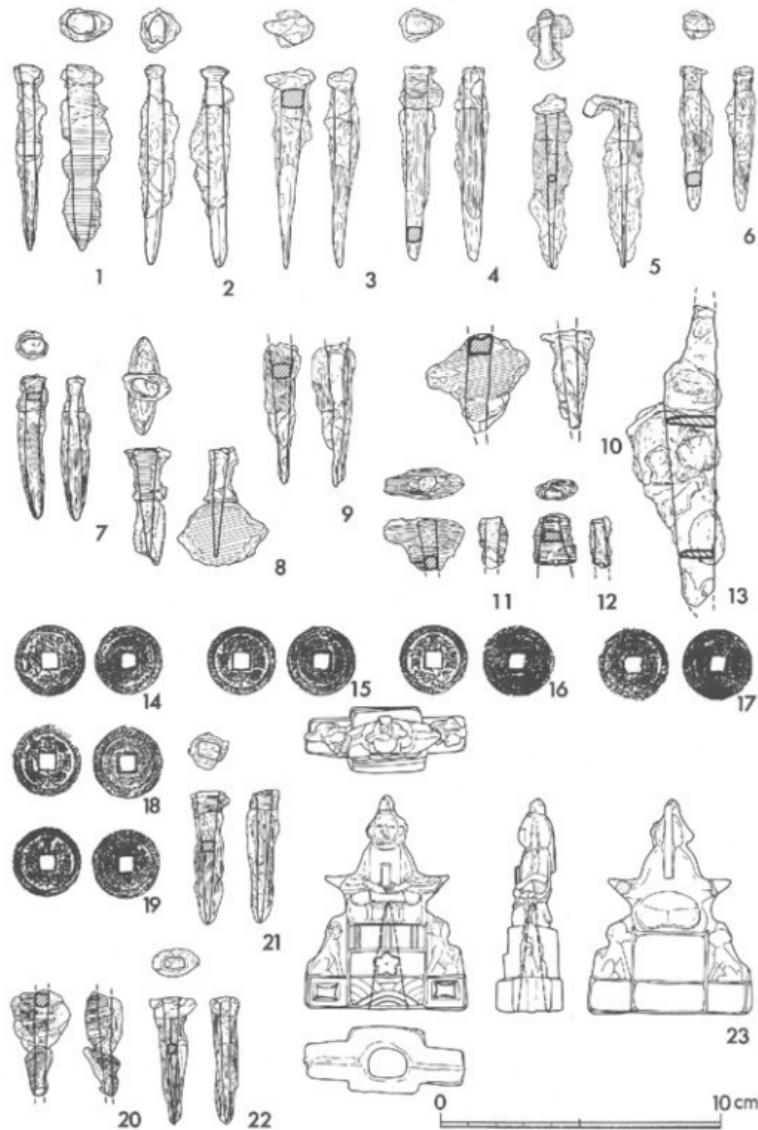
## (3) 東斜面出土

## 遺物(第17図)

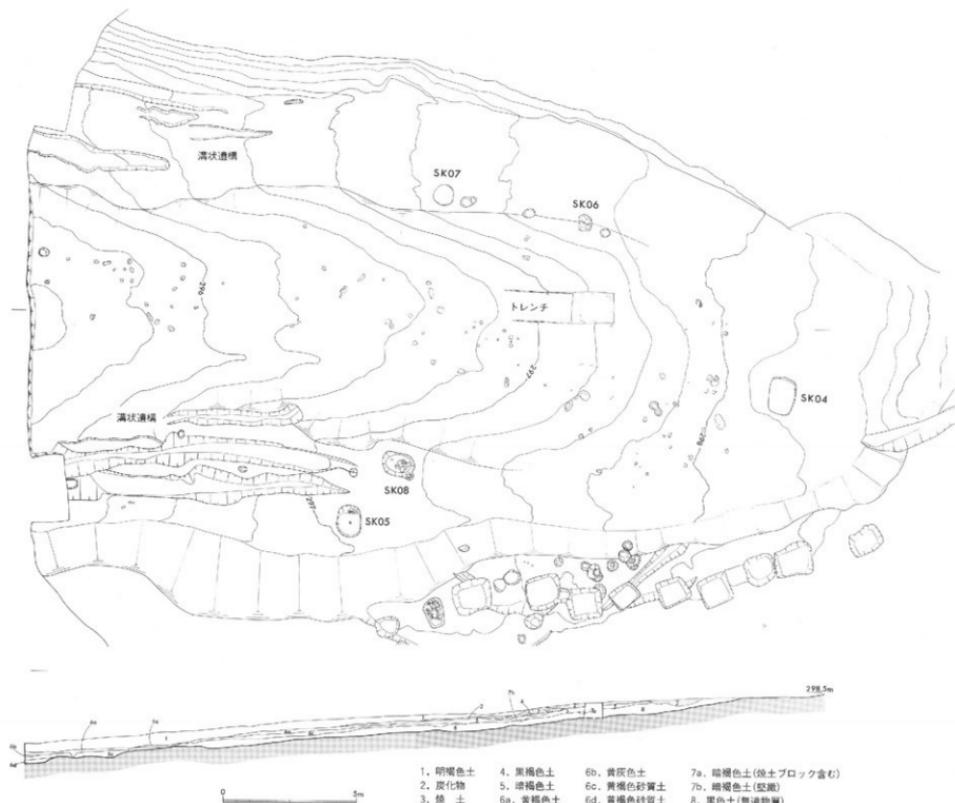
裾部の平坦面付近を中心として、東斜面の広い範囲で須恵器などを含んだ黒色の遺物包含層が検出された。遺物の大半は8~9世紀代の須恵器片で、なかには



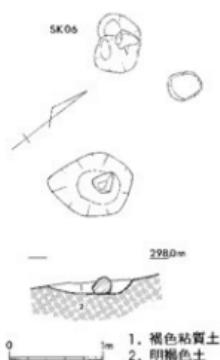
第18図 重富遺跡I区古墓群実測図



第19図 重富遺跡Ⅰ区古墓出土遺物実測図(1~19:2号墓, 20~22:5号墓, 23:6号墓)



第20図 重富遺跡I区南谷底部地形測量図



第21図 重富遺跡 I区  
明褐色土上面SK02実測図

1のような縄文土器片も認められる。2は口径が11.7cmの小形の蓋で端部が短く直立するものである。4・5は長頸壺の頸部から上の部分で、どちらも口縁端部まで直線的に開くものである。6は比較的緻密な胎土で焼成も良好な短頸壺である。外面全体に自然釉が著しく、胴部下半にはやや銀色に輝く薄い自然釉がかかる。7～11はいずれも壺片で、7は口縁端部が薄く尖り、外縁部も小さく突出している。8は胸邑のIV型式1段階の壺、あるいは、平城宮土器Ⅱ～Ⅲの須恵器壺の口縁部に形態が近似し、おおよその年代を推定することができる。これらの壺類には6と同様に自然釉が著しい。

#### (4) 古墓群

東斜面裾に、崖面に並行して合計9基の土墳古墓群が確認された(第14図)。北端の1号古墓が最も高い位置にあり、2号、3号と順に低い位置に掘り込まれている。土墳はいずれも平面形が方形で、土墳上面で計ったときの大きさは最小のもので80cm×90cm、最大のもので1.2m×1.3mである。現状での深さは1～5号古墓が1.1m程度、6～9号古墓が50～60cmである(第18図)。これらの古墓は、重富遺跡のすぐ北隣で平成元年度に調査した後河内古墓群と同様、埋葬後、付近の自然石を積み上げて標石としていたようだが、発掘調査前に用地買収の補償対象となったようで、既にあらかじめ掘り上げられ、自然石も片端へ寄せ集められていた。一応、各土墳を完掘したところ、1・3・5号古墓から鉄釘類が、2号古墓からは鉄釘類のほかに刀子1本と古錢(寛永通宝)6枚が出土した(第19図)。鉄釘はいずれも断面方形で頭部を折り返しており、長さには7cm前後と5cm前後の二種類がある。6号古墓からは土製の人形(土天神)が出土した(同図23)。二枚に合わせた型にはめて作った素焼きの人形で、高さは7.6cmである。三段の雑段の上に座り、段の両側に一対の狛人が侍っている。

#### (5) 土 墳

掘立柱建物跡の斜面上方で土墳SK03を検出した。数回にわたって掘り込まれたようで、平面形や底面が不整形である。南端の底面に近い部分で弧状に伸びる焼土が確認された。遺物は含まれていない(第24図上段左)。

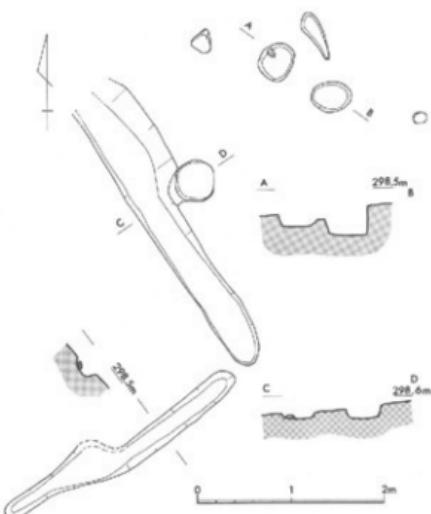
#### (6) 炭窯跡(第33図、図版13-2・3、14-1・2)

谷奥部斜面から平面積117m<sup>2</sup>の炭窯跡を確認した(第3図)。全長約5m、最大幅1.7mで、焼成室の左右両壁の各々2箇所に間仕切り風の突出部が作り出されており、窯跡中軸線上で前室の長さ1.9m、中室長1.2m、後室長1.1m、煙道長0.9mである。後室上部壁面のカーブの具合から大

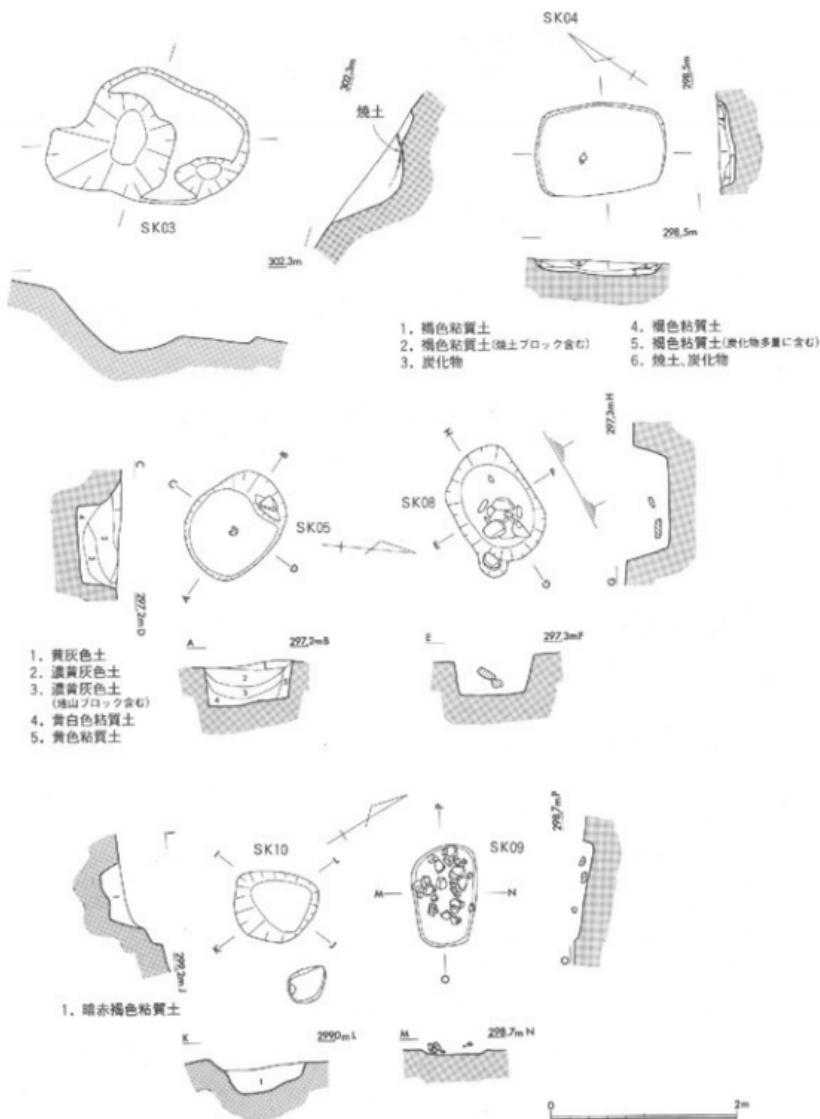


第22図 重富遺跡Ⅰ区南谷底部焼土層  
および下面遺構位置図(図は右下図枠内の縮図)

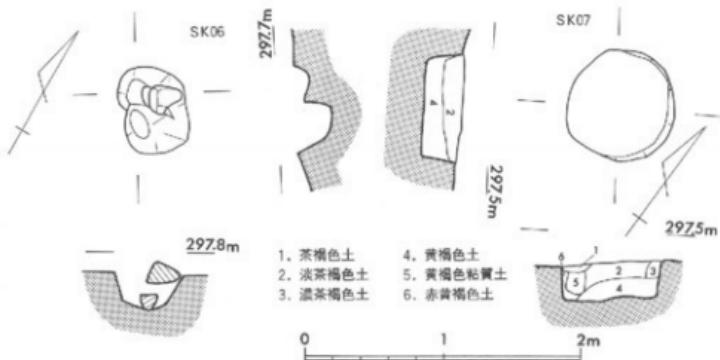
井部までの高さは1.2~1.3mと考えられる。奥壁部の煙道には基部に河原石が埋め込まれており、窯壁の強化が図られている。床面には全体に炭片が残存しており、その上に焼けた天井が崩落していた。また、壁面下半は炭化物の付着による黒変や熱による赤変が認められた。窯跡内から年代のわかる遺物は出土していないが、谷底部でこれに関係すると考えられる焼土塊が近世陶磁器類と出土することから、それらとはほぼ同時期と考えて差し支えなさそ



第23図 重富遺跡Ⅰ区南谷底部焼土層下面遺構実測図



第24図 重富遺跡Ⅰ区南谷部土壤実測図(1)



第25図 重富遺跡Ⅰ区南谷部土壤実測図(2)

うである。ちなみに、社団法人日本アイソトープ協会にC<sup>14</sup>の年代測定を依頼した結果は次のとおりである。

220±70yB.P. (西暦1730±70年) (コード) N-5899

### 3. 南谷底部の遺構、遺物

#### (1) 土層 (第20図、図版10-2)

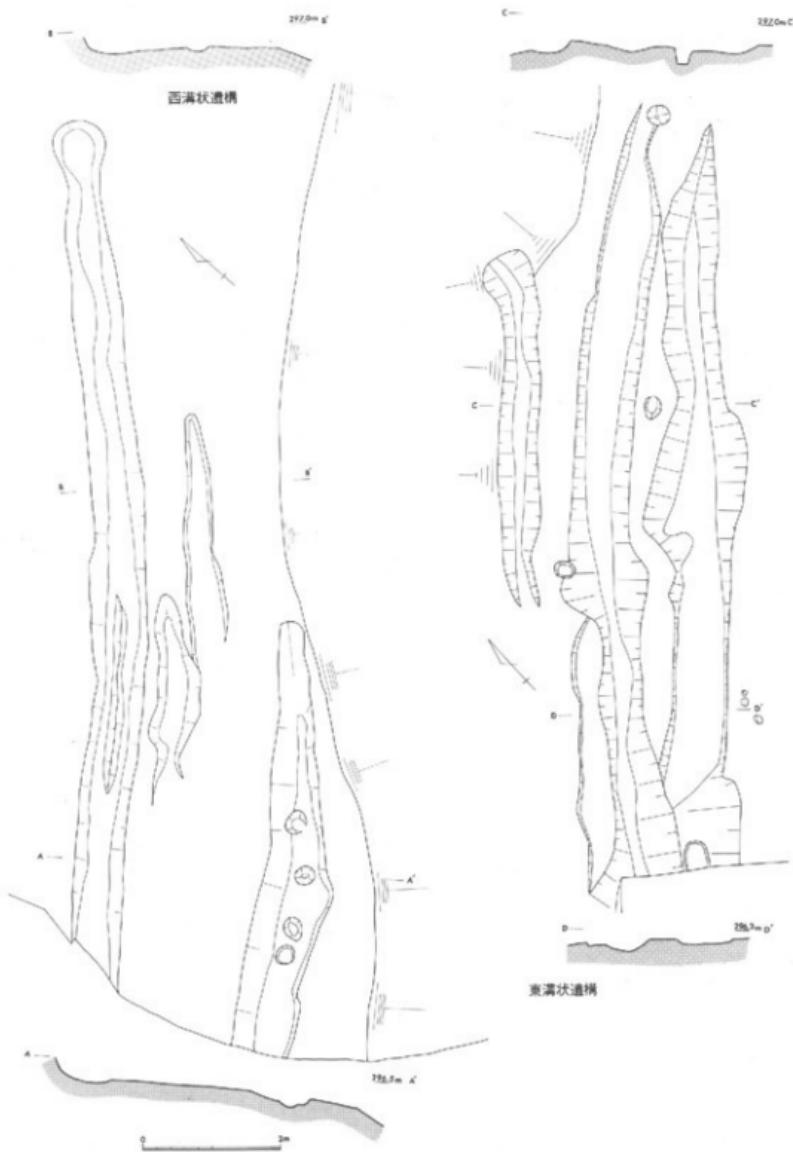
谷の中央に設定したベルトで観察したところ、地表下40~50cmのところに厚い焼上層と炭化物層があり、その下に遺物を包含する黄褐色土(6層)、暗褐色土(7層)が堆積することが判明した。また、発掘の結果、焼上層の明褐色土上面と焼土下面に遺構があり、斜面との間の平坦面(地平面)にも遺構が残っていることが判明した。

#### (2) 明褐色土上面

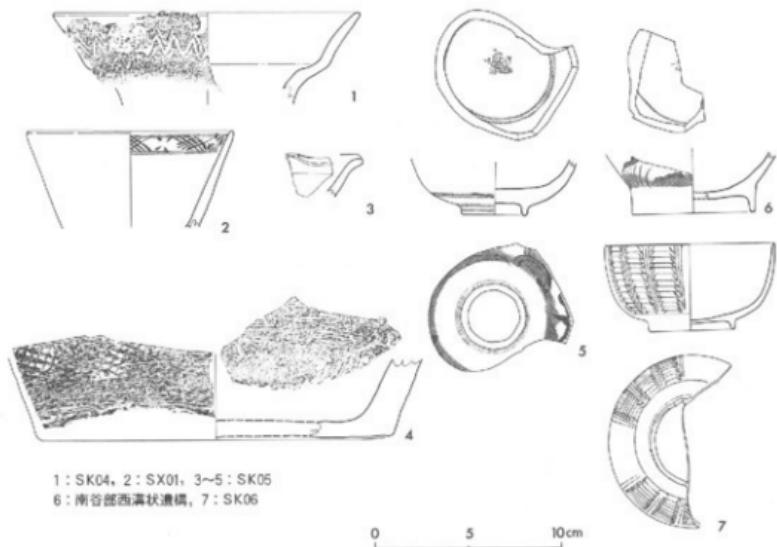
谷奥部平坦面に近いところで土壤SK02を検出した。長径90cm、短径70cmの楕円形を呈し、深さは20cm程度である。円窓1個が出土したのみで時期、性格等は不明である(第21図)。

#### (3) 焼土層下面

谷底部に堆積した焼上と炭化物の層の範囲は、長径10.5m、短径6.5mの楕円形で、斜面の傾斜方向に細長く伸びている。同層中からは遺物は出土していない。下面の遺構は、正確には同層南西側の明褐色土下面で確認したもので、溝とピットがある(第22図)。溝は直角に2本あり、それぞれ3m前後の長さで、幅は40~70cm、深さは10~15cmである。ピットは直径約40cmの円形を呈するものが全部で3個あり、比較的固まっている(第23図、図版10-3)。



第26図 重富遺跡Ⅰ区南谷部溝状遺構実測図



第27図 重富遺跡I区土壙・溝状遺構出土遺物実測図

## (4) 平坦面

土壙5個と溝状遺構7本を確認した(第20図)。また、SB2の平坦面でも2個の土壙を検出した(第14図、図版10-1)。

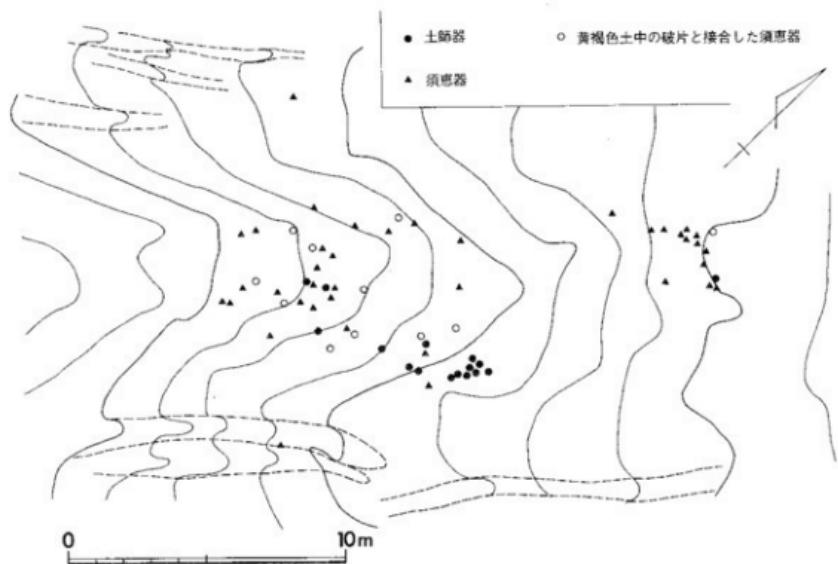
**SK04** 谷奥部に1個だけあったもので、長さ1.4m、幅1mの長方形を呈し、土壙底面に厚さ5cmの炭化物層が堆積する。流入土の褐色粘質土から須恵器残片が出土している(第24図上右)。

**SK05** 東側平坦面にあり、長径1.2m、短径1mの梢円形の土壙で、西側壁面に段があり、底面は平坦である。土壙内から陶磁器片が出土している(第24図中段左、図版11-2)。

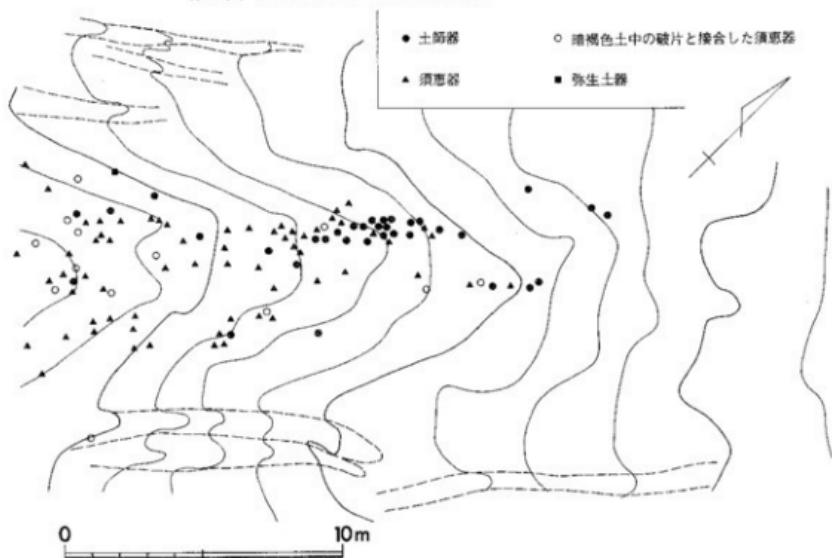
**SK06** ブラン検出当初、梢円形の土壙と考えられたが、発掘の結果、2個のピットが重なったような形状になった。中から碟と磁器碗が出土した(第25図左、図版12-1)。

**SK07** 西側平坦面の中央にあり、直径約90cmのはば正円である。深さは25~30cmで底面は平らである。遺物は含まれていない(第25図右)。

**SK08** SK05と長軸が直交する向きに並んだ土壙で、規模もSK05とはほぼ同じである。北東コーナーにやはり階段状の段がある。土壙内には扁平な碟10個あまりがあったが、遺物は出土していない(第24図中段右、図版11-3)。



第28図 重富遺跡I区南谷底部暗褐色土出土遺物分布図

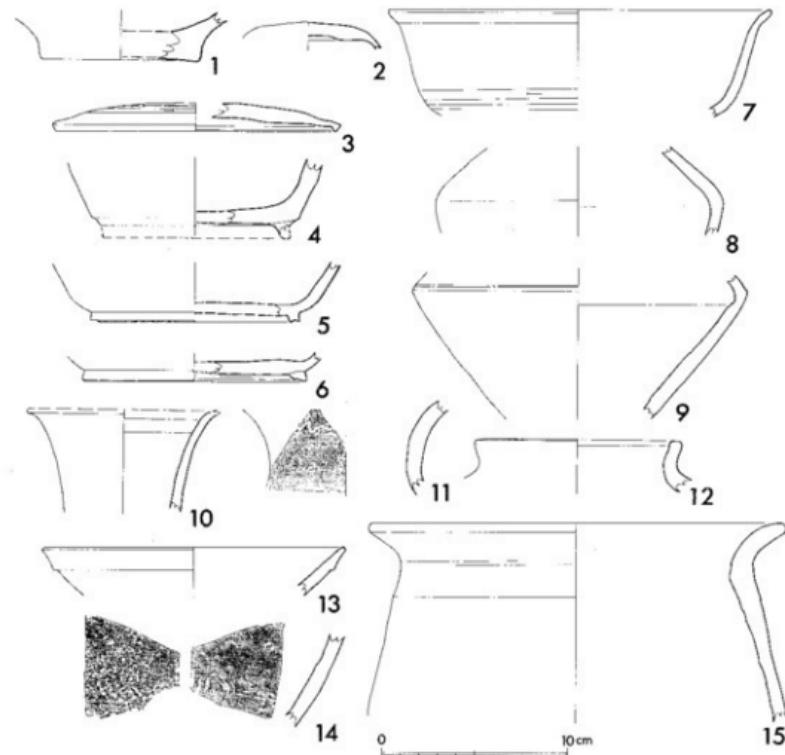


第29図 重富遺跡I区南谷底部黄褐色土出土遺物分布図

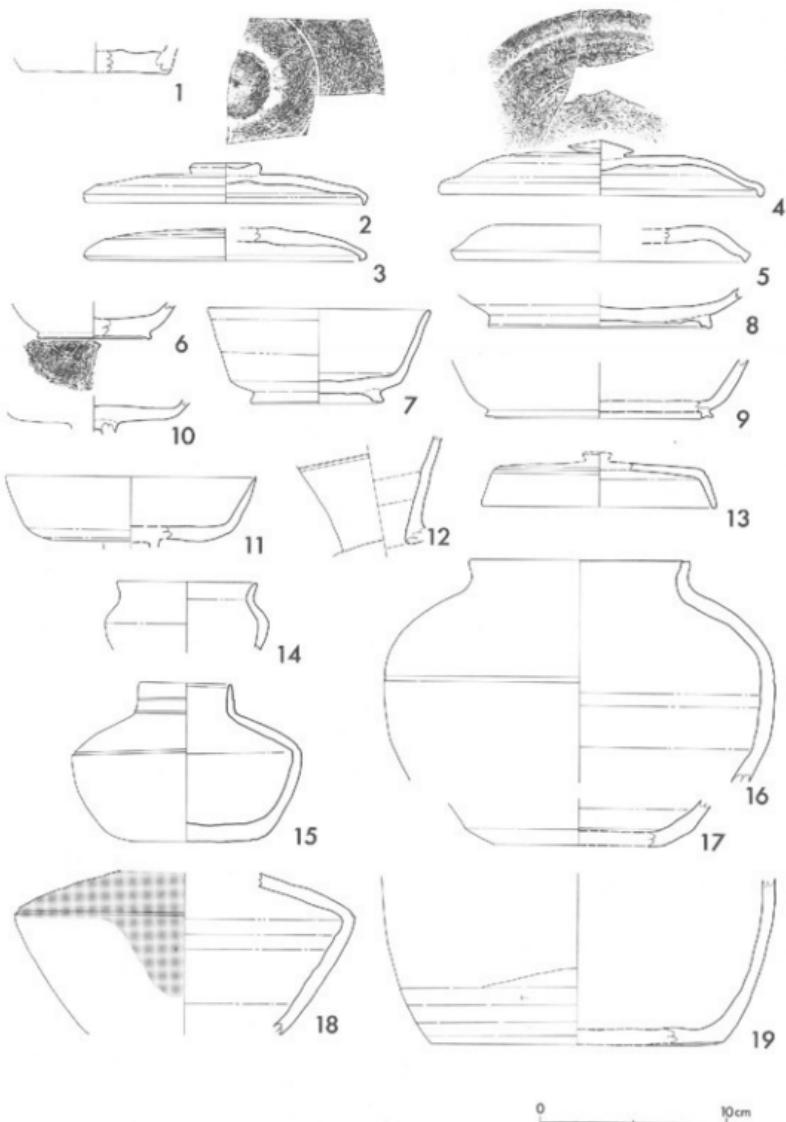
SK09 SB2 平坦面上にあり、長径1.1m、短径0.7mの楕円形を呈している。土壇はかなり浅く、内部には10cm以下の円礫が多数含まれていた（第24図下段右、図版12-2）。

SK10 SB2 南壁部分で発見した土壇で、平面形は一辺が80cm程度の丸みを帯びた三角形を呈する。底面は平坦でなく、遺物も含まれていなかった（第24図下段左）。

溝状遺構 東西両平坦面に、平坦面の幅いっぱいに3~4本の溝状の遺構が並んでいるのが確認された（第20図）。東側のそれは、長さが9m前後、幅は最大で1.1m程度あり、比較的しっかりしている。一方、西側のそれは幅が狭く浅い。谷奥斜面の道状遺構で確認したピット状のくぼみも若干認められた（第26図）。これらは平坦面の南半でしか確認できなかつたが、本来は谷の奥のほうまで続いていたものと推定される。



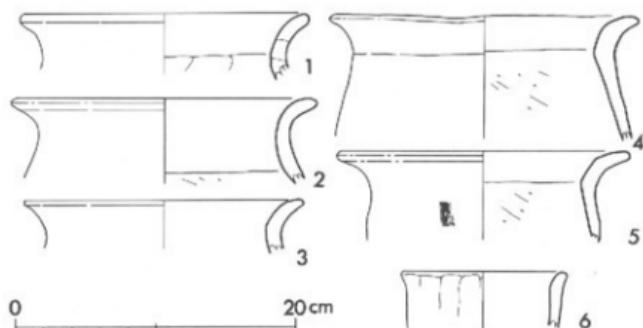
第30図 重富遺跡I区南谷底部出土遺物実測図(1) (15のみ土器器、2-6-8-10-15:暗褐色土、その他は明褐色土~無土)



第31図 重富遺跡Ⅰ区南谷底部出土遺物実測図(2) (いずれも黄褐色土)

## 出土遺物

以上の土壤や溝状遺構から出土するのは陶磁器類が中心である。第27図1は魁状須恵器の口縁部で、外面に櫛描きの波状文が施されている。



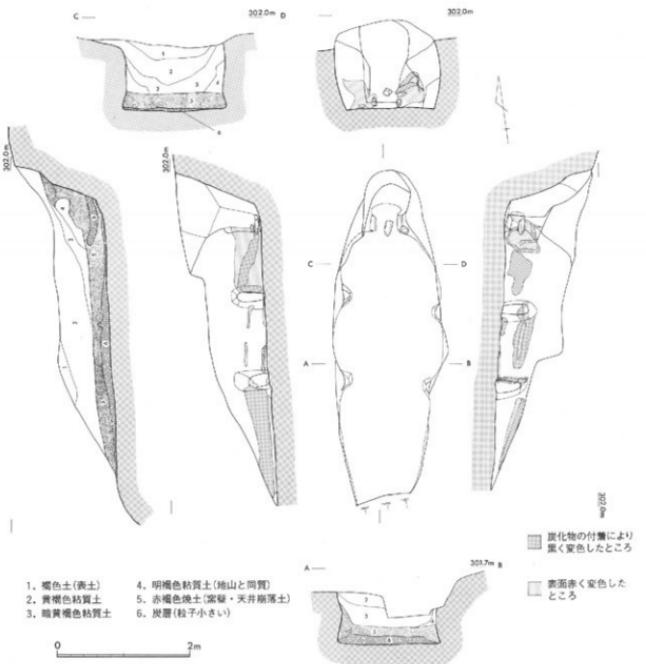
第32図 重富遺跡Ⅰ区南谷底部出土遺物実測図(3)(いずれも黄褐色土)

いる。3は緑灰色の釉がかかった片口鉢と考えられる陶器である。4は唐津系陶器甕の底部片で、内外面に鉄釉がかかる。底面には単子葉植物の茎や葉の痕が残り、離れ砂が付着している。5～7は染付白磁碗である。なお、2は北斜面SX1の流入土（第34図）から出土した染付碗である。

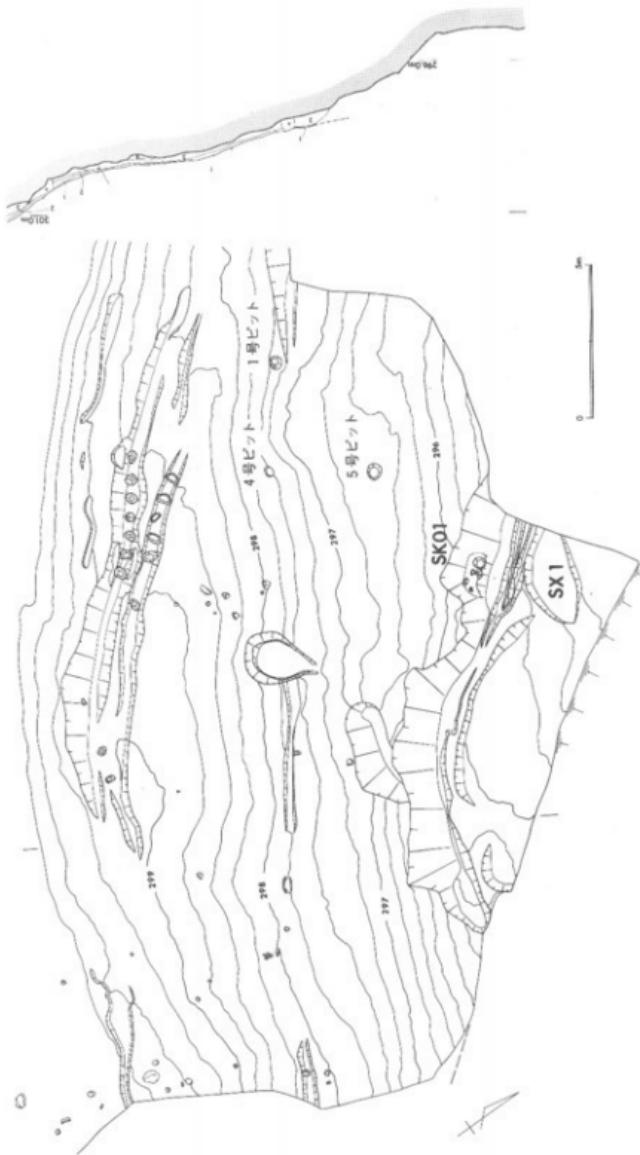
## (5) 遺物包含層（暗褐色土、黄褐色土）

谷底部の暗褐色土と黄褐色土から、須恵器を中心に多数の遺物が出土した。暗褐色土では谷の奥半分で主に出土し、須恵器は同層の全体から出土するが、土師器は東側斜面に固まっている（第28図）。一方、下層の黄褐色土では南半に中心が移るとともに、土師器もほぼ全面にわたって出土するようになる（第29図）。また、両層の須恵器類の中には層をこえて接合できるもののがかなりある。このことから、両層の間に明確な層位的境界を設けるのは差し控えたほうがよさそうである。

**出土遺物** 第30図1及び第31図1はともに弥生土器の底部である。後者は表面の剥脱が著しく観察も悩まないが變形土器と考えられ、前者は壺形土器と考えられる。第30図2～6、第31図2～9は須恵器蓋坏類である。第30図2は7世紀前半の小形化した蓋で、その他は端部が短く立ち上がるものである。つまみは擬宝珠（第31図4）だが、輪状に近いもの（同2）もある。坏身はほとんどが、高台断面M'字形か内面に段を有するもので、第31図6のみ回転糸切り痕が残り、高台がつかない。第30図7は鉢状の大形品で、第31図10・11は小形の高杯である。壺類は小形品の長頸壺（第30図9・10、第31図18）や短頸壺（第30図12、第31図14～17）とその蓋（第31図13）などが多く出土し、大形の壺の破片なども目につく。これら小形壺類には、特に灰や砂を伴った自然釉が顕著である。第31図12は平瓶の頭部と考えられる。第30図15、第32図は土師器變形土器片で、いずれも口縁をくの字状に外反させ、胴部は少しふくらんで底部はやや平たい丸底になると想われる。ただし、第32図6は小形で口縁があまり外反せず、外面には縦方向に強いナデ調整がいる。



第33図 重富遺跡 I 区炭窯跡実測図



第34図 重富遺跡I区北斜面地形測量図(塗堀部を除く)

## 4. 北斜面の遺構、遺物

## (1) 溝状遺構

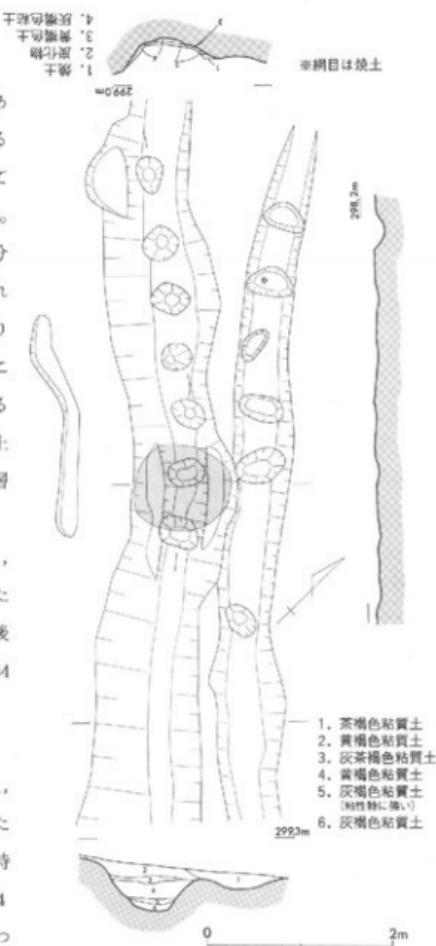
調査前から北斜面の中ほど、標高299mあたりに幅3~4mの平坦面があり、調査すると、2本の溝状遺構が並行して水平に走っていることが判明した（第34図、図版15-2）。遺構は長さ約19mにわたって観察され、部分的につながったところもある。尾根側のそれは、最大80cmの高さに地山を削って壁を作り出している。遺構底面にはおよそ35cm間隔に円形ないし椭円形のピット状のくぼみのあるところがあり、さらにその付近の遺構埋土上面で、直徑約1mの範囲に焼土と炭化物の層を見出した（第35図、図版16-1）。

なお、北斜面南西側を一部拡張したところ、この続きと考えられる溝状遺構を確認した（第41図）ほか、標高299.5mと297.5m前後の2箇所でも短い溝状遺構を確認した（第34図）。

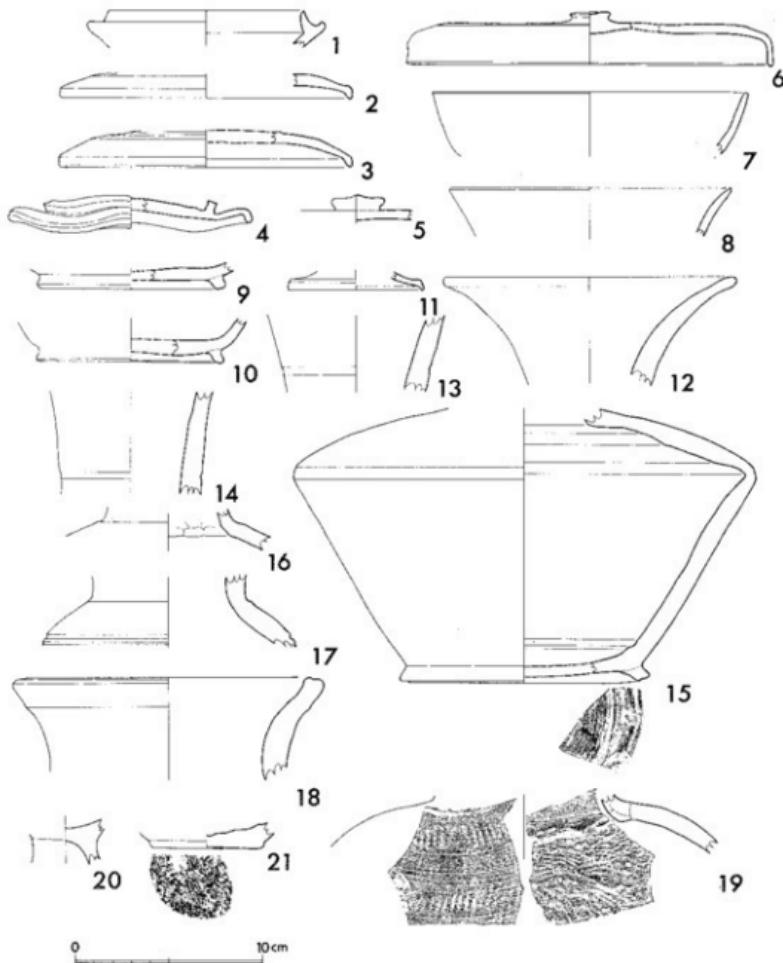
## (2) 遺物包含層（褐色粘質土、茶褐色土）

北斜面の平坦部分を覆っている褐色粘質土、茶褐色土から須恵器、土師器などが出土した（第36図）。1は比較的短い立ち上がりを持つ小形の壺身である。2~5は壺蓋だが、4は高台のようなかなり大形の輪状つまみがつく。7~10は壺身、11は小形高杯の脚端部と思われる。6は短頸壺の蓋である。大形品で直径は19.6cmである。これとセットになるものは出土していないが、16・17も短頸壺の破片である。長頸壺（12~15）の肩部は大きく張り出し、稜線も鋭いのが特徴である。その他、中~小形壺類は出土する（18・19）が大形の甕類はほとんど出土していない。

土師器はいずれも細片で、器形の判るものは20の高杯片と21の壺身片のみであった。



第35図 重富遺跡I区北斜面溝状遺構部分図



第36図 重富遺跡I区北斜面出土遺物実測図

(20・21のみ土師器、5・9-11-16-20は溝状通槽上方斜面、6-13-15は溝状通槽第2層、その他は茶褐色土出土)

## (3) ピット

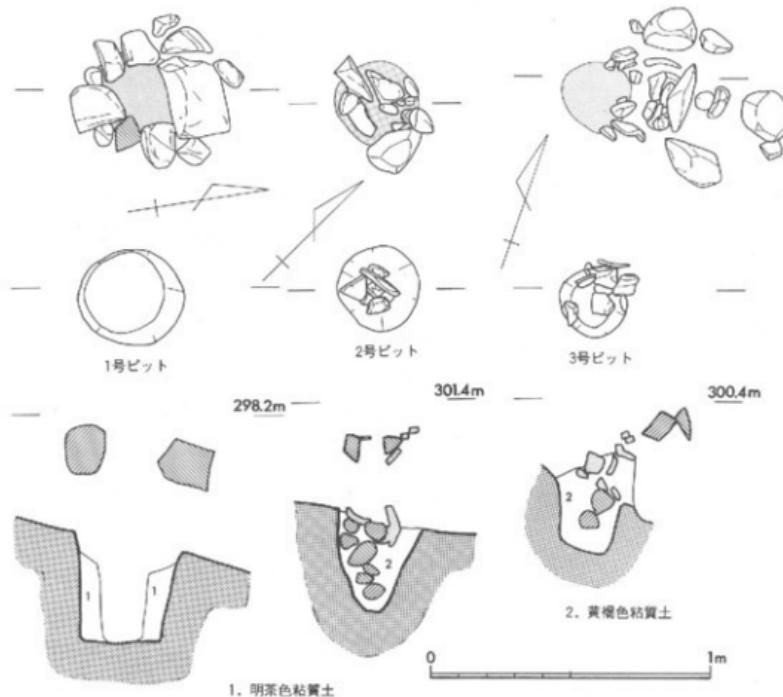
北斜面北端縁辺部で集石を伴ったピットを合計6個検出した。2・3号ピットの2個は調査区北西端の尾根に近いところ(第3図)にあり、1・4~6号ピットは標高296mから298mの比較的傾斜のゆるやかなところに4個がちょうど正方形を形作るような位置に並んでいた(第34図)。

**1号ピット** 平面形が直径35cmの円形のピットである。底面は平らで、現状での深さは40cmであるが、集石はピット検出面よりも20cmばかり高い位置にあり、もともと60cm程度の深さはあったものと推定される。集石は10数個で1個だけ大きい石が混じる。中央部分に15cm×20cmの空間があり、これに対応するようにピット内にも直径15cmの柱痕跡が確認された（第37図左、図版16-2・3）。

**2号ピット** 直径約30cmの円形のピットで、底に向かって先細りになり、底部は尖っている。ピット内にも石がかなり入っているが、底から石の最上面まではやはり60cmである（第37図中）。集石の中に陶磁器と石州瓦の破片が混ざっていた。

**3号ピット** 傾斜の一番きついところにあり、集石も斜面下方にずり落ちたような感じである。直径25cm程度の円形のピットで、底面は平らだが若干傾斜がつく。集石内から陶磁器と瓦片が出土した（第37図右、図版17-1）。

**4号ピット** 地山面に残ったピットの現状での深さはわずか25cmであるが、集石上面からピット



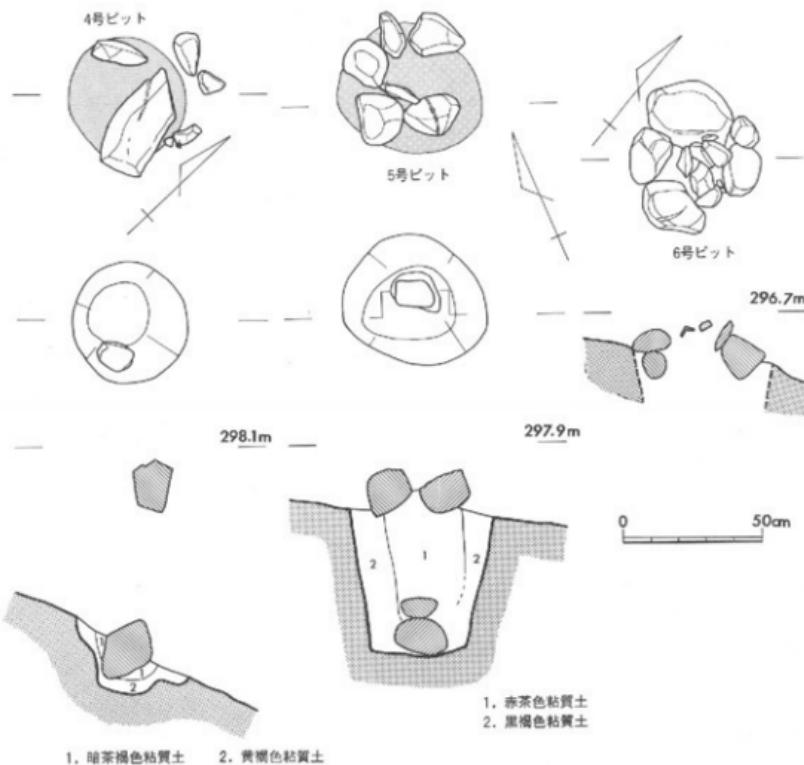
第37図 重富遺跡I区北斜面1~3号ピット実測図

底面までの高さは約85cmである（第38図左）。

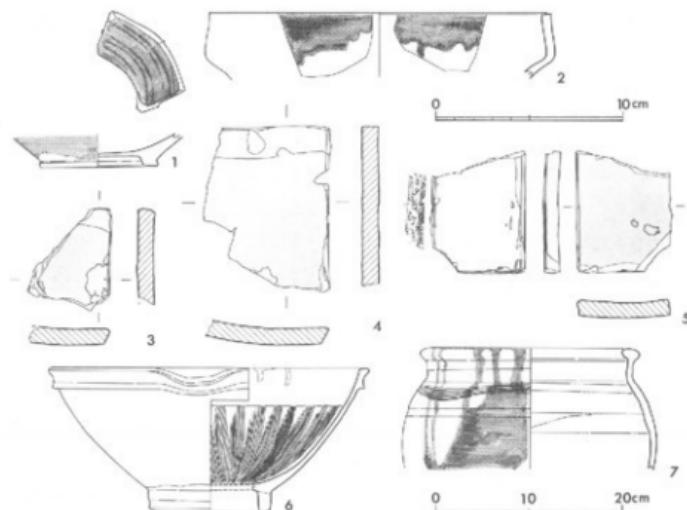
5号ピット 検出面での集石は直径20cm前後の円碟5個が円形に並び、中に扁平な石が1個立っている。直径50cm、深さ50cmの円形のピットの底には、あたかも柱を抜き取った後に並んでいた集石の一部が落ちこんだように、石がピット中央に2個重なって出土した（第38図中、図版17-2・3）。

6号ピット 斜面の厚い堆積層の上面で検出されたため、集石下のピットを掘り上げる前に誤って削り取ってしまい、ピットの形状は描んでいない。集石は10個あまりの石が直径45cmの範囲に円形に固まっていた（第38図右、図版18-1）。

これらのピットは明らかに柱のようなものを建てたと考えられるものの、何に利用されたかにつ



第38図 重富遺跡I区北斜面4~6号ピット実測図



第39図 重富遺跡Ⅰ区北斜面2・3号ピット出土遺物実測図  
(1-2は1/3、他は1/6、1-3-4は2号、2-5-7は3号出土)

いては全く不明である。

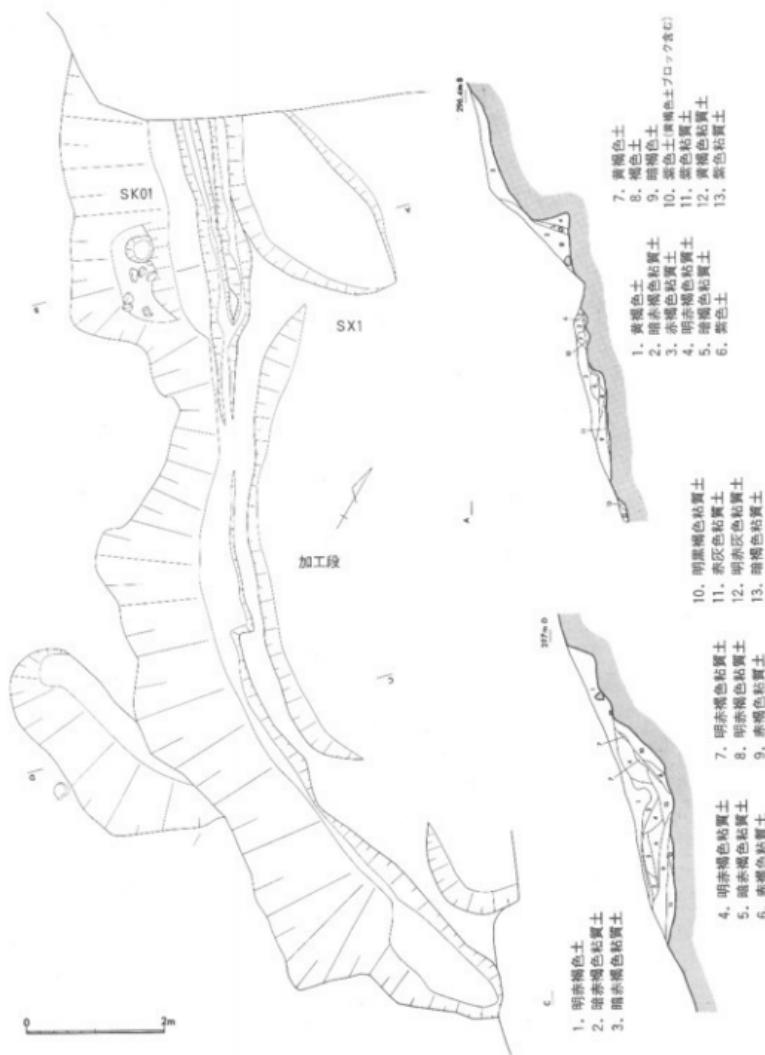
#### 出土遺物（第39図、図版25-2）

1は内面に透明な薄緑色の釉による刷毛目文が施された浅鉢状の陶器で、外面にも緑色の釉がかかる。2は口縁が逆くの字状の浅鉢形の陶器で、内外面に透明度の高い緑釉がかかる。6は、石見焼の插鉢で、口縁外面が肥厚して段状になる。外面には来待釉がかかり、内面には口縁の4cmあまり下から時計と逆回りに櫛目がはいる。櫛目の下半は使用による摩滅が顕著である。7も同じ石見焼の甕で、口縁はT字状の玉縁である。全面に鉄釉がかかり、外面頸部下に櫛描きの波状文が施されている。3～5は石州瓦で、釉はやはり来待釉である。5の側縁にはヘラの切り込み痕とその後の折り取った跡が観察される。

#### （4）その他の遺構

北斜面ではその他に、斜面の一番下で大きな加工段と土壙1個、性格不明遺構1個を検出し（第34図）、東側の拡張部（第3図）では溝状遺構が多数集中したSX2を確認した。

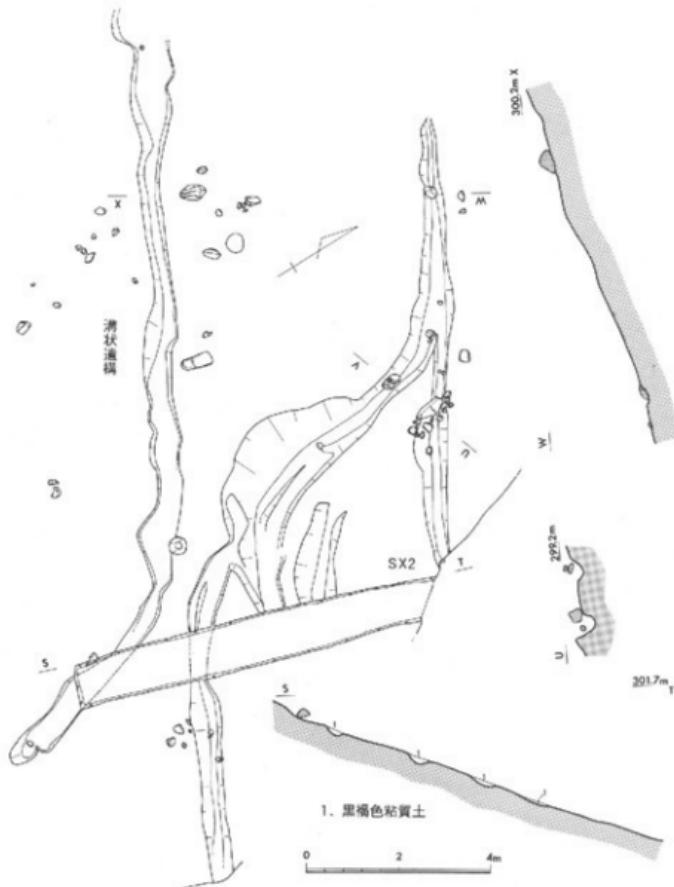
**加工段** 長さ約10mにわたって弧状に地山を削り込んだ遺構で、北側はSX1につながっている。壁は45度の傾斜で約80cmの高さに削り出されており、壁下に浅い溝が廻る。溝の内側は上手状の高まりがあり、さらにその内側の平坦部分にはピットなどの遺構は全くなかった（第34図）。



第40図 重富遺跡Ⅰ区北斜面加工段・SX1実測図

**SX1** 構造的には隣接する加工段と同じだが、壁面中ほどに長さ1.45m、幅50cmのテラスを有し、壁下の溝も二条になる。テラスは一度幅80cm程度まで掘り広げた後、また土をいれて傾斜を整えた様子が窺え、客土内から陶磁器類も出土した。溝とその下の平坦面とは切りあい関係にあるようだが、土層が複雑で充分な把握ができなかった（第40図、図版18-2・3）。

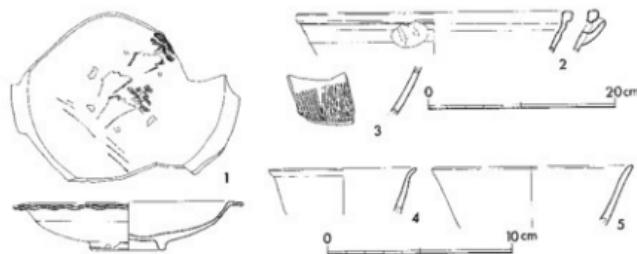
**SX2** 東側拡張部で検出した溝状遺構群で、斜面を0.8~1.2m間隔で並行して走る4本の溝状遺構のうち、高いほうの3本が大きく湾曲して一番低い溝状遺構に集結する。遺構内には黒褐色の



第41図 重富遺跡 I 区北斜面拡張部遺構実測図

粘質土が堆積している（第41図）。

SK01 SX1 のテラス部分で確認した土壤で、直径40cmの円形を呈する。テラス



第42図 重富遺跡Ⅰ区北斜面SX01壁客土内出土遺物実測図 (1~3は1/6, 4・5は1/3)

流入土の上から掘り込まれており、テラスとは無関係である。遺物は出土していない（第40図）。

**出土遺物（第42図、図版25-3）** SX1壁の客土内から陶器類の破片がまとまって出土した。1は山水文浅鉢で、灰褐色の釉がかかり、見込に重ね土の痕跡が6個所に残る。2は片口鉢の口縁部で濃褐色を呈する。4・5は淡緑色の碗である。

以上のように北斜面の集石を伴うビットや性格不明の遺構は、いずれも近世後期以降の陶磁器類や瓦片を含むことから、作られた時期もそれ以降と考えられる。

### 第3節 Ⅱ区の調査

重富遺跡Ⅱ区は、主要地方道浜田作木線西側の南北に伸びた尾根上に位置し、昭和63年度の第1次調査で尾根頂上部に設定したトレンチ（第43図）から、古墳時代の土師器と土壙が発見されたところである。地山は砂礫や粘土が混在する堆積層で、色調も白色・黄土色・灰色・茶色・臘脂色・紫色と多彩で、まさに虹色の地山といったところである。このため、遺構プランの検出に結構手間取ることになったが、それでも平成元年度に尾根筋に沿って4グループ計33基の土壙を検出し（図版26-1），このうち30基が木棺墓であることが判明した。翌平成2年度の調査では、その西側と北側で新たに13基の木棺墓を確認することができた（図版26-2）。また、尾根東斜面で三段にわたって加工段を確認したほか、ビット群や溝状遺構を、南斜面でビット群、北端尾根上で溝状遺構等を確認した（第43図）。

#### 1. 木棺墓群

全部で7群に分かれており、4群は中心の尾根上にそれぞれ群をなすが、さらにそれらと離れて南北両端の別尾根に各1群1基ずつ存在する。また、南西に伸びる尾根に土壙内部に須恵器を含ん

だ1群1基が存在する（第43図）。中心の4群を尾根筋に沿って南から第1～第4木棺墓群とする、第3群が最も高所にあり、第1群が最も低い位置にある。各群とも尾根がある程度平坦に削りだしして土壙を掘り込んでおり、各群との境には溝等の区画を設けず、空き地で隔てているのみである。第3群の北側が尾根の頂上に相当するが、ここには土壙ではなく空間地になっている。北端第5群の北側は大戰前までのところで頂部を削り取られており、木棺墓があったかどうかは不明である。ただし、やつおもて18号墳のある尾根との統合具合からすると、この部分はちょうど一番低いところに相当するので、なかった可能性のほうが高い。一方、南端第6群から南は、重宮天満宮社殿あたりに向かって徐々に高くなっていたと推定されるが、社殿と境内のためにやはり平坦に削り取られており、遺構は残存していない（第2図）。南西の第7群も1基のみで連続しそうな土壙はなかった。したがって、この木棺墓群は、今回の調査で確認したものがその全てであると考えられる。

各群の構成数は、第1群8基、第2群18基、第3群7基、第4群7基、第5～7群各1基である。木棺墓の主軸方向は、尾根筋に並行するものと直交するものの二種類あり、土壙の深さが平均よりもかなり浅く20cmにも満たないものがあるなど、時期差として捉えてもよさそうな相違点が幾つか存在する。

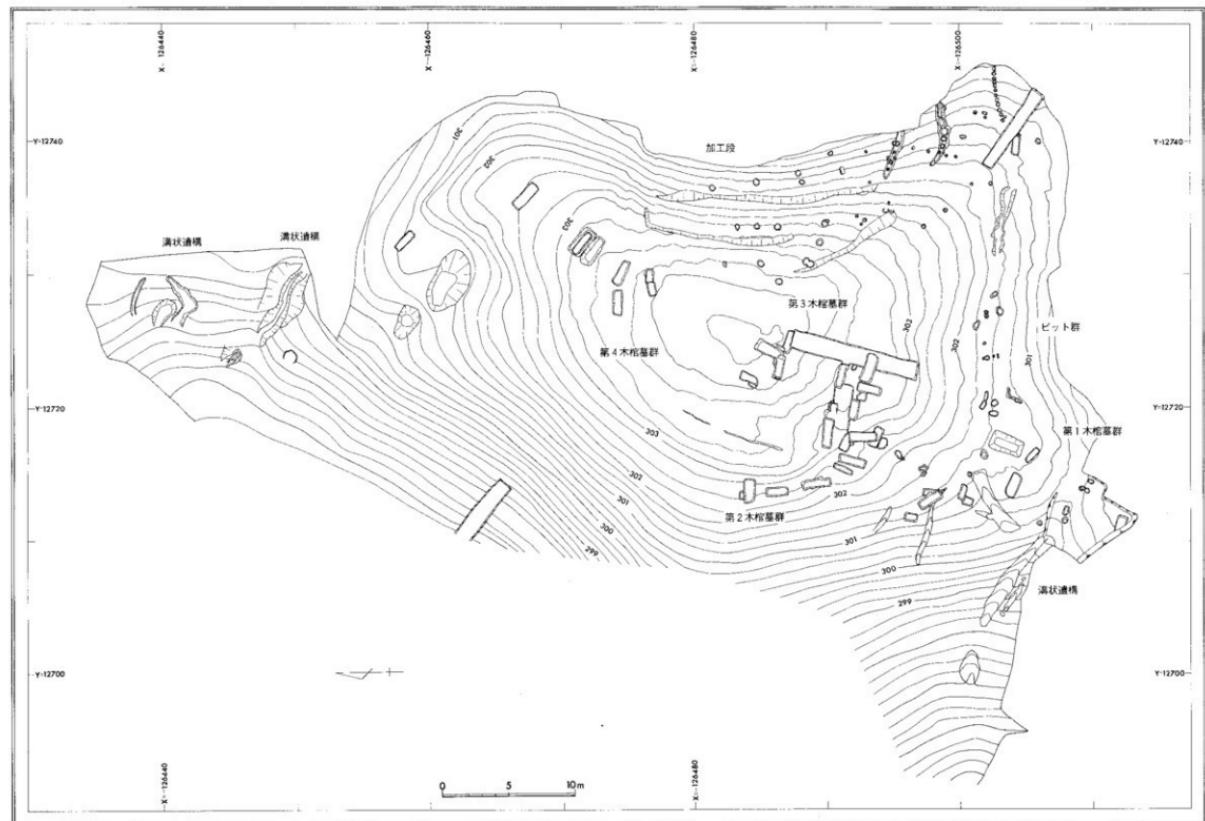
#### （I）第1木棺墓群（第44図、図版27）

中心尾根南端にあり、8基で構成される。さらに尾根筋のSK31・20・22と西側斜面のSK34・35・36・42・43の2群に細分が可能である。主軸が尾根筋に並行するのはSK31とSK34の2基でその他は等高線とほぼ並行に掘り込まれている。

#### SK31（第45図、図版28）

尾根頂上から尾根筋を標高差で3m下ったところに3.5m×4mの広さに平坦面を削りだし、その中央に土壙を掘り込んだものである。土壙の規模は当遺跡木棺墓群のうち、最大規模のもので、長さ2.6m、北側の幅1.35m、南側の幅1.15mほどあって一方が広い長方形を呈する。深さは約90cmあり、壁面は垂直でなく、ゆるやかに底面に向かって窄み、底面近くでさらに埋設する木棺と同じ幅にもう一段掘りくぼめている。底面での長さは1.85mで、幅は北側70cm、南側50cmあり、やはり北側が広くなっている。底面から棺材を据え付けるための縁取り込み等は観察されなかったが、木棺の裏込め土が残っており、それから推定される木棺の大きさは長さ1.7m、幅は北側60cm、南側52cmである。

土壙内に遺物は全くなく、土壙上面南北端で大きな疎が出土し、特に北側では、SK32との間の三角形に並んだ疎の間から古式土師器片が出土した（図版28-3）。風化が著しく器面調整が分からぬいため、土器の天地がはっきりしないが、器台の受部から筒部にかけての破片と思われる（第55図4）。なお、SK32は、長径85cm、短径55cm、深さ25cmの楕円形の土壙で、用途は分からぬが、



第43図 重富遺跡II区地形測量図

SK31に開削した施設の可能性もある。

**SK20（第46図上、図版29-1）**

長さ1.9m、幅0.9mの隅丸長方形の土壙である。現存の深さは約30cmで底面は東が高く、西が低い。木棺の大きさは長さ1.3m、幅45cmで、東側は裏込め土が残るのみだが、西側は二段掘りにして木棺を固定している。遺物は出土していないが、土壙北側で繩が3個確認された。

**SK22（第46図下）**

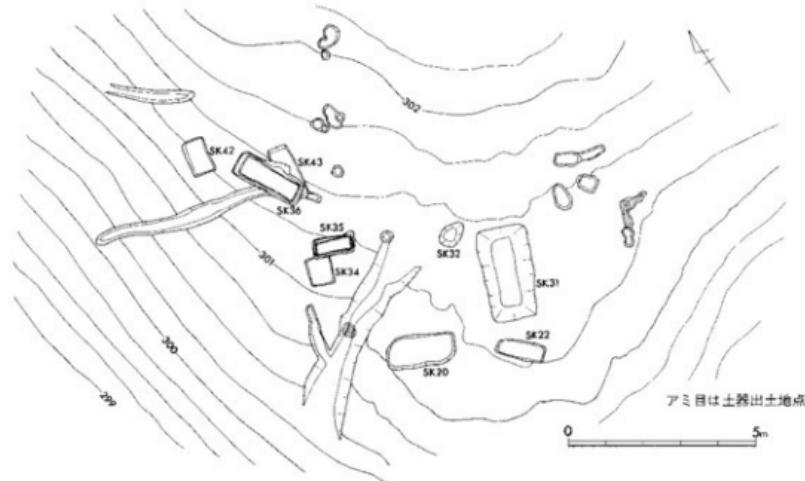
深さわずか15cmの長方形の土壙で、長さは1.3m、幅は東側で45cm、西側で35cmである。灰褐色土が堆積するのみで、裏込め土や遺物は発見されなかった。

**SK34（第47図上、図版29-2）**

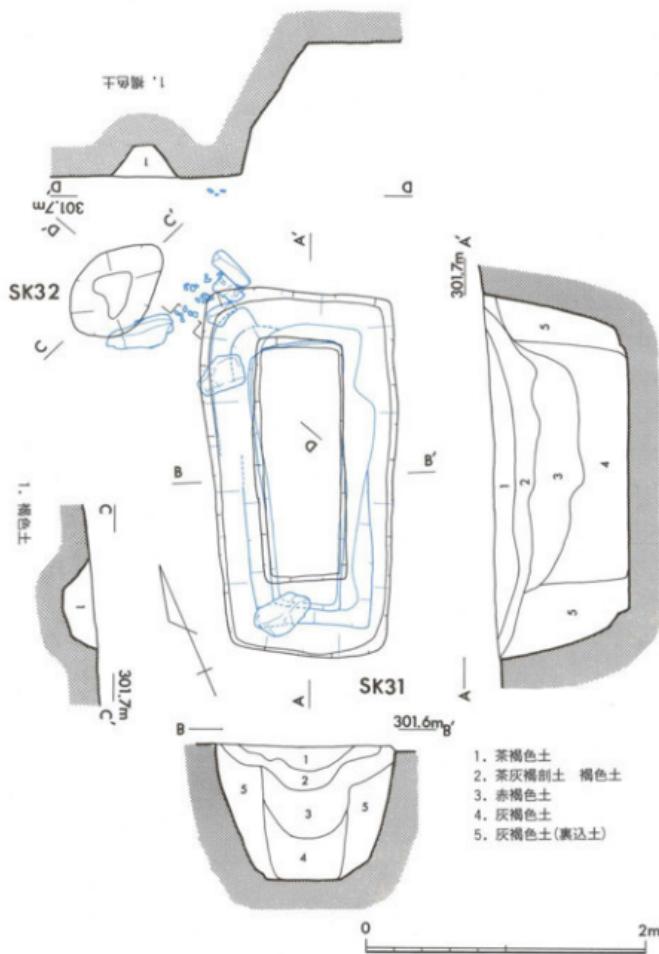
西斜面にあり、SK35と切り合い関係にあるが前後関係は掘むことができなかった。主軸を等高線と直交する方向にとり、長さ80cm、幅67cmの長方形に掘り込まれているが、深さは10cmと浅く、裏込め土や遺物は発見されなかった。

**SK35（第47図上、図版29-2・3）**

主軸線が等高線に比較的並行する向きに掘り込まれており、プランは長さ1.15m、幅55cmの長方形である。深さ25cmで、東側短辺が若干だが二段に掘り込まれている。底面には、東西向短辺壁下と北側長辺の西端に10cmの幅に縁取り込みがあり、東側のはうが深い。また、北側長辺に残存する淡褐色の裏込め土の両端に、幅2cm程度の明褐色粘土が縱方向に上面から底面まで、裏込め土を突き



第44図 重富遺跡II区第1木棺墓群全体図



第45図 重富遺跡II区SK31・32実測図

抜け、壁面まで達した状態で溜っているのが観察された。このことから、SK35の木棺は幅2cm程度の板材を用いて、長辺を小口の板で挟み込むようにして固定していたと考えられる。なお、遺物は出土していない。

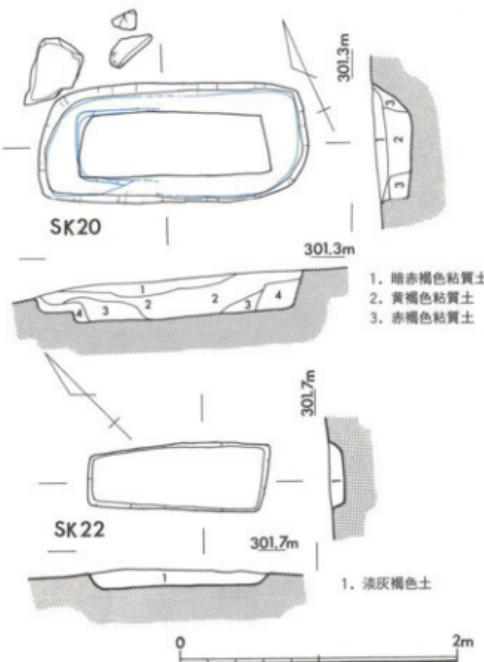
SK36・43（第48図、図版30-2・3、31-1）

SK35の北側にあり、SK36がSK43を切っている。SK43は長さ1.6m、幅60cmの長方形の土壇で、深さは20cmである。淡黄灰色の裏込め土が一部で観察されたが、半分近くがSK36と重なっているため全体の様子を把握することができなかった。

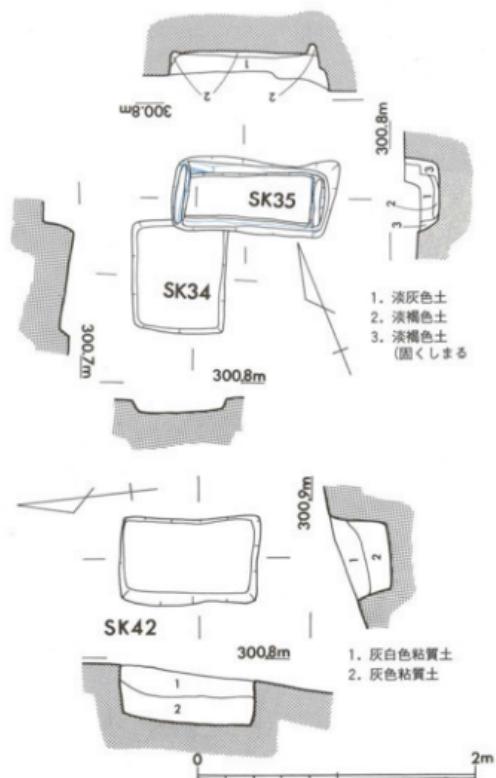
SK36は長さ2m、幅75cmの長方形プランの土壤で、南北両短辺と東側底面近くで若干二段の掘り込みのように幅が狭くなる。東辺中央付近の掘り方が膨らんでいるのはSK43と重複していたために、土壤を掘る際、壁が崩れてしまったものと考えられる。裏込め土は南以外の三辺にあり、裏込め土の残存状況から推定される木棺の大きさは、長さ1.6m、幅は北側が広くて56cm、南側で50cmである。土壤上面北半で30×40cm程度の平たい礫とその下から古式土師器が出土した。かなりの破片がすでに流出している模様だが、それでも大小2個の甕形土器があることが判った。第55図5の小形の甕形土器は薄い作りで口縁が大きく開き、端部は細く尖る。複合口縁下端も断面三角形に小さく突出する。6は口縁端部を欠損しているが、肉厚で大形の土器である。複合口縁下端の突出は不明瞭で、胴部内面にヘラケズリ痕が観察される。

SK42（第47図下、図版30-1）

SK36・43の北東に隣接して掘り込まれた長方形の土壤で、長さ1m、幅60cmでやや小形である。裏込め土や遺物は発見されていない。



第46図 重富遺跡II区SK20・22実測図



第47図 重富遺跡II区SK34・35・42実測図

56cmである。四面全部に裏込め土があり、これから推定される木棺の大きさは、長さが1.5m、幅が北側で50cm、南側で40cmである。土壤内外から遺物は出土していない。

SK03の西側には不整形な土壤SK09がある。プラン検出当初、土壤内部にも円形に土色の違いが観察され、ピット等の重複が予想されたが、掘ってみると意外に浅いことが判明した。遺構の性格等については不明である。

#### SK05（第50図、図版32-1・2）

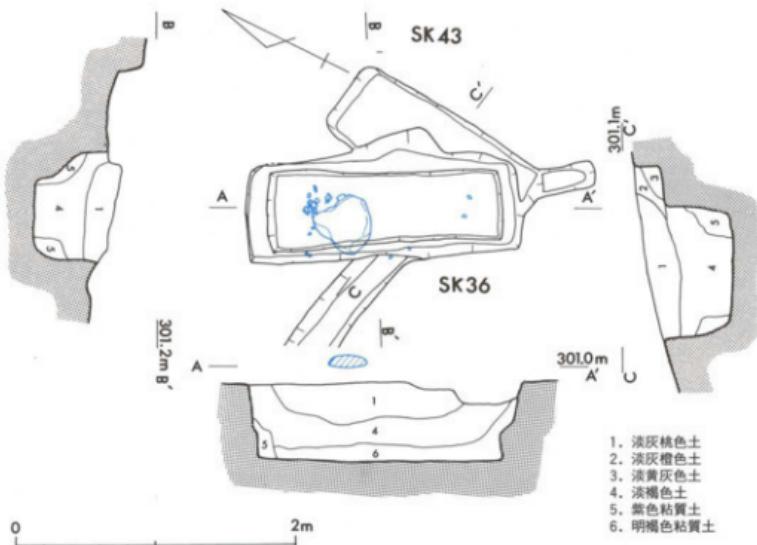
初年度のトレンチ調査の際に発見し、遺跡の存在を知る端緒になった土壤である。尾根筋のほぼ中央部に主軸が尾根筋に直交する方向に掘り込まれており、全長2.2m、幅0.9mの隅丸長方形を呈する。深さは50cmを超え、底面は段差がわずか2~3cmながら二段に掘り込まれている。木棺の大

#### (2) 第2木棺墓群（第49図、図版31-2・3）

第1群よりも標高で1.5m前後高い位置にあり、尾根筋から西側斜面にかけて計18基で構成されている。主軸方向と土壤の配列の関係から、SK14・28・21・02から東側の一群と、SK04から西側の一群のふたつに細分が可能である。特に東群のSK03・05付近は幅約3m、長さ約4mの範囲で平坦面を作り出しており、西群SK40・41付近にもわずかながら平坦面が認められる。

#### SK03（第50図、図版32-1・3）

尾根筋上に主軸を尾根筋と同じ方向にして掘り込まれた土壤で、深さ40cm、長さ1.7m、幅は北側で72cm、南側で



第48図 重富遺跡II区SK36・43実測図

きさに相当すると考えられる下段の規模は、長さ1.9m、幅50cmで、長辺が内湾している。

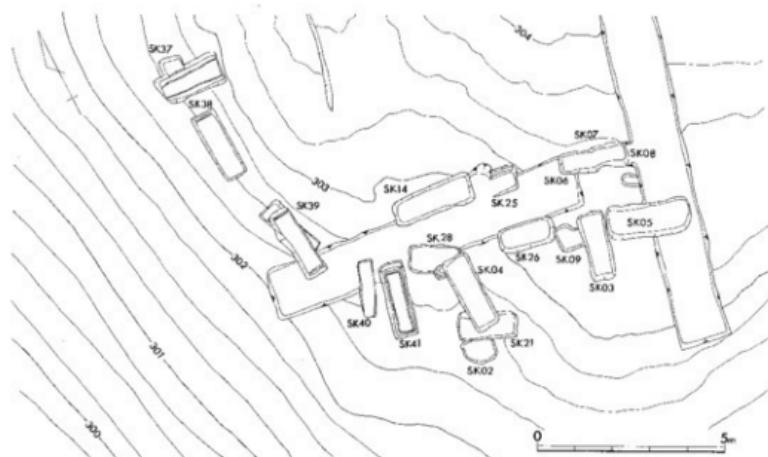
トレンチ調査の際、土壤のすぐ北側あたりで古式土師器の小形丸底壺が出土したというが、正確な位置を掴むことができず、SK05に伴ったものかどうかはっきりしない。

#### SK06・07・08（第51図上、図版33-1）

SK03・05の北側、平坦面の北端に位置し、3基の土壤が重なっている。SK06は長さ1m、幅60cmの小形長方形の土壤で、深さは約50cmである。土壤内に裏込め土はなく、遺物も出土しなかった。SK07は主軸をSK06とわずかに違えただけで、ほとんど連続したような状態で掘り込まれた土壤で、規模や深さもSK06とほとんど同じである。土壤上面から小形の礫が一点出土している。SK08は、SK07と重複する土壤で、東側をトレンチ調査によって欠損しているため全長は不明であるが、現状で幅60cm、長さ90cmであることから、SK06・07よりは大きい可能性が強い。

#### SK04（第51図下、図版33-3）

第2群西側グループのうち最東端の土壤で、長さ約2.1m、幅約70cmの長方形を呈する。掘り方の四壁はいずれも垂直に近い状態で、内部の裏込め土の残り具合から、木棺は土壤内でも東側に偏って据えられていたことが判る。木棺の大きさは長さ1.6m、幅50cm程度と推定される。土壤上面から礫が一点出土している。



第49図 重富遺跡II区第2木棺墓群全体図

## SK02・21・28（第51図下、図版33—2）

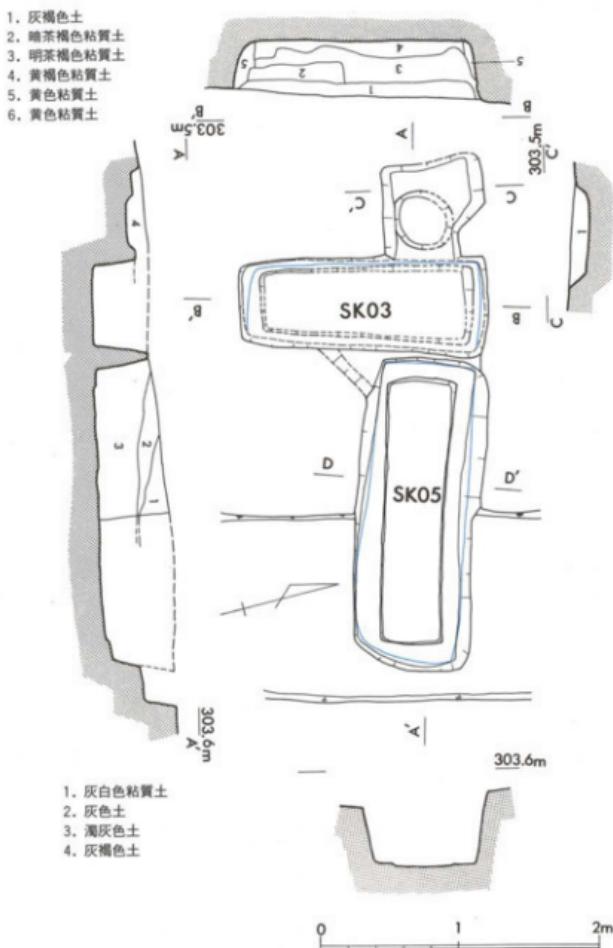
SK04と重複して掘り込まれた土壙群で、主軸方向は等高線と並行である。SK02は長さ84cm、幅が東側で約65cm、西側で55cmの平面台形状の土壙で、深さは10cmと浅い。SK21は長さ1.56m、幅75cm前後の隅丸長方形の土壙で、西側が若干幅広くなっているが、底面は西に向かって傾斜している。SK28はSK04の北側にある土壙で、主軸方向はSK21と同じである。トレンチ調査で削られたことも原因かもしれないが、掘り方は極めて浅い。長さ1.33m、幅73cmの長方形を呈する。これらの土壙からは遺物は出土していない。

## SK14（第52図、図版34）

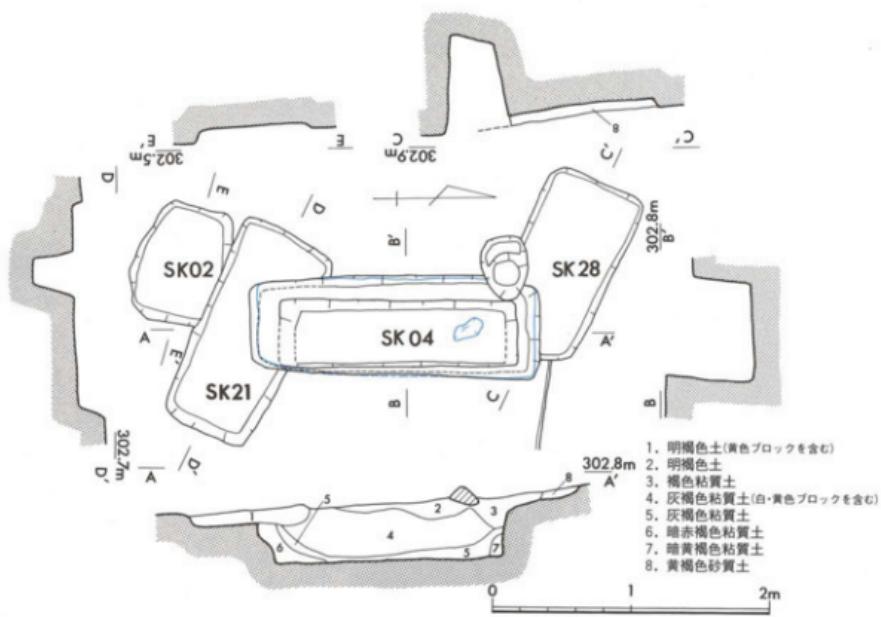
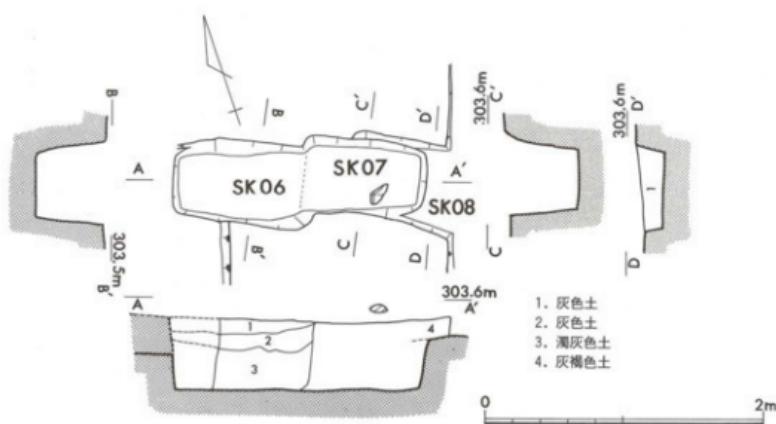
二列縱列に並んだ第2群東端グループの北列西端に位置する。この部分は、第3木棺墓群のある尾根頂上部西側に作り出された、墓域の境界を意識したような溝状の平坦面から南に若干下ったところに相当し、土壙周辺も両側に比べて少し落ち込んだ状態になっている。土壙は東側がやや幅広の長方形を呈しており、全長2.25m、東端の幅75cm、西端の幅65cmである。底面から約20cmの高さで奥込め土が残っており、これから推定される木棺の大きさは、長さ1.8m弱、東端幅53cm、西端幅38cmである。

土壙内に遺物は出土しなかったが、土壙中央の上面から古式土師器がまとまって出土した。器壁が薄いうえ風化が著しいため接合が不可能だが、變形土器と長頸壺のあることが判った。第55図1はその變形上器で、複合口縁の途中から端部が大きく外反している。口縁外面は縱方向に刷毛目調整したのち、横方向にも刷毛目を加え、さらにその上に丁寧なヨコナデを施している。口縁下端は

長さ2mm程度を摘みだしているが先端は丸く収めている。外面肩部以下は刷毛目、内面頸部以下にはケズリ調整が行われ、外面全体に赤色顔料が施されている。2は長頸壺の頸部片で、現存で高さ8.7cmである。器表面の剥脱が著しく調整は不明である。



第50図 重富遺跡II区SK03・05実測図



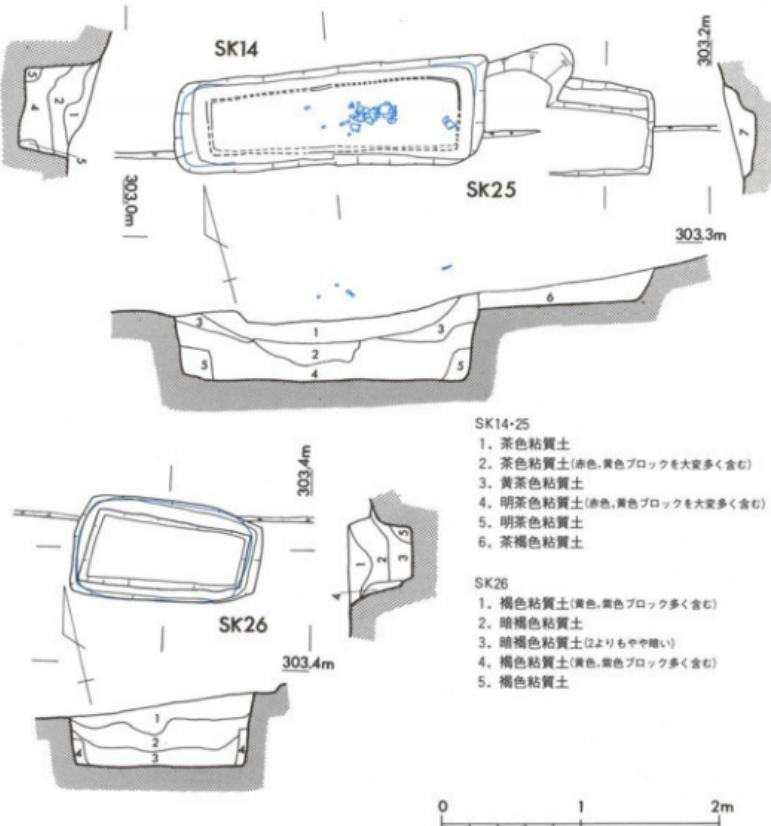
第51図 重富遺跡Ⅱ区SK06~08,02·04·21·28実測図

## SK25（第52図、図版33-2）

SK14の東側にあってSK14に切られている。また、北側の一部を別の土壤状の落ち込みで壊されている。現存する土壤の規模は、長さが1.2m、幅70cmの長方形で、北側が二段に掘り込まれたようになっているが、もともとは南側も二段であったと推定される。下段の幅は約45cmである。

## SK26（第52図、図版35-1）

東グループ南列の中程にあり、土壤上面では長さ1.33m、西端の幅73cm、東端幅50cmの台形をしているが、底面では隅が丸くなっている。裏込め土から木棺も長さ1.1m、東端幅35cm、西端幅50



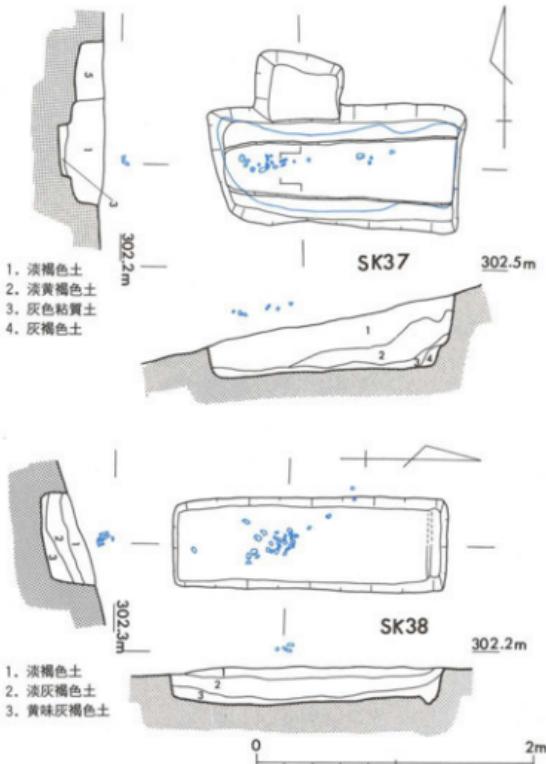
第52図 重富遺跡Ⅱ区SK14・25・26実測図

cmの台形状のものが納められたと考えられる。遺物は出土していない。

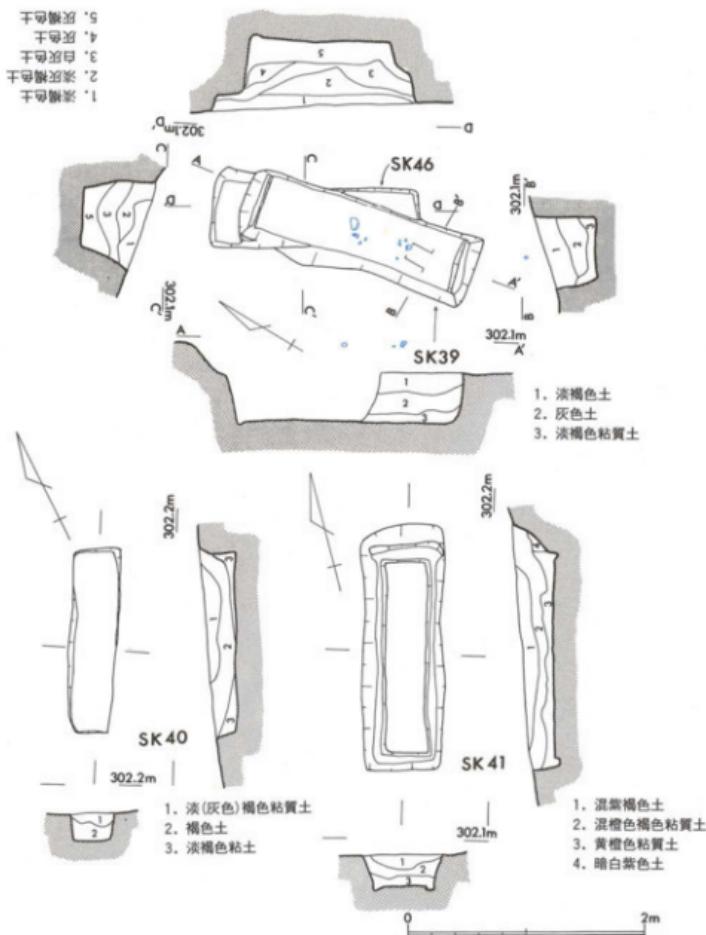
## SK37（第53図、図版35-2・3）

第2群の西グループは、標高302.5m前後の高さのところに斜面を回るように一列に掘り込まれており、SK37はそのうちの最北端に位置する。このグループで唯一等高線に直交するように主軸線が設定されており、北東側に別の土壌が重複している。掘り方は長さ1.85m、幅90cm（東端）と80cm（西端）で南長辺が短いやや歪んだ台形をしており、底面（青線）の作りもかなり難に済ませている。しかし、裏込め土から復元される木棺のプランはきれいに整っていて、この場合も西端幅が30cmであるのに対し東端幅は50cmもあり、一方がかなり幅広になるという特徴がある。長さは約1.6mである。

土壤上面から古式土器片が出土したが、団化できたのは器台の受部から筒部にかけての破片のみである（第55図7）。筒部は極めて短く、受部の内面はごくゆるやかに筒部まで達しており、体部と底部との境が全くない。一方、外面では断面三角形の段でこれを表現している。風化のため調整の不明なところが多いが、受部内面はヘラミガキ、外面ヨコナデ、脚部内面にはヘラケズリが施されている。

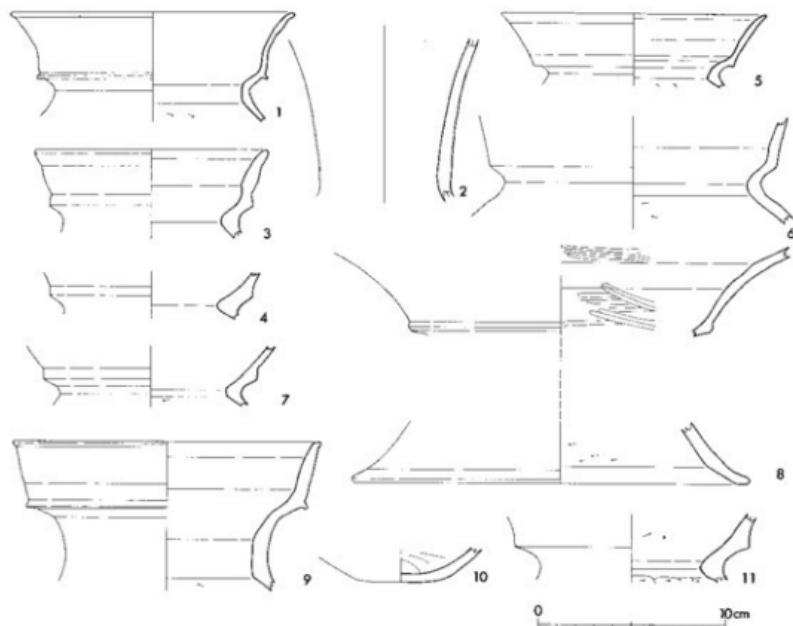


第53図 重富遺跡II区SK37・38実測図



SK38（第53図、図版36）

SK37の南にあり、長さ1.95m、幅65cmの長方形プランの土壤で、若干北側の幅が広い。土壤内部に裏込め土ではなく、北辺底面に幅10cm、深さ5cmの繰り込みが認められた。土壤中央上面から古式土師器が出土し、その一部は覆土とともに土壤内底面近くまで落ち込んでいた（図版36-2）。



第55図 重富遺跡II区木棺墓群出土土器実測図  
(1・2～SK14, 3～SK24, 4～SK32, 5・6～SK36, 7～SK37, 8～SK38, 9～11～SK31東面斜面)

古式土師器は器台（第55図8）で、鉢部付近の破片がなかった。受部は体部のみで外反しながら大きく開く。内面ヘラミガキ、外面ヨコナデである。脚部は端部のみで先端を1cm程度外に折り曲げている。

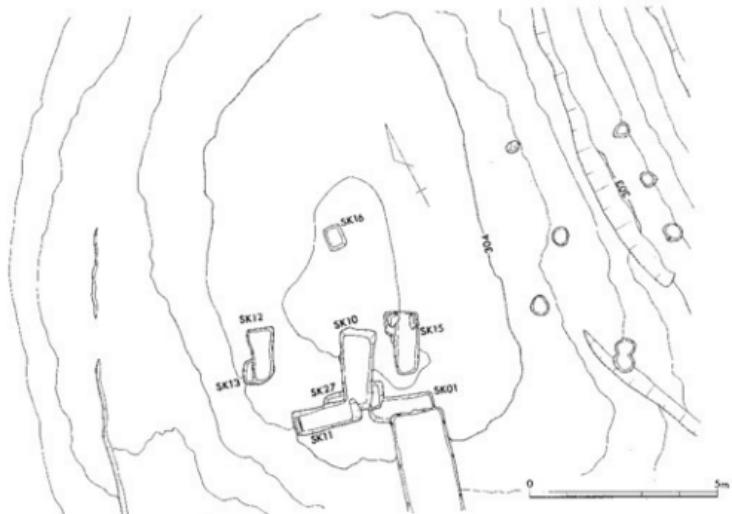
#### SK39・46（第54図、図版37-1・2）

西グループ中央にあり、2基がほとんど重複する。SK39は長さ2m、幅55cmの長方形の土壙で、深さも50cm程度である。南北両短辺の底面に幅5cmの縁り込みをいれるが、南辺のものはかなり浅い。SK46はSK39よりも古く、北側がやや幅広の長方形の土壙である。長さは1.76m、幅は北端で60cmあり、南端の幅は40cm程度と考えられる。底面は南に向かってかなり傾斜している。

SK39上面から土器が少量出土した。器形を窺える破片はなかったが、古式土師器と思われる。

#### SK40・41（第54図、図版37-3, 38）

約20cmの間隔をおいてほぼ並行に掘り込まれた土壙で、SK40は長さ1.55m、幅35cm、SK41は、長さ2.1m、幅70cmのそれぞれ長方形を呈する。SK40は土壙内に縁り込みや奥込め土は全くなく、四壁がほぼ垂直に立っているため、非常に整然とした感がある。SK41は底面の四辺すべてに幅



第56図 重富遺跡II区第3木棺墓群全体図

10~12cmの縁り込みが残り、その内側は中央が一番高くて周辺に向かって少し傾斜している。四辺のうち、北短辺にのみ裏込め土があり、縁り込みの両端、すなわち東西両側壁に縦方向に同じような縁り込みが観察され（図版38-2），このことから、小口板で側板を挟み込み、さらに小口板の外側に裏込めを以て棺材を固定したことが考えられる。なお、南辺ではこうした縁り込みは認められなかった。遺物は出土していない。

### (3) 第3木棺墓群（第56図、図版39-1）

当遺跡の最高所に位置する木棺墓群であるが、尾根頂上から少し南端に寄ったところに固まっており、頂上の土壤を掘り込むのに最適と考えられる平坦部にはほとんど何もなかった。頂上から80cmばかり西側斜面を下ったところに、溝状の平坦面を削り出している。尾根頂上付近にあり、平坦面の向きが土壤の主軸方向とも一致するところから、この木棺墓群を意識して削り出されたことは間違いなさそうで、墓域を区画する境界のようなものかもしれないが、西斜面以外にこのような地山加工痕は認められず、断定はできない。

#### SK01・27（第57図、図版39-1）

SK10・11も含めて4基が重複している。SK01・27は主軸が尾根筋に直交するように掘られており、前者は長さ1.7m、幅70cm、後者は長さ1.7m弱、幅60cmのそれぞれ長方形を呈する。深さはどちらも20cm以下で、後者はSK10・11を完掘して壁面を清掃した際に発見したといきさつがあ

る。どちらも裏込め土や縁り込みはない。

#### SK10・11（第57図、図版39—2・3）

SK10は尾根筋に沿って、SK11は尾根筋に直交する形に掘り込まれており、前者は全長2.2m、北端幅93cm、南端幅約70cmで、北側が幅広の長方形を呈している。深さは約50cmで、北辺と西辺に裏込め土が残存しているが、南辺についてはSK11に切られていたために観察できなかった。裏込め土から推定される木棺の大きさは、長さ1.8~1.9m、北端幅60cm弱、南端幅約40cmである。SK11は全長1.75m、幅60cmの長方形プランの土槽で、底面の東西両短辺に幅10cm、深さ6~7cmの縁り込みが施されている。遺物は出土していない。



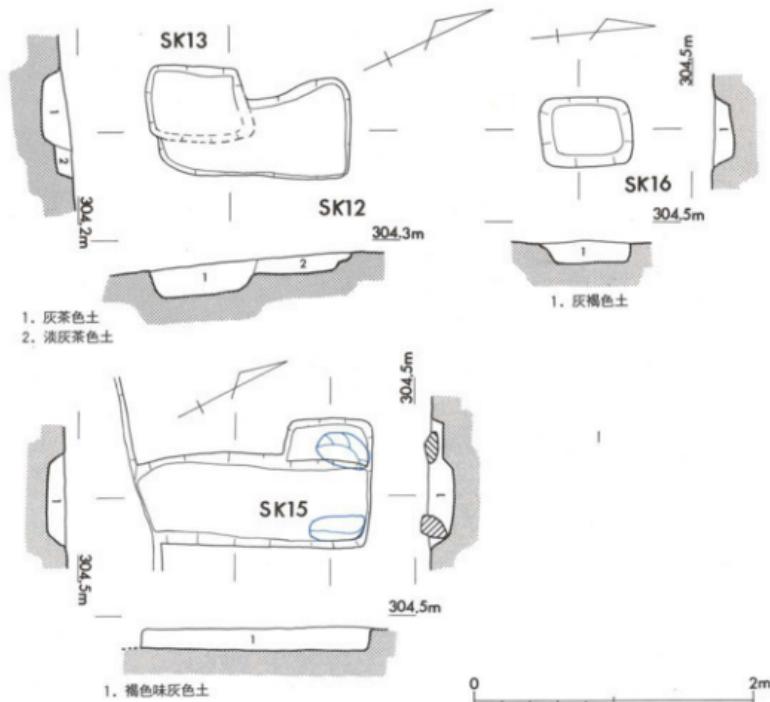
第57図 重富遺跡II区SK01・10・11・27実測図

## SK12・13（第58図、図版39-1）

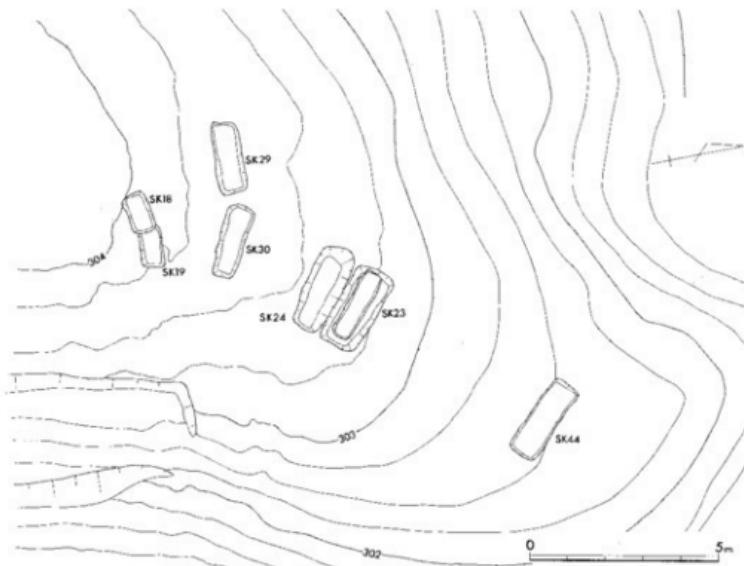
第3群の西端にあり、長さ75cm、幅55cmの小形長方形のSK13と、長さ1.37mのSK12が切りあつておらず、後者が先行する。どちらも形がやや歪んでおり、SK12は南端の推定幅40cmに対して北端幅は70cmと大きく飛び出している。遺物は出土していない。

## SK15（第58図、図版40-1）

SK10の東側にこれと同じ向きに掘られた深さ20cm弱の浅い土壌で、長さ1.7m以上、幅65cmの長方形をしている。北端の両側壁に沿って2個の扁平な石が並んでおり、東側は壁面に添わせるよう立っている。西側のそれはコの字状に張り出した窪みに倒れているが、もともとは立てかけてあったものと思われる。裏込め土に替わる控えの石というよりもこれ自体に何らかの意味があると推定される。



第58図 重富遺跡II区SK12・13・15・16実測図



第59図 重富遺跡II区第4木棺墓群全体図

## SK16（第58図）

尾根の最頂部にある上擴で、長さ65cm、幅50cmの小形のものである。深さも15cm程度で、奥込め土や縁り込みなどはなかった。

## (4) 第4木棺墓群（第59図、図版40-2）

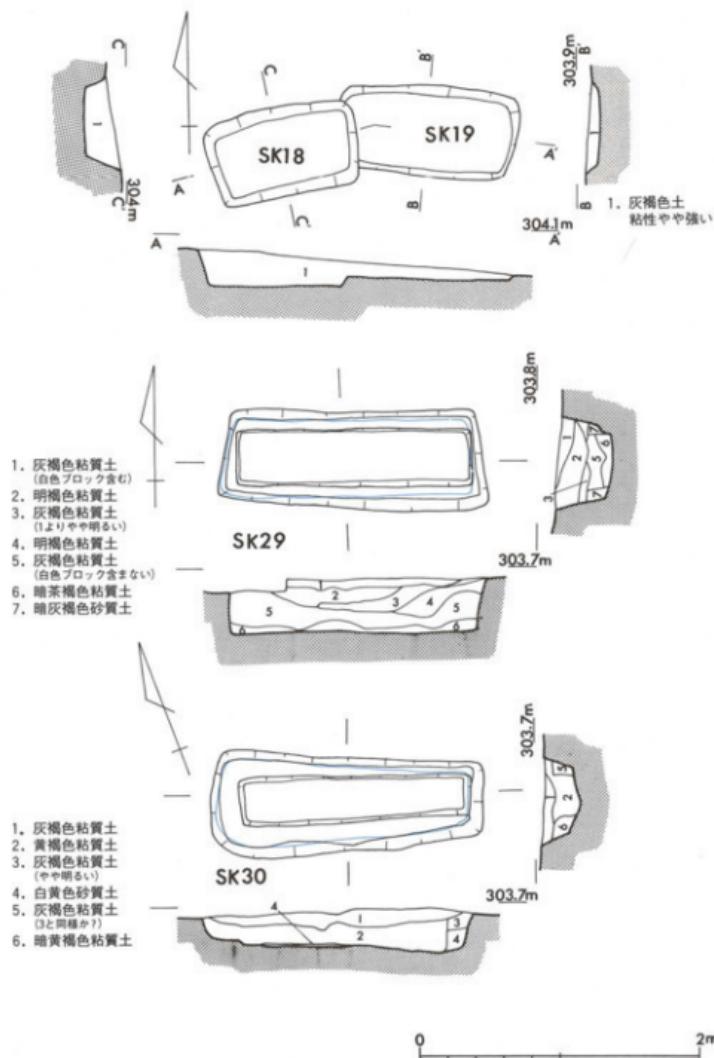
尾根頂上部から尾根筋に添って北側に少し下ったところにあり、第1～3群と異なって同じ標高のところを廻るようなことをせず、専ら尾根筋上に作られている。南端のSK18・19から北端のSK44までの標高差は約1.5mで、いずれの土塙も尾根筋に直交する形に主軸が定められている。全部で7基あり、北端SK44のみ少し離れたところに掘り込まれている。

## SK18・19（第60図上、図版40-3）

幅63cmで長さが1.05m（SK18）と1.3m（SK19）の2基の長方形土塙が連なっており、切りあい関係は不明である。遺物は出土していない。

## SK29（第60図中、図版41-1）

尾根筋でもかなり傾斜のゆるやかなところに、土塙列から1基だけはみ出したように作られた土塙で、長さ1.8m、幅は東側で70cm、西側で64cmの長方形を呈する。土塙の深さは40cmで、底面に



第60図 重富遺跡II区SK18・19・29・30実測図

高さ20cm弱の裏込め土が残っており、これから推定される木棺は、長さ1.65m、幅40cmのきれいな長方形である。

SK30（第60図下、図版41-2）

SK29の東側にあって、短辺の一方が幅広の隅丸長方形の土壙である。全長2m、西端幅76cm、東端幅50cmの土壙内の西辺を除く三方に高さ15cmばかりの裏込め土が残り、西辺には二段の掘り込みが認められた。推定される木棺の規模は、長さ1.6m、西端幅36cm、東端幅28cmである。

SK23・24（第61図、図版41-3、42-1）

側辺を接するように並行に掘り込まれた土壙で、第1群SK31に次ぐ規模のものである。どちらも側辺中央が膨らんだ隅丸の長方形を呈し、SK23は、全長2.4m、東端幅1m、西端幅0.96mで最大幅は1.1mである。深さは70cm近くあり、各壁面はゆるやかに丸みをもって底部まで移行する。底面には浅いながらも、掘り方の主軸方向からややずれて二段目の掘り込みが認められ、さらに若干の裏込めも残っていた。土壙が東側に広がっているのに対して、底面の二段目は西側に広く、土壙と向きが逆転している。木棺は、長さ1.9m、西端幅45cm、東端幅37cmの長方形と推定される。

SK24は、SK23の南側辺を切る形で掘られており、SK23よりも新しい。全長2.18m、西端幅90cm、東端幅75cmで、最大幅は1mあり、SK23とは逆に西端のほうが幅が広くなっている。深さは60cm弱で、ここでも掘り方の主軸からずれて南側に二段目の掘り込みが観察された。二段目の掘り方から推定される木棺の規模は、長さ1.8m、西端幅40cm、東端幅36cmである。

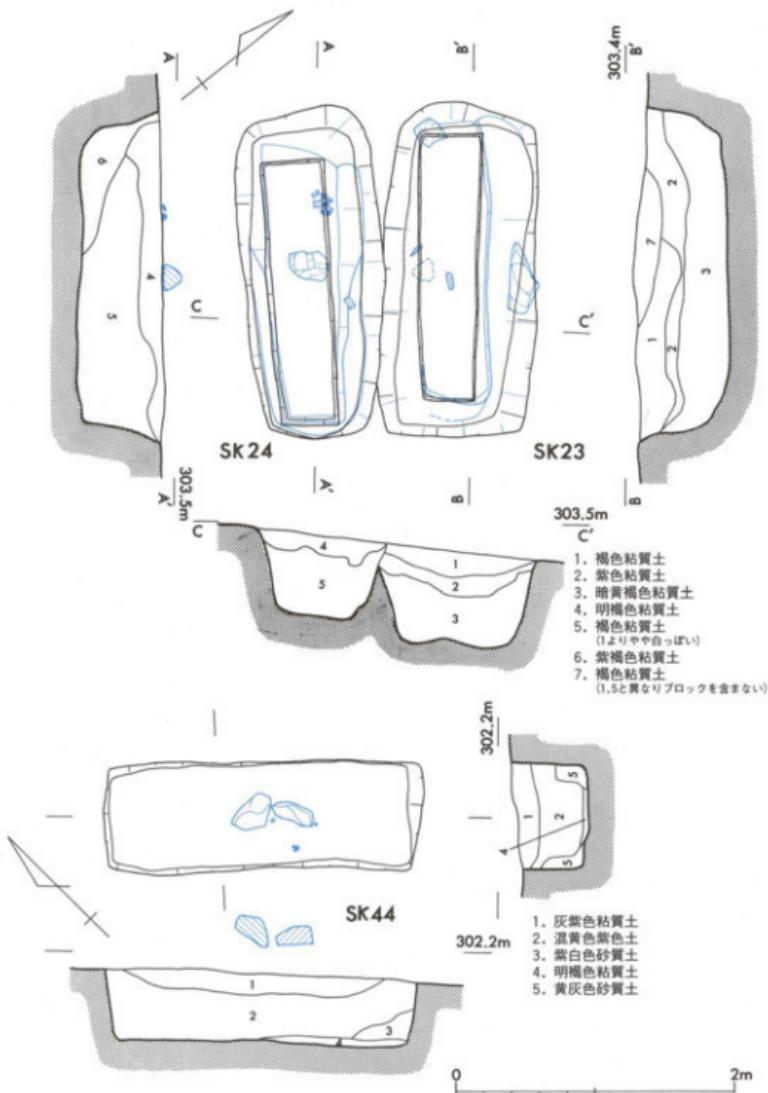
2基とも土壙中央の上面から砾とともに土器片が出土した。古式土師器の菱形土器と思われるが、図化できたのはSK24から出土した口縁部（第55図3）のみである。3は厚手の土器で、複合口縁の端部を外反させ、内面に一個所屈曲部を設けている。

SK44（第61図、図版42-2）

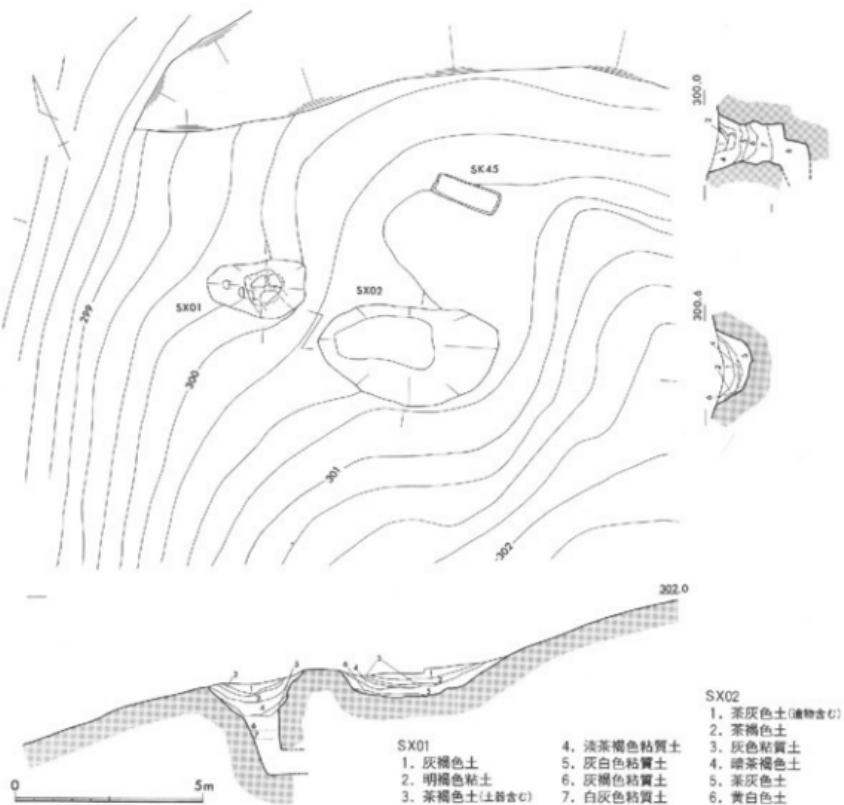
SK23から水平距離にして約5m、標高差にして約75cm北に下ったところに3m×4m四方の比較的平坦な面があり、そこに1基だけが存在する。全長2.25m、幅75cmの比較的整った長方形をなす土壙で、深さは約50cmである。底面は東に向かってゆるやかに傾斜しており、底面東半に明褐色のきれいな粘質土が堆積していた。南北両側辺には20~25cmの高さで裏込め土が残っていたが、短辺側ではそれが観察されなかった。これから推定される木棺の幅は53cmである。土壙底面から約70cmのところから大形の砾とともに古式土師器片が少量出土したが、器形の判るものはなかった。

（5）第5木棺墓群（第62図、図版42-3）

第4群SK44からさらに水平距離にして約7m、標高差にして1.5mほど尾根筋を北に下ったところに土壙1基を発見し、これを第5群とした。



第61図 重富遺跡 II区 SK23-24-44実測図



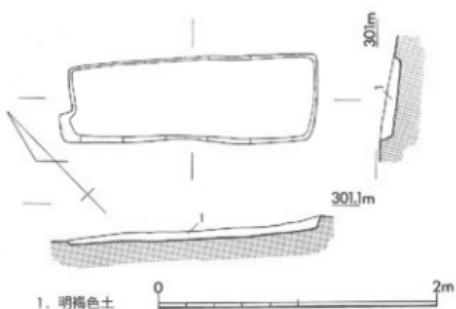
第62図 重富遺跡II区SK45およびSX01・02周辺図

## SK45（第63図）

本来の尾根筋から北西方向に小さく派生した尾根の頂上平坦面にあり、長さ1.73m、東端幅60cm、西端幅50cmの長方形を呈する。深さはわずか5cmである。

## SX01・02

SK45の南西の斜面がやや入り込んだ部分に、平面梢円形の大形の落ち込みが2個所確認されたため、SX01・02として掘り下げた。SX02は、長径4.8m、短径2.6m、深さ70cmで底面の地山は多少軟らかみがあって不自然な感じが残った。SX01は長径2.6m、短径1.6mで平面はSX01より一回り小さいものである。掘り下げてみると、周壁が深さ1mくらいまで徐々に窄まり、そこから円柱状にさらに1.7m程度掘り込まれていた。壁面には北西から北にかけて4段にわたって階段状の平



第63図 重富遺跡II区SK45実測図

壇部があった。底面は平坦で、しかも、そこから南に向かって幅、高さともに70cm程度の穴がトンネル状に続きそうなことが判明した。地山土の崩落が心配なため、これ以上の調査は断念せざるをえなかつたが、あるいはSX01と連続した地下式横穴のような遺構であった可能性もある。SX01の茶褐色土から土師器甕形土

器が（図版43-1），またSX02堆積層の茶灰色土から須恵器片が出土した。

#### (6) 第6木棺墓群（第64図、図版43-2）

第1群から尾根の鞍部を超えて少し南の尾根に移ったところで土壤を1基確認し、これを第6群とした。この部分は調査面積が限られているため1基しか発見していないが、複数基で構成されている可能性は高い。

##### SK33（第65図）

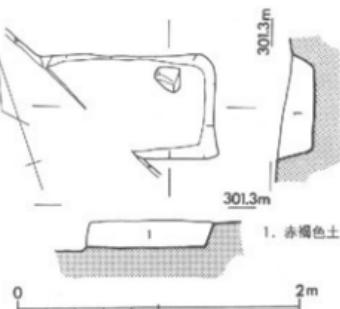
西半分が調査区外に伸びており、現状で長さ1.2m以上、幅72cmの長方形プランの土壤と考えられる。土壤上面で小形の礫が1点出上しているのみである。

#### (7) 第7木棺墓群（第73図、図版44-1）

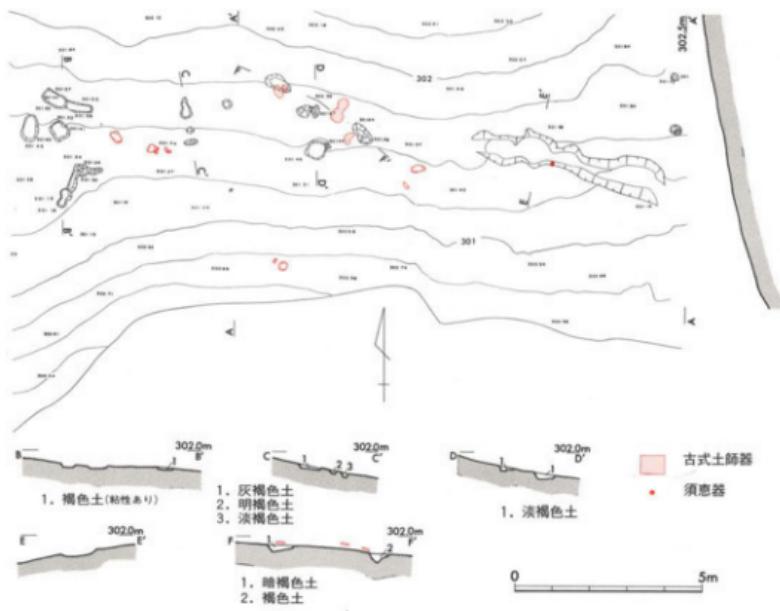
II区頂上から南東に伸びる尾根でも土壤が1基発見され、これを第7群とした。



第64図 重富遺跡II区南端遺構実測図



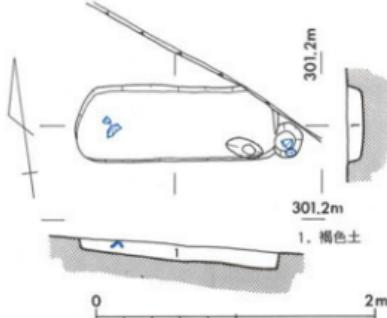
第65図 重富遺跡II区SK33実測図



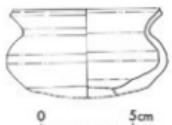
第66図 重富遺跡II区南斜面遺構実測図

## SK17 (第67図、図版44-2)

長さ1.45m、幅50cmの隅丸長方形の土壙で、主軸は尾根筋とあまり関係なさそうではほぼ東西方向に向く。褐色の比較的軟らかい土が堆積し、土壤内の西端で須恵器壺片が底面より少し浮いた状態で出土している。この須恵器 (第68図) は口縁径8.2cm、器高4.8cmの小形の短頸壺で、縦に約半分を欠損する。時期がはっきりしないが、II区内の包含層から出土する須恵器類とはほぼ同じ時期であろうか。この須恵器はSK17に直接伴うものではないが、土壙の作られた時期をおおよそ推定することができ、前項の第6群までの木棺墓群とは様相の異なるものである。



第67図 重富遺跡II区SK17実測図

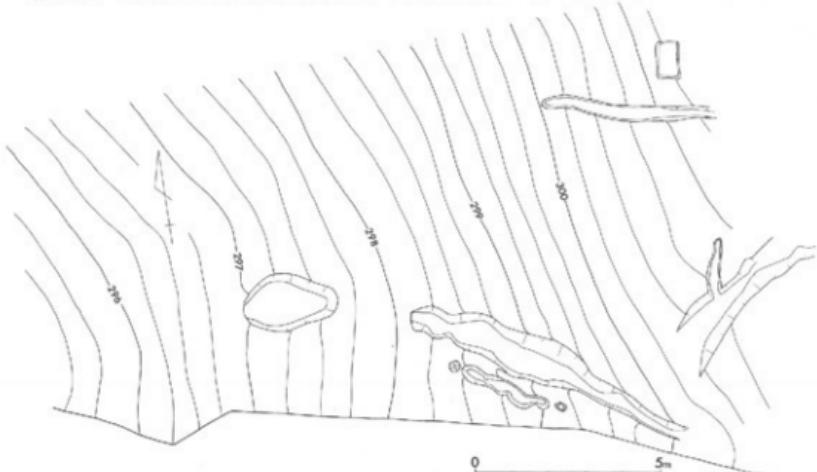
第68図 重富遺跡II区  
SK17出土須恵器実測図

## 2. その他の遺構・遺物

## (1) 南斜面遺構群 (第66図、図版43-3)

第1木棺墓群と第7群SK17との間の南斜面の、標高301.5m前後のところから、ピット群と溝状遺構1本が発見された。ピット群は全部で10数個あり、直径20cmの平面円形のものから約50cm四方の方形ないし長楕円形のものまで形は様々で、ピット内には褐色～灰褐色土が堆積する。ピット群の上に堆積した遺物包含層から古式土師器と須恵器焼片などが出土した。

第55図9～11はこのうちの古式土師器類で、9は壺形土器の口縁である。口径16.5cmで、口縁端部



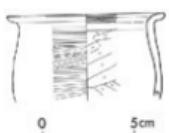
第69図 重富遺跡II区南端西斜面遺構実測図

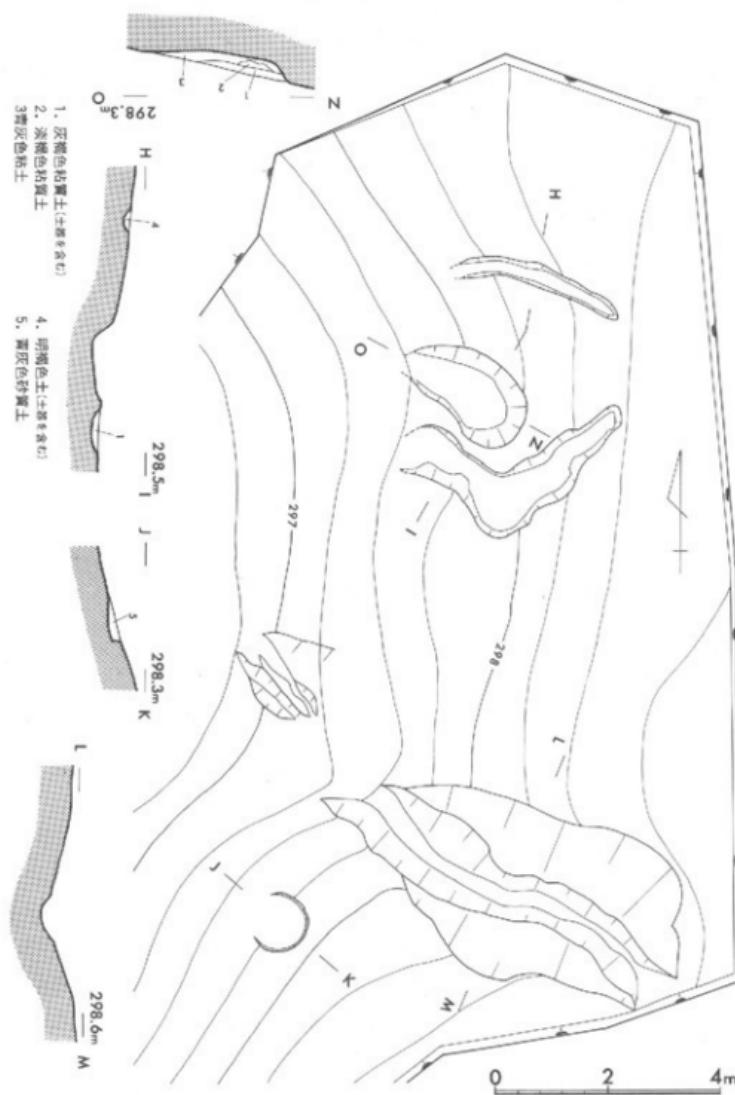
を外側から摘んで上面を平坦に作り出し、複合口縁の下端は下方に突出させている。器表面の遺存状態が悪く、調整がはっきりしないが、外面から頸部内面までヨコナデ、内面頸部下端から下はヘラケズリと思われる。10は壺形土器の底部で若干平底になり、内面にはヘラケズリ痕が残る。11は器台の受部から筒部にかけての破片である。

ピット群の東側には東西方向に伸びた溝状遺構がある。深さ15～20cmで、幅は50～110cmあり、遺構内から須恵器片が出土する。

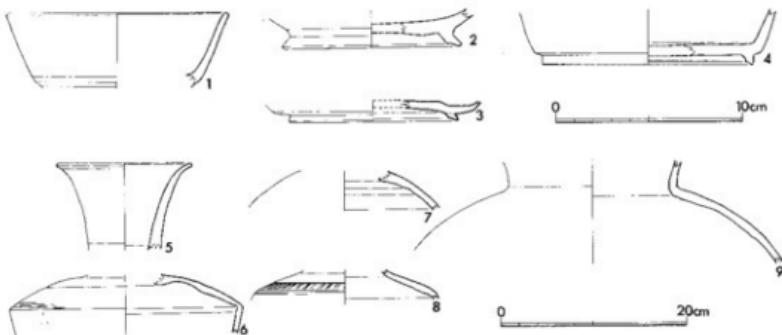
## (2) 南端西斜面遺構群 (第44・69図、図版27-1, 44-3)

第1木棺墓群から西の斜面でも溝あるいは道状の遺構を計6本ほど検出した。このうちSK36・43を切って等高線に直角に走る溝は幅

第70図 重富遺跡II区南端  
溝状遺構出土遺物実測図



第71図 重富遺跡II区北端遺構実測図



第72図 重富遺跡II区遺物包含層出土遺物実測図

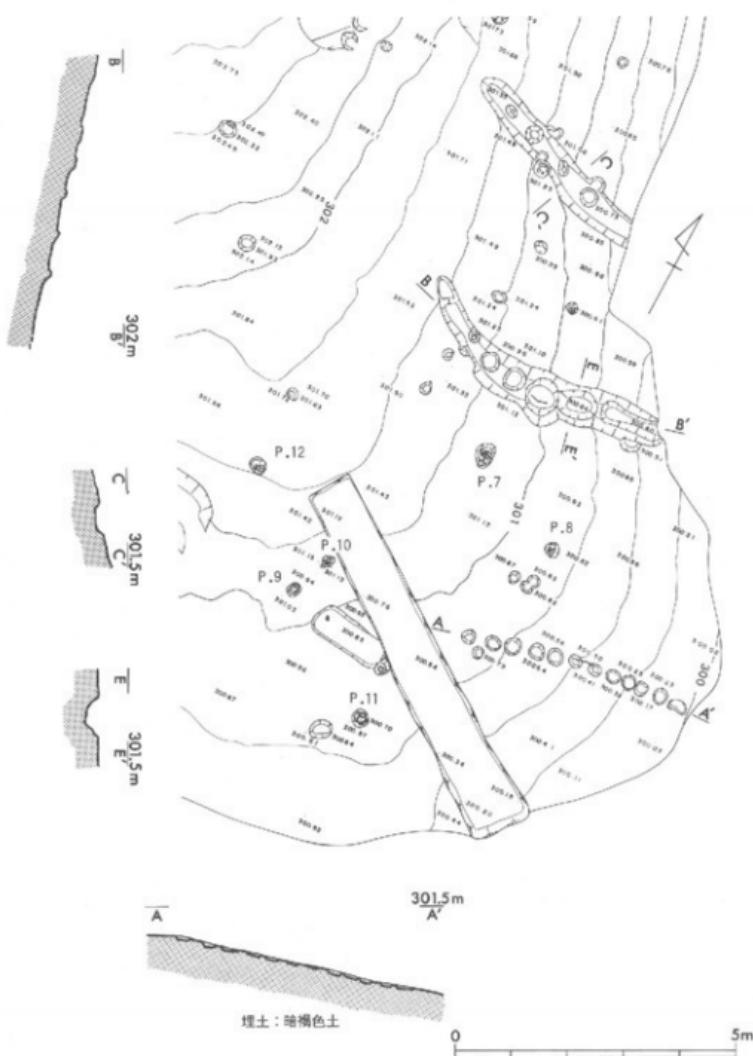
30cm、深さ10cmで須恵器類を伴っている。その他は幅1m以上の道状の遺構とそれに近接あるいは連結する細い溝状の遺構で、これらにも少しだが遺物が伴っている。第70図はSK20とSK34の間の溝状遺構から出土した土師器壺形上器で、外面と口縁内面に刷毛目調整を行い、内面胴部にヘラケズリを施したものである。

#### (3) 北端西斜面遺構群（第71図、図版45-1）

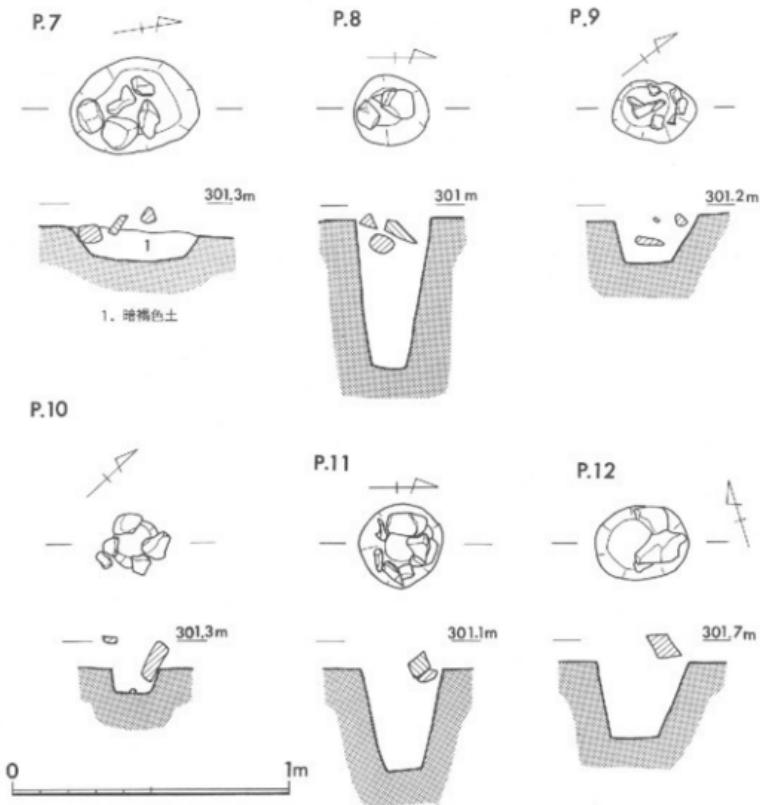
第5木棺墓群の北側でも、木棺墓は発見されなかったものの、溝と道状遺構、土壙などが発見された。第71図北端の溝は幅35~40cm、深さ10~15cmで、前項の溝と同様に溝内の明褐色土から土師器、須恵器が出土した。同図中央は、長径2.2m、短径1.2mの平面椭円形の土壙状の遺構と、これを囲むように鍵状に屈折した幅1m前後の溝状遺構で、土壙状遺構底面には長期間水が溜ってできたような青灰色粘土が堆積し、その上面と溝状遺構から須恵器類が出土した。その南には等高線にはば直交するように、斜面を幅広くゆるやかに削ったのち、さらに弧状に深く掘り込んだ道状の遺構がゆるく蛇行して残っている。また、直径1.1mのほぼ正円で底面も水平な土壙も1基検出した。これらの遺構のうち、最初の溝は出土遺物から奈良時代前後にできたものと考えられるが、その他については年代を限定できる根拠は見出せなかった。

#### (4) 遺物包含層出土遺物

II区では、主に南斜面から西斜面にかけてと、第4木棺墓群から北側の西斜面を中心に少量ながら須恵器、土師器を包含する茶褐色~明褐色土層を検出した。土師器はいずれも細片で図化できるものはない。須恵器は蓋坏と壺壺類が大半であった（第72図、図版48-2）。1は坏身體部で口縁端部まで直線的に立ち上がる。3・4は高台部の破片である。高台は直立するものとハの字形に外に向くものの二種類があり、どちらも底面が内側を向いている。2・5~8は長頸壺の破片で、頸部から肩部までが丸く肩部の棱線が目立たないものと、同部が平坦で棱線の明瞭なものがあり、8



第73図 重富遺跡Ⅱ区南東部遺構実測図

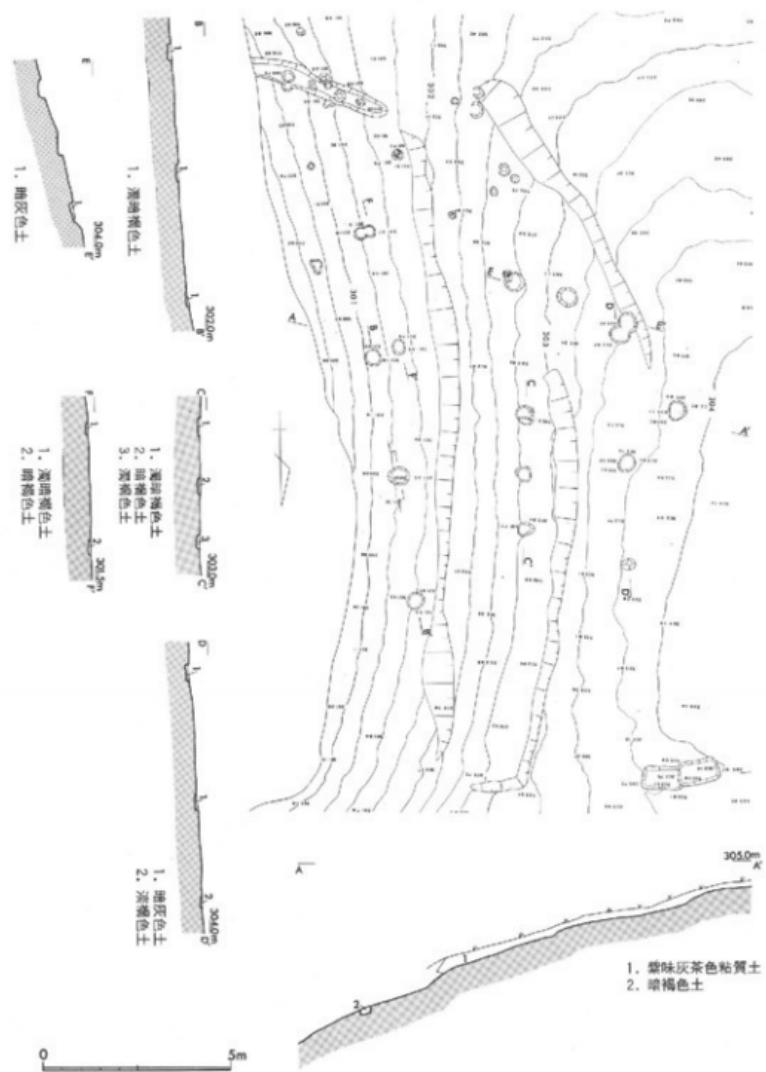


第74図 重富遺跡II区南東部ピット実測図

には肩部に平行沈線とその間に櫛による2本単位の斜行刺突文が施されている。9は大形の壺で、外面に平行叩き目文のちカキ目、内面に放射状叩き目文のち部分的にヨコナデ調整を施す。

##### (5) 南東部道状遺構およびピット群（第73図、図版44-1）

第7木棺墓群付近で不規則に並ぶピット群と、そこから北側に一列のピット列と二列の溝状遺構を検出した。溝状遺構とピット列はいずれも斜面に縦に掘られており、溝状遺構内にはI区南斜面の道状遺構と同様に円形のピットが階段状に並んでいた。また、南端のピット列もほとんど深さがないところから、溝状の窪みはないものの本来は北の2本と同様の構造が推定され、これらはいずれも道状の遺構として理解してよさそうである。なお、北側の2本はその北側の加工段に連続して



第75図 重富遺跡II区東斜面加工段実測図

いることから、加工段と密接に関連し、それと同じ時期の所産と考えられる。

SK17周辺のピット群は平面がいずれも直径50cm以下の円形を呈しており、上面に集石を作りうるものとそうでないものの二種類がある。第74図はその集石を作りうるピット群のうち、比較的形態のはっきりしているものを抜き出したもの

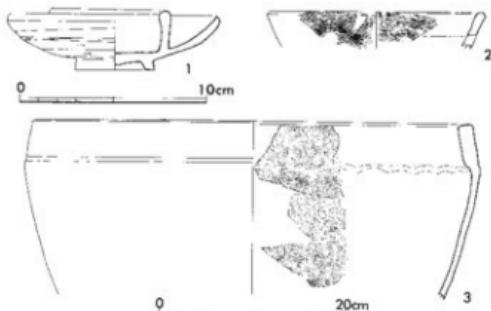
である。P. 8~12は深さに違いはあるが、いずれも集石の中央に直径10cm程度の空間があり、柱を立ててピット上面を集石で固定した様子が想像される。P. 8・9（図版46-1）は柱が抜き取られたあと、石が穴に落ち込んだものである。これに対して7は深さ15cm程度の稍凹形のピットで、石は中央付近に5個が固まっているだけであるが、これも上と同様のことが考えられる。これらのピット群の配列から建物が建っていたとは考えにくく、柵列などそれ以外の用途が考えられる。

#### (6) 東斜面加工段（第75図、図版45-2・3）

前項のピット群と道状遺構の北側には、尾根頂上部や下方から3段にわたって平坦面が作り出されており、各々の平坦面からピット列が検出された。平坦面はいずれも幅2~2.5mでやや傾斜があり、ピットの深さも浅いところから、もともと盛土があったことも推定される。ピットは直径30~40cmの円形で、約3.2m間隔で並ぶものとその半分の約1.6mで並ぶものの二種類がある。ピット内には前項のピット群と同様に内部に石がいっているものがある。石とともに出土した陶磁器類から、これらの遺構は江戸時代末期から明治時代ころと考えられる。

#### (7) 北端旧表土出土遺物（第76図、図版49）

II区北端遺構群のところにはかつて家屋があったとも畑があったともいわれているが、それを裏付けるように西側斜面に大量の盛土が観察され、最も厚いところでは2m以上盛られていた。そして、盛土下の旧表土から素焼きの上器類が出土した。1は直径11.4cmの皿の見込に高さ2cm、直径6.6cmの円鉢を乗せたもので、皿部外縁下部はヘラケズリ、その他は回転ナデ調整である。高台底面に回転糸切り痕が残る。證明皿のようなものと考えられる。2は直径23.4cm、内外面ともに回転ナデ調整の鉢形の土器だが、端部から2.5cmのところに直径1.5cmの穿孔がある。3は直径47.2cmのやはり鉢形の土器で、口縁部が4.5cmの幅で肥厚する。同部内面に同心円文の充て具痕が残る。



第76図 重富遺跡II区北端旧表土遺物実測図

第1表 木棺墓計測表

(単位cm, 数字は現存長)

群	土壤番号	土壤長	土壤幅	土壤深さ	木棺長	木棺幅	奥込土高	尾根上 長軸方向	頭位	土器	判別	備考
第1群	SK20	190	90	30	130	45	19	"	直交	不明		
	SK22	130	W35 E45	15	-	-	-	"	SE	N	○	
	SK31	260	N135 S115	90	170	N60 S52	77	"	平行	N	○	
	SK34	80	67	10	-	-	-	"	直交	"	○	
	SK35	115	55	25	115	55	24	45°	平行	NW	○	
	SK36	200	75	64	160	N56 S50	28	"	直交	"	○	
	SK42	100	60	34	-	-	-	"	平行	不明	○	
	SK43	160	60	20	-	-	-	"	直交	"	○	
	SK02	84	W55 E65	10	-	-	-	-	直交	不明		
	SK03	170	N72 S56	42	150	N50 S40	28	"	平行	N		
第2群	SK04	210	70	62	160	50	34	"	直交	"	○?	
	SK05	220	90	50	190	50	7	"	平行	N	○	
	SK06	100	60	50	-	-	-	"	直交	"	○	
	SK07	90	52	54	-	-	-	"	平行	N	○	
	SK08	90	60	14	-	-	-	"	直交	"	○	
	SK14	225	W65 E75	66	180	W38 E53	20	"	平行	N	○	
	SK21	156	75	18	-	-	-	"	直交	"	○	
	SK25	120	70	27	-	-	-	"	平行	NW	○	
	SK26	133	W73 E50	34	110	W50 E35	26	"	直交	"	○	
	SK28	133	73	24	-	-	-	"	平行	N	○	
	SK37	185	W80 E90	48	160	W30 E50	14	"	直交	"	○	
	SK38	195	65	32	-	-	-	"	平行	不明	○	

群	上端番号	上端長	土鱗幅	土壤深さ	木桿長	木桿幅	奥込上高	尾根 <sup>上</sup> 基輪方向	頭位	十器	到达	備考
第2群	SK39	200	55	50	—	—	—	平行	不明	○	○	底面
	SK40	155	35	28	—	—	—	"	"	○	○	底面側壁
	SK41	210	70	32	180	52	20	"	"	○	○	底面側壁
	SK46	176	N60 S40	12	—	—	—	"	"	○	○	底面
第3群	SK01	170	70	8	—	—	—	直交	"	—	—	—
	SK10	220	N93 S70	52	180	N59 S40	21	平行	N	—	—	—
	SK11	175	60	33	175	60	28	直交	不明	○	○	底面
	SK12	137	N70 S40	6	—	—	—	平行	"	—	—	—
第4群	SK13	75	55	22	—	—	—	"	"	—	—	—
	SK15	175	65	19	—	—	—	"	"	—	—	—
	SK16	65	50	15	—	—	—	"	"	—	—	—
	SK27	169	60	22	—	—	—	直交	"	—	—	—
第5群	SK18	105	63	23	—	—	—	"	"	—	—	—
	SK19	130	65	7	—	—	—	"	"	—	—	—
	SK23	240	W96 E100	77	190	W45 E37	13	"	"	—	—	—
	SK24	218	W90 E75	60	180	W40 E36	16	"	"	NW	○	—
第6群	SK29	180	W64 E70	40	165	40	19	"	"	NW	○	—
	SK30	200	W76 E50	25	160	W36 E28	15	"	"	NW	○	—
	SK44	225	75	50	—	53	20	"	"	不明	○	—
	SK45	173	W50 E60	5	—	—	—	"	"	—	—	—
第7群	SK33	(120)	72	18	—	—	—	"	"	—	—	須志器
	SK17	145	50	10	—	—	—	45°	"	○	○	須志器

## 第4節 Ⅲ区の調査

重富遺跡Ⅲ区はⅡ区とやつともて古墳群との間の谷部に位置する。この谷は幅30m程の狭いもので、南に向かって開口しており、谷全体が遺跡となっている。Ⅲ区はその最深部の谷底と東半分を占めている（図版46-2・3）。遺構は、調査区北半の南向き斜面で遺物包含層と奈良時代の堅穴住居跡を検出し、住居跡の周辺でも溝やピット、土壙等を確認した。また、谷底部から南側尾根部にかけても同様の遺物包含層と土壙や溝状の遺構を検出し、さらには小形の石室をもった小古墳も発見された（第77図、図版50-1）。以下、各斜面ごとに記述する。

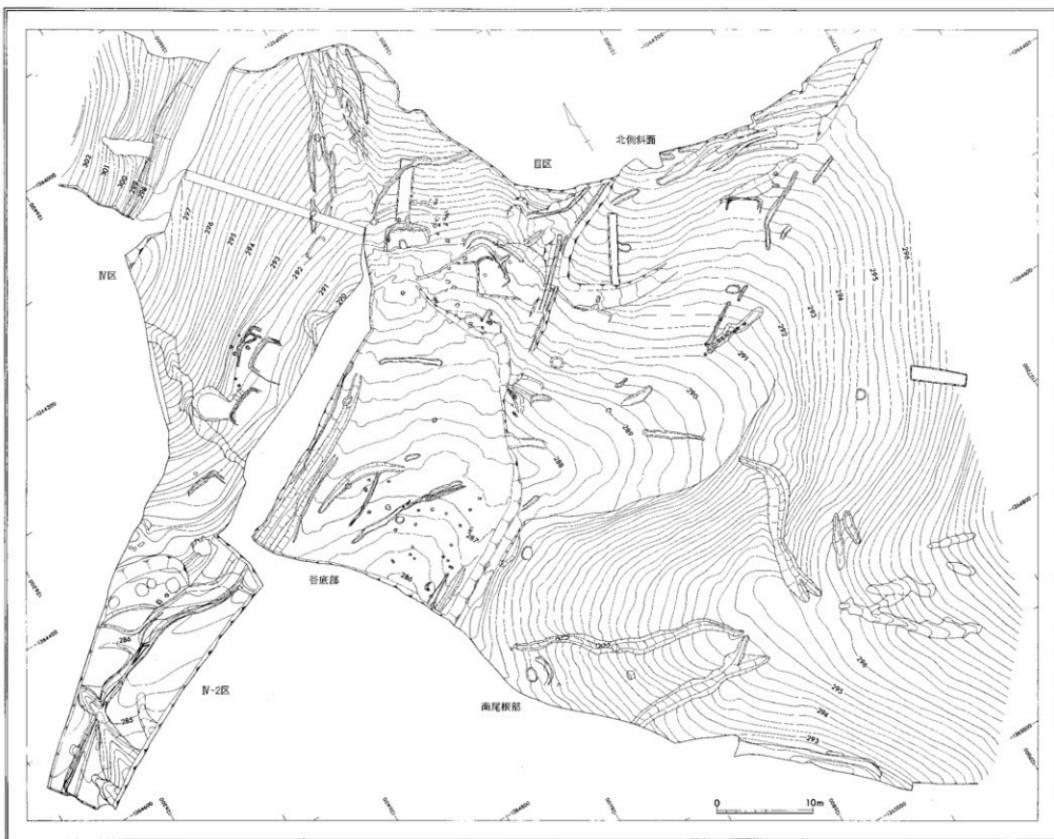
### 1. 南尾根部の遺構・遺物

南尾根部は調査開始当初、尾根の稜線部までが調査範囲であったが、工事計画の変更に伴い南斜面の裾まで範囲が広がった。このため、土壙や古墳、加工段などが新たに発見された（第78図、図版51-1）。

#### (1) 古 墳（第79～81図、図版51-2・3、52）

尾根の南端、標高289.5mから290mのところに位置している。山手側に周溝を廻らせ、墓域を区画したと考えられるが、盛上の大半がすでに流出していて埴丘の形態は認めなかった。周溝は深さ約20cm、幅0.9～1.4mのものが埋葬施設から1.6～2m離れた位置に弧状に掘られており、溝中央で長さ6.8mである。埋葬施設の南北端に明確な溝の続きは検出されなかったが、主軸線上の土層観察で確認した窪みがその延長部分に相当すると仮定すると、埴丘は周溝内側で直径6.4～6.8mの円墳ということになる。盛上は地山を一度整形した後盛ったと考えられ、最下層の灰褐色土が地山の直上にわずかに残っている。また、周溝にも同様の土が堆積する（第79図）。

埋葬施設は主軸を等高線と同じ方向に向けた堅穴式石室で、天井石と側壁上半のかなりがすでに失われている。主軸の方位はN10°Eで、石室規模は内法で長さ0.85m、幅0.3m、高さ0.6mあり、平面形はほぼ長方形であるが南側は隅が丸くなっている。東側壁は山石を3段に積み上げたもので、基底部には石の広い面を内に向けて3枚立て、その上に今度は小口積みに2段を積む。そして、北側壁の高さからするともう1段あったことが考えられる。西側壁は基底部に東側の2段分にあたる大きさの石を立て、その上は同じように小口積みを行うが、中央の1枚を除いてすべて失われている。北側壁は幅90cm、厚さ25cmの1枚の大きな石でできており、南側壁は一回り小さい石を基底部に据え、さらに1～2段築かれていたものと考えられる。石室はこの南北両側壁で長辺の側壁を挟み込むように組まれているが、両側壁とも現在は上端が大きく開いており、各壁とも抑え積みなどは行っていない。なお、東側壁には若干持ち送りが認められる（第80図、図版52-1・2）。遺物は



第77図 重富遺跡III・IV区地形測量図

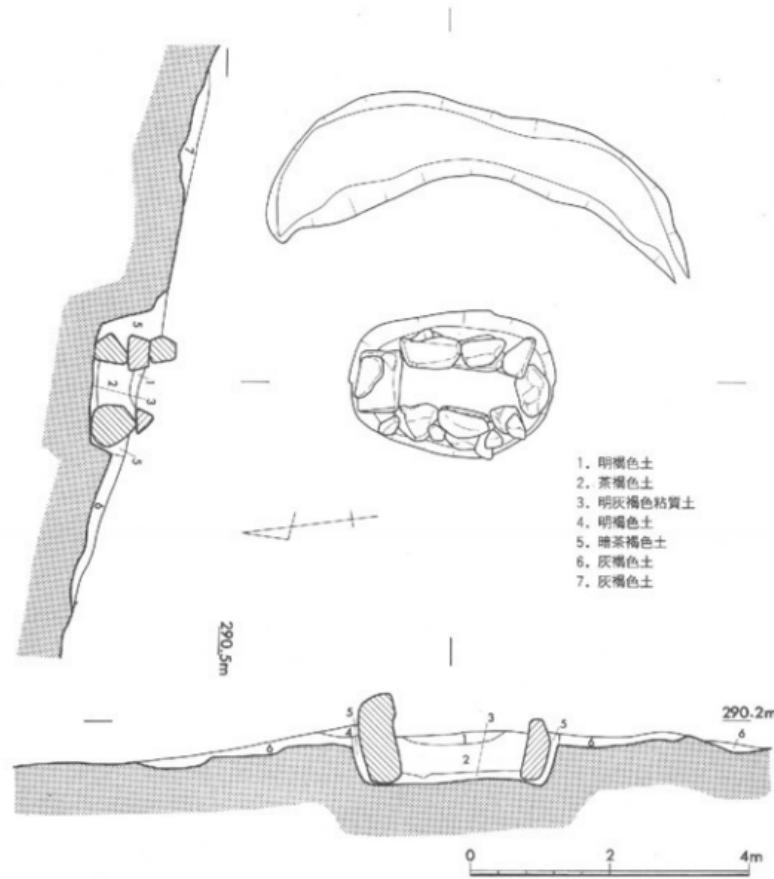


第78図 重富遺跡Ⅲ区南尾根部遺構位置図

まったく出土していない。

堅穴式石室の掘り方は長径1.5m、短径1.05mの平面梢円形で、盛土の上から掘り込まれている。地山面での墓壙の深さは山手側で44cmで、底面は水平である。石室各側壁の下にあたる部分には、石材を据え付けるための深さ5cm程度の穴や溝が掘り込まれており、さらに安定を図るため、置き土も行われていた（第81図、図版52-3）。

遺物がまったく出土していないことから築造年代がはっきりしないが、構造的には平成元年度に



第79図 重富遺跡III区古墳実測図

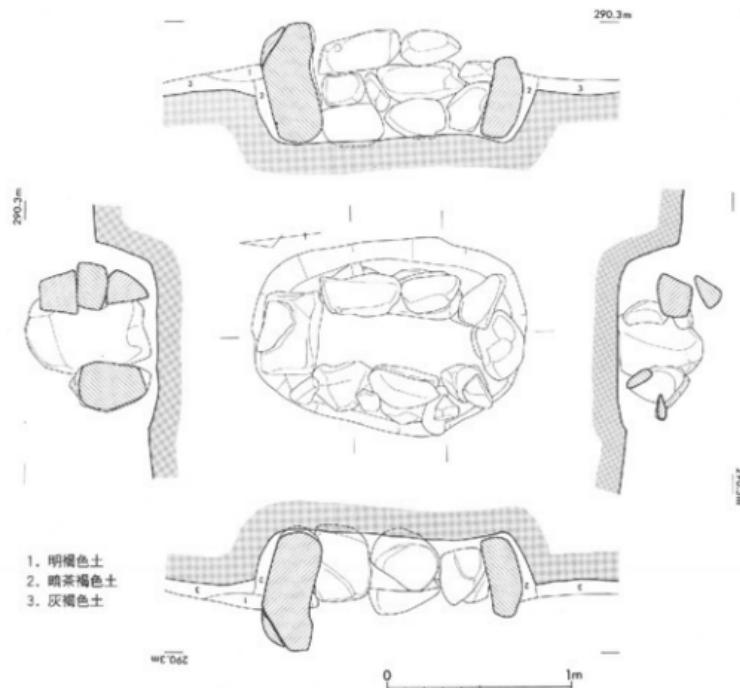
調査した隣接の後河内古墳と非常によく似ており、これとの関連性が考えられる。

## (2) 土 壤 (第82図)

尾根先端部と古墳の斜面上方の2箇所でそれぞれ土壤を1個検出した。

SK02 尾根中ほどの尾根筋からやや南斜面側に移ったところで発見した土壤で、山側が少し崩れて広がっているが、本来は長径85cm、短径55cmの平面長椭円形を呈していたと考えられる。深さ約50cmで、底面は平らである。土壤内には褐色粘質土が堆積し、下半には地山の紫土が混じる。遺物が出土しておらず、性格不明である(図版53-1)。

SK05 尾根の先端で発見した土壤で、すぐ下には長さ4m以上の円弧状の平坦面がある。土壤は長径1.4m、短径1.1mの椭円形をしており、底面は斜面下方にゆるく傾斜している。遺物は出土していないが、ふかふかの灰色土が堆積しており、近世以降の遺構の可能性がある(図版53-2)。



第80図 重富遺跡III区古墳竪穴式石室実測図

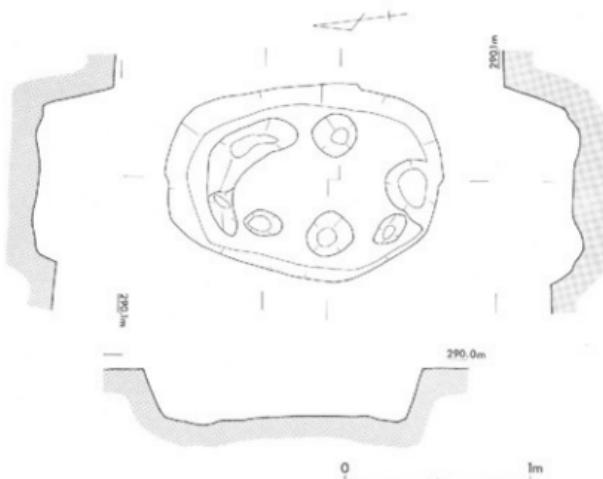
## (3) 加工段

第83図、図版

53-3, 54, 55

-1)

南斜面の裾部で発見した遺構で、斜面を長さ15m以上にわたってほぼ水平に加工したものである。上下2段あり、上段は下段が埋まって、あるいは埋めたのち加工されたもの



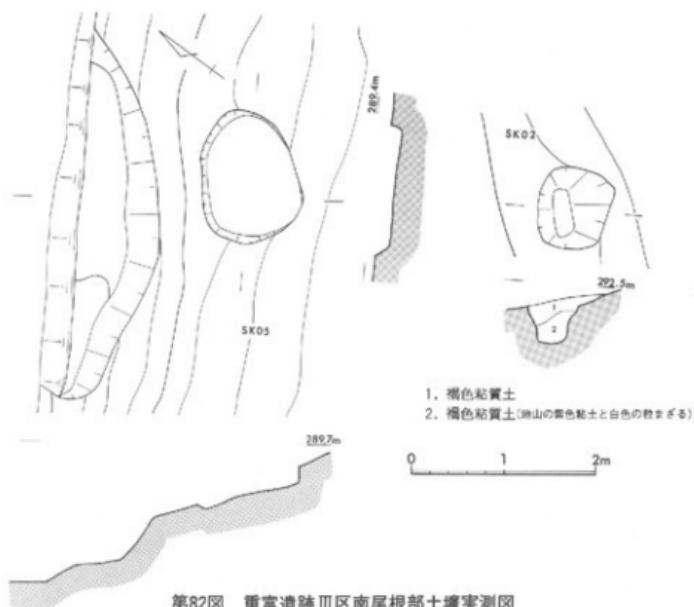
第81図 重富遺跡III区古墳墓壙実測図

ので、下段に堆積した灰褐色土の上から掘り込まれている。調査区の端でこれ以上発掘できないため、下段全体の規模は明確でないが、わずかに検出した底面の長さは約12mで、壁は傾斜角25度程度の比較的なだらかなものである。

上段は東端がゆるやかに屈曲して、壁高は約75cmと高い。北西に向かうにつれ壁高は低くなり、中央以北では約25cmである。壁下に底面幅で20~50cmの溝が廻っていたと考えられるが、中央部分ではそれが今は判らなくなっている。溝および段上には茶褐色土が堆積し、中央付近ではその上の2個所から集石が確認された。北側の集石は長さ20cmまでの角砾10個弱で築かれており、南側の集石は30cm以上の砾10個以上で組まれている（図版54-1・3）。集石に伴う遺物は発見されていないが、南側集石下周辺の茶褐色土から土師質土器片が出土した。第84図1がその土師質土器で、口径12.1cm、器高4.4cmの碗である。底部外面に回転系切り痕が残り、大きく開いた口縁部付近には水引きによる起伏が明瞭に残る。色調は黄褐色である。

南半には加工壁の上にさらに長さ約2m、幅30cm、山手側で深さ18~20cmの深い溝があり、そこからは鉄製の刀子が出土した（第83図黒丸）。現存長5.6cm、脊の厚さ5.5mmで、茎の長さは1.5cmである（第84図3）。

なお、この加工段の斜面上方の広い範囲で、遺物を含んだ明褐色土の堆積が確認された。遺物の量はさほど多くなく、ほとんどが須恵器片であった。このうち、第84図2は加工段に近いところか



第82図 重富遺跡Ⅲ区南尾根部土壤実測図

ら発見された坏の底部片で、高台先端がやや細くなり、底面内側に若干段がつくものである。

#### (4) 道状遺構（第78図、図版55-2・3）

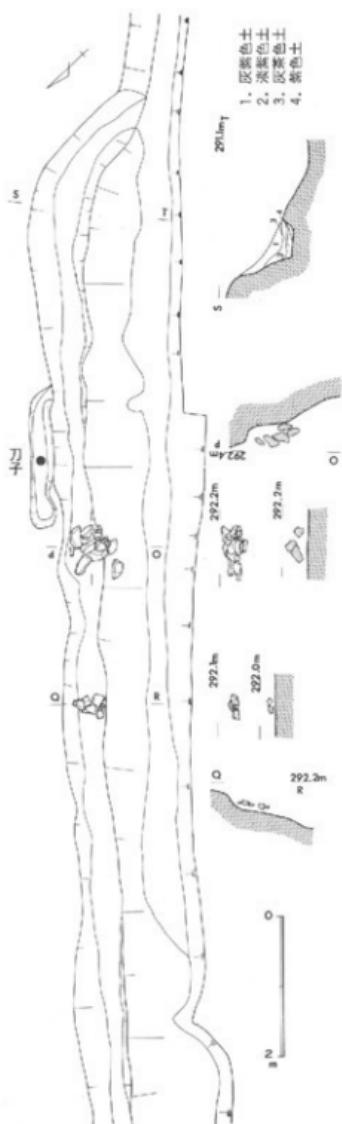
南尾根部ではその他に、尾根筋に添って、あるいは北側谷底部から尾根に向かって登る溝状の、あるいは道状の遺構を複数検出した。このうち、幅が1m以上あって部分的に底部に階段状に円形の窪みが続いたりするものは、I・II区と同様道状の遺構と考えられるが、幅が50cm程度まで比較的小いものはその機能が明確でなく、ここでは溝状遺構として扱っておく。

## 2. 東斜面の遺構・遺物

Ⅱ区西側の斜面で、ほぼ中央付近にわずかながら傾斜がゆるやかになっているところがあり、そこから遺物包含層と土壤が1基発見された（第85図、図版56-1）。

#### (1) 土 壤（第86図、図版56-2）

遺物包含層中央下の地山に掘り込まれた土壤で、SK01とした。平面は一辺1.1mの丸みを帯びた正三角形を呈する。山手側の壁面はゆるやかで若干平らなところがある。底面は平坦で、山手側壁面の一部（第86図の黒塗部分）に焼けて赤く変色した貼粘土が残存し、底面北半には小さな木炭の



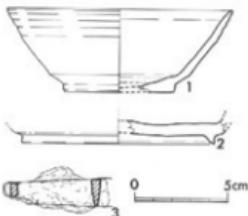
第83図 重富遺跡Ⅲ区南尾根部加工段実測図

塊からなる炭化物層が確認された。埋土はやや粘性のある暗灰褐色土で、炭化物や炉壁のような焼けた粘土の小片を多量に含み、須恵器片も混在していた。

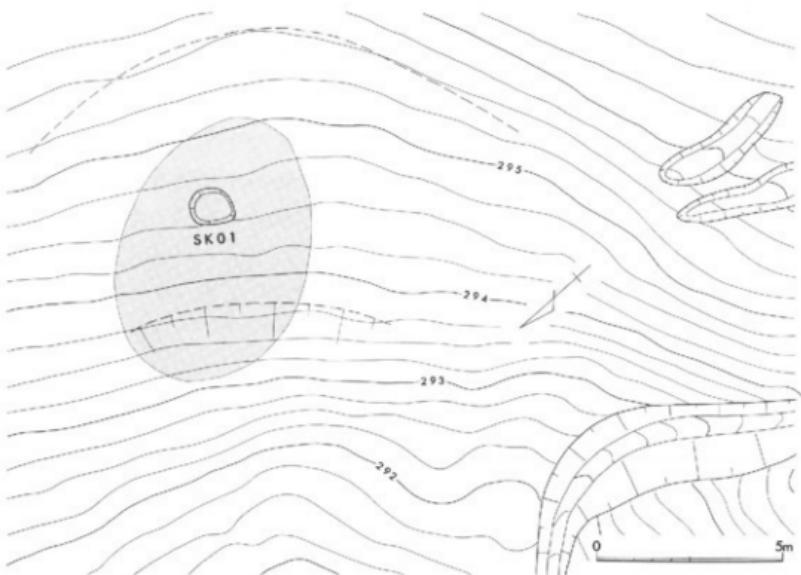
#### (2) 遺物包含層（第85図）

第1次のトレンチ調査の段階から地表面にわずかな平坦面があったが、トレンチからは遺物は出土していなかった。しかし、全面調査を行ったところ、トレンチ脇の地山斜面の標高293.75mから295.5mの間に、水平距離にして幅約7.5m、長さ約13mの緩斜面があり、地山直上に堆積した茶褐色土から、SK01を中心にやはり水平距離で長径7.25m、短径5mの楕円形の範囲に多量の須恵器が出土することが判明した。しかも、さらに詳細に須恵器の出土状況をみた場合、SK01の東西両端から斜面下方に向かって2条に特に濃密に出土するという特徴が窺われた。残念ながら発掘調査によってこの遺物の集中とSK01との関係を明らかにすることはできなかったが、付近の斜面や尾根頂部のⅢ区でこれに関係する遺構がないことや、SK01内から発見された炉壁状の粘土塊や炭化物層から、窯跡やそれに関連した施設の存在が想定でき、両

者の密接な  
関係がつと  
に推定され  
る。



第84図 重富遺跡Ⅲ区南尾根部  
南斜面出土遺物実測図  
(1・3溝内、2明褐色土)



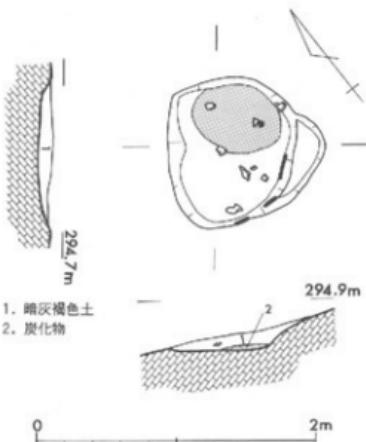
第85図 重富遺跡II区下方斜面平坦部地形測量図

## (3) 出土遺物 (第87・88図、図版

66-2, 67)

ほとんどが緩斜面の茶褐色土から出土した須恵器類であるが、若干別地点のものや須恵器以外のものも混じる。

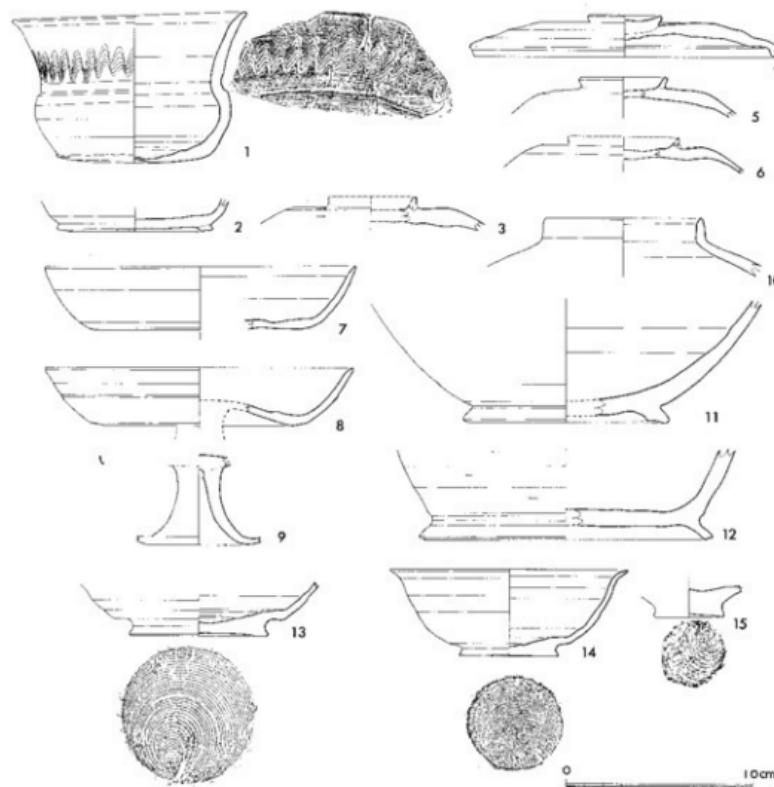
第87図1は口径12.5cm、器高8.1cmの広口の小形壺である。薄い茶灰色を呈しており、軟質な感じを受ける。頸部と肩部の境に沈線を1条巡らし、その上に櫛描き波状文を施している。全面回転ナデ調整で底部はヘラ切り後ナデと思われる。器形的にも櫛描き波状文を施す点においても類例をあまりみない土器である。2~6は蓋環類で、环には断面M字形の低い高台がつく。蓋は凝宝珠状つまみが著しく扁平になって凹形



第86図 重富遺跡III区東斜面SK01実測図

になったようなつまみ(4)と細身の輪状つまみの二種類があり、前者には丸みのある天井にやや内に向かって直立する端部がつくのに対して、後者には平らな天井がつく。大阪陶邑古窯跡群の型式1～2段階、平城京では平城宮Ⅲ～Ⅳ併行であろうか。7～9は高杯片でいずれも別個体である。杯部は薄手だが口径が比較的大きく、口縁端部に向かって立ち上がりは大きく開く。9の脚部はやや低脚で、欠損している端部の形態は4の蓋の端部に近似したものと推定される。10～12は壺類で、10は短頸壺、11は長頸壺、12は広口壺の破片である。10の短く直立する口径部の下は球形の胴部である。

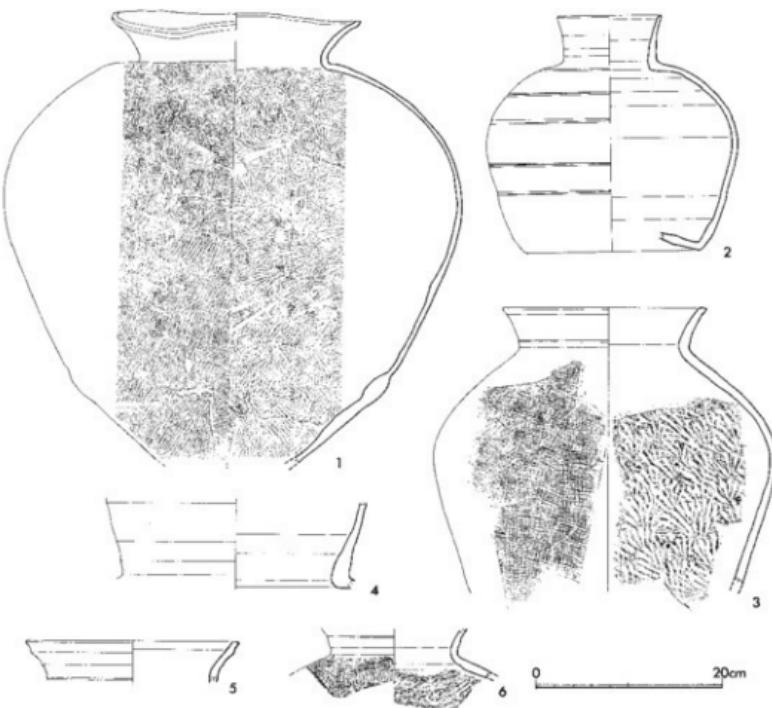
第88図は中・大型の壺類で、1は大きく外反する口縁の上端と外面に平坦面を作り出す。胴部は外面に平行叩きのちカキ目、内面は放射状の充て具痕跡が明瞭に残る。5も口縁外面下がやや隆



第87図 重富遺跡Ⅲ区東斜面出土遺物実測図(1)  
(8: SK01, 12-15: 明褐色土、その他は茶褐色土、特に1-4-7-13-14は土器集中部)

起して隆帶状になっている。3は厚さが1cm以上もある厚手の甕で肩部に丸みがなく、胴部下半も直線的である。外面に格子目叩きのちカキ目調査を行い、内面には1と同様だがもっと大形の放射状充て具痕が認められる。2は口径11.3cm、器高25.2cm、胴部最大径27.1cmの中形の平底甕で、口縁は若干外反する程度で、端部に向かって徐々に薄くなる。底面径は器高の割に大きく、復元直径は約19cmである。内外面ともに回転ナデ調整を行い、胴部外面に5条にわたって1~2本の沈線を巡らす。胎土は暗褐色で口縁端から胴部にかけて自然釉が顯著である。

第87図13~15は上師質土器の甕で、いずれも高さ1cm前後の半高台がつき、底面には回転糸切り痕が残る。体部は内湾して立ち上がり、口縁端は短く外反する。15は軟質で高台部分しか残存していないが、13・14は焼成も良好で13は暗青灰色、14は灰黒色~赤茶色を呈する。11世紀ころのものであろうか。



第88図 重富遺跡III区東斜面出土遺物実測図(2)  
(5以外は土器集中部)

### 3. 北斜面の遺構・遺物

Ⅲ区北斜面はやつおもて18号墳の南斜面下方にあたるが、町道とその盛土によって18号墳とは調査区を分けられている。Ⅲ区の中で最も遺構の集中するところで、堅穴住居跡8個所、土壙2個のほか、多数の溝および溝状遺構を検出した（第89・107図）。

#### (I) 堅穴住居跡

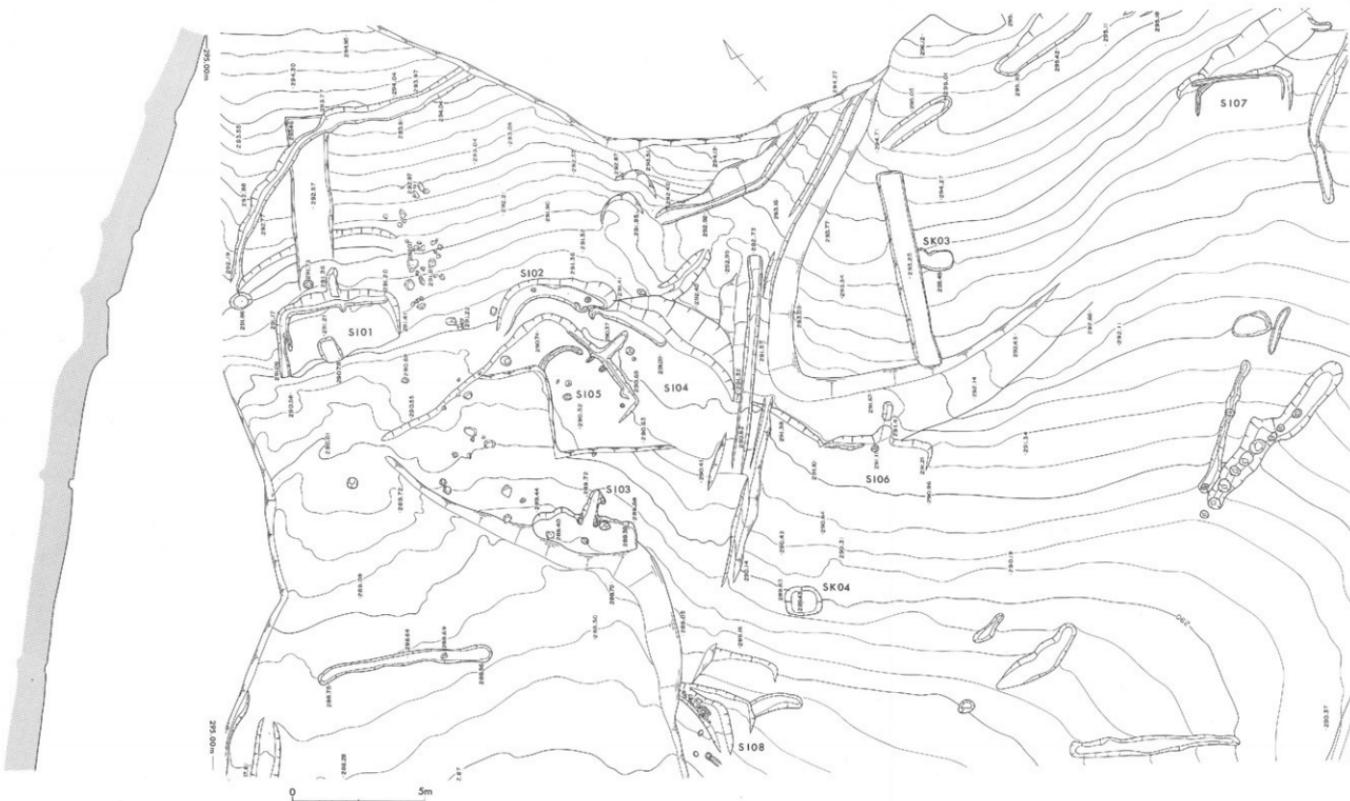
全部で8個所検出した。いずれも斜面を水平に掘り窪めたのち、その上を斜面の下側に盛って、床面の平面プランが方形になるように作られた堅穴住居跡と考えられるが、確認できた住居跡はいずれも盛土部分が流出している。残存する壁面の下には排水用と考えられる溝が廻り、山手側の壁面に作り付けのかまどと煙道（煙出しの穴）を有する住居跡とそうでないものが各々4個所ずつあり、後者の場合には住居跡中央付近に炉跡が認められる。また、各住居跡とも柱穴になりそうなものが認められなかった。

#### SI01（第90図、図版56-3～58-1）

Ⅲ区北西端で確認した住居跡で、その西側は溝状遺構を境にしてⅣ区と接している。昭和63年度のトレンチ調査で落ち込みが発見され、堅穴住居跡群発見の端緒となったものである。煙道の外側に住居の壁に平行になるように溝を廻らした住居跡で、住居跡と溝との間は1.1～1.6mあり、溝の長さは約7.3m、底面幅は30～60cmである。西端を性格不明の上壙で切られ、住居跡側の立ち上がりはほとんど観察されない。住居跡本体はほぼ同じ位置で一度建て直しが行われている。古段階の住居跡は内側の溝で区画される範囲で、一辻3.9mである。周溝は軽狭で東側が浅く、西側は深い。新段階の住居跡は若干大きくなつて一辻4.2mである。古段階の床面に茶褐色土で貼り床を行い、壁下の溝も古段階よりは広く深く作られるが、東側には認められない。両段階とも煙道の前でも途切れることなく続いている。

山側の壁面は中央に設置された半地下式の煙道は古段階の住居跡から使用されていたもので、長さは約1.2mである。もともと幅約30cmの断面U字形の穴（図版57-2）を掘り、その上に粘土を貼って天井を作り出したものである。煙道底面から天井部までの高さは約20cm、屋外の煙道口は直径約35cmの平面円形である。かまど部分の東辺には石の抜取り痕と考えられる窪みが溝から突き出しており、その周囲が焼けて赤く変色していた。また、そこから約30cmの間隔をおいて東側にも直径30cmの範囲で焼土が認められたが、これらの焼土は新段階の住居跡に伴うものである。

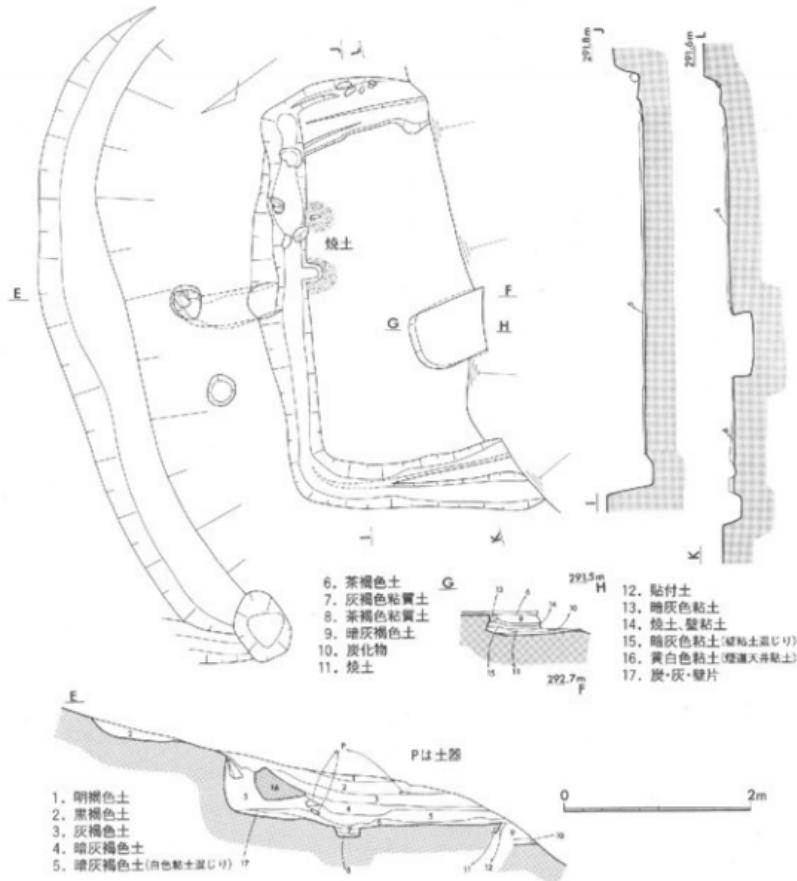
床面中央部には現存で長さ90cm、幅77cm、深さ25cmの隅丸長方形の窪みが設けられていた。床面には燒土層があり、それ以外の壁面には厚さ1cm程度の粘土が張り廻されているのが観察された。遺構内の堆積土は最下層が炭化物層で、その上は莖粘土や燒土の塊が灰や炭化物と混在する暗灰色の粘質土である（図版58-1）。このことからこの遺構はかまど様のものとも考えられるが、構造



第89図 重富遺跡Ⅲ区北斜面遺構位置図

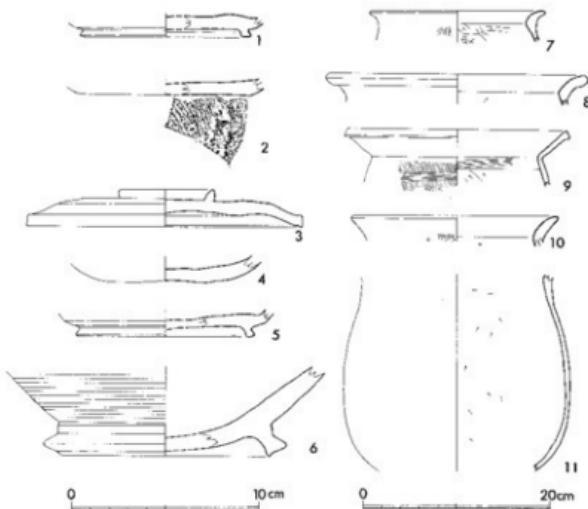
上は何らかの窓跡に近いように思える。建て直しの際、埋められ、貼り土で覆い尽くされていることから古段階の住居跡に伴うものと考えられるが、あるいはそれ以前に作られた別の遺構を考えることもできる。

遺物は煙道や周溝部分の暗灰褐色土から土師器断片（第91図9・10）が、また床面東端では壁面に貼り付くように須恵器蓋と土師器断片（同図3・11、図版57-3）が出土した。これらはいずれも新段階の住居跡に伴うもので、その他に住居跡に流入した埋土からも須恵器片と土師器片（同図



第90図 重富遺跡III区SI01実測図

1・2・4～8) が出土した。3は輪状つまみのつく蓋で、口縁端部の立ち上がりがほとんどなく、内面がわずかに段になるのみである。1・2・4・5は杯の底部片で高台のないものは回転糸切り痕が残る。6は外面にカキ目調整を施した壺の底部で、その破片はSI01からSI02付近までの広範囲で出土し

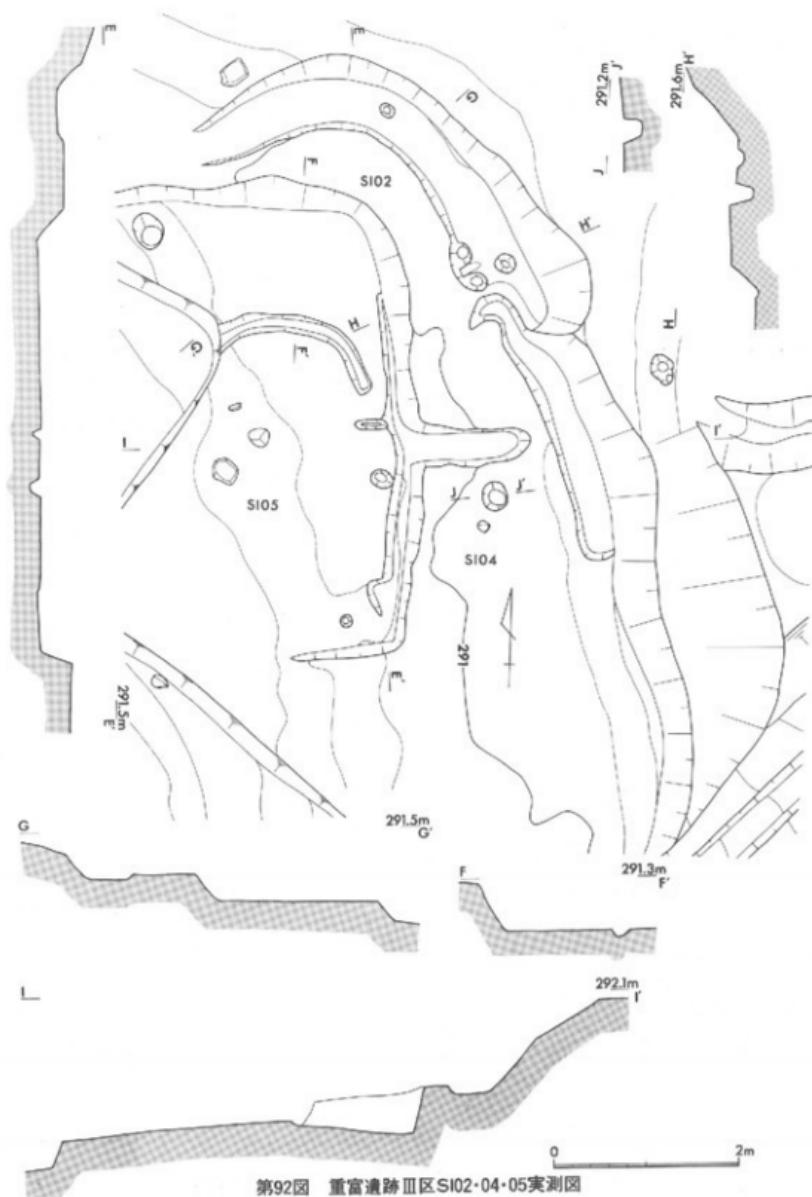


第91図 重富遺跡III区SI01出土土器実測図

ている。上部器型形土器には口縁部の形態に2種類のタイプがあり、その一はくの字形の口縁の頭部から上がかなり厚手で丸みがあるもの(7・8・10)で、その二は上半も頸部以下と同じ厚さで直線的に作られたもの(9)である。胴部内面ヘラケズリ、外面は刷毛目調整で胴部のやや下半に最大径があり、底面は比較的平らな丸底である(11)。

#### SI02(第92・93図、図版58-2・3, 59-1・2)

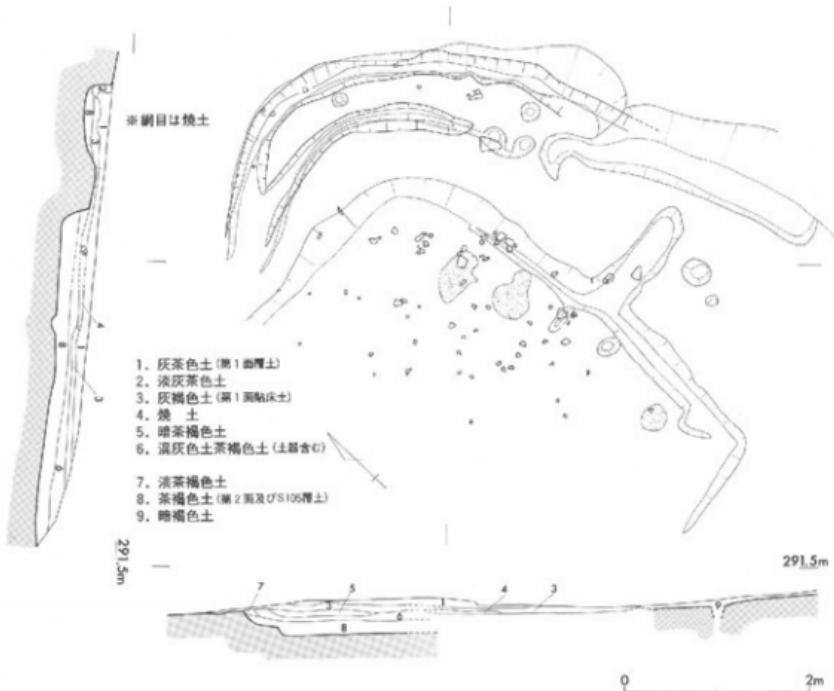
SI01の南東側にSI04・05と重なりあった状態で検出した。掘り下げ前から一辺約4mの方形に近いプランが観察されたところをSI02とし、南辺の地山加工痕はあるもののプランの不明瞭なところをSI04とした。また、SI02もトレンチで土層を観察したところ、貼り床の下にさらに遺構面が認められ、貼り床面を第一面、下の面を第二面としたが、第二面と同じ面にさらにSI05が発見された。SI02第二面は、検出した壁面は北西面と北東面の二面だけで、壁下には底面幅約45cm、深さ7～8cmの溝が廻るが南東端はSI04と重複していて形状がはっきりしない。溝の平面形は全長約7mへの字形で、溝内には直径15～20cmの浅いピットが4個確認された。発掘調査終了直後は第一面、第二面ともに住居跡と考え、速報でもそのように記述してきたが、整理を進めてきた結果、第二面壁下の溝がかなり幅広いことやSI05を埋めて整地した際貼り土をしていないことなど不合理な点が多くあり、第二面を住居跡とするには問題が多いことが判った。よって、この溝とSI05との間隔は約70cmで、溝西端にいたってはわずか20cmしか間がないといいが、SI05に伴う溝と判断するに至った。



第92図 重富遺跡III区SI02・04・05実測図

なお、当然ながら第二面部分からは遺物は一点も出土していない。

SI02第1面は第2面の溝とはほぼ同じ位置に幅20~40cmの溝が2本残っていたが、内側の溝は長さ3mあたりで消滅しており、外側の溝は途中で土色の区別がつかなくなつて続きを追うことができない。溝の内側は厚さ5cmの灰褐色土の貼り土を行って床面を作り出している。貼り土の中には上面に散在する土器群とは別個の上器類が含まれていた（第95図11~14）。住居跡の平面形は溝の形態から隅丸の方形と推定され、かまどや煙道が確認されなかつたが、住居跡中央から南半に相当するところから焼上が検出された（第93図）。焼上は20cm程度の間隔で2個所にあり、最深部で表面から4~5cmの深さまで焼けているのが観察された。また、これらの南側、おそらく住居跡の南端部分に相当すると考えられるところからも焼上が観察された。中央部分の焼土のまわりの床面からは須恵器、土師器片が多数出土した（第95図1~10、第104図1~6）。貼り床上面から出土した土器のうち上師器はいずれも細片で口縁部の形態しか把握しえない。第95図は須恵器蓋杯類で、蓋

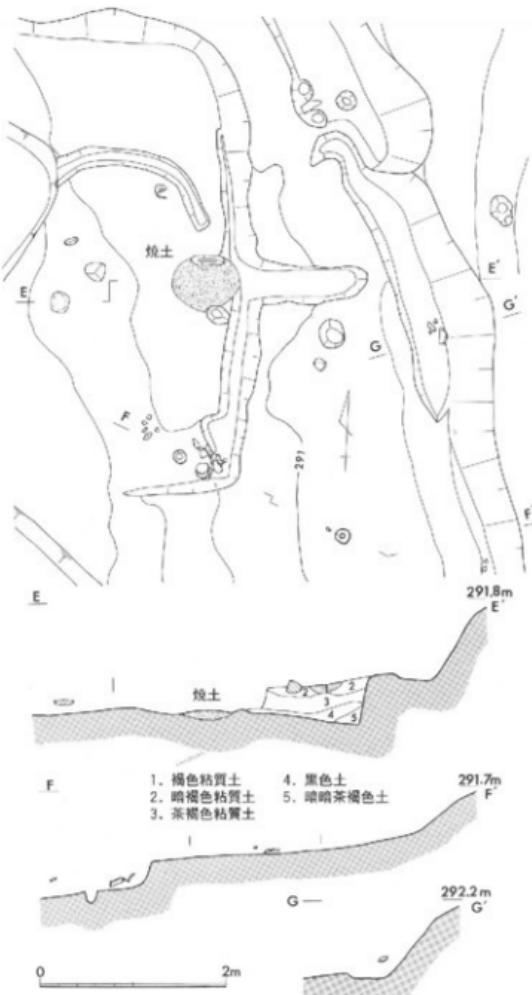


第93図 重富遺跡III区SI 02第1面遺物出土状況実測図

は輪状つまみに口縁端部の立ち上がりがほとんどないもの、坏身は体部が直線的に立ち上がり、高台は底面端より若干内側に位置するものが中心である。貼り床内部の土器（11～14）には蓋杯類に長頸壺片が加わっている。坏身に変化は認められないが、蓋は口縁端部が薄く断面三角形状に短く立ち上がっている。長頸壺は棱はないものの肩部が著しく張った土器である。胎土が灰色の緻密なもので、外面に透明緑色の分厚い自然釉がかかっている。肩部にヘラ描きによる二条の平行沈線文と短沈線文、頸部境に断面三角形の降帯がつく。

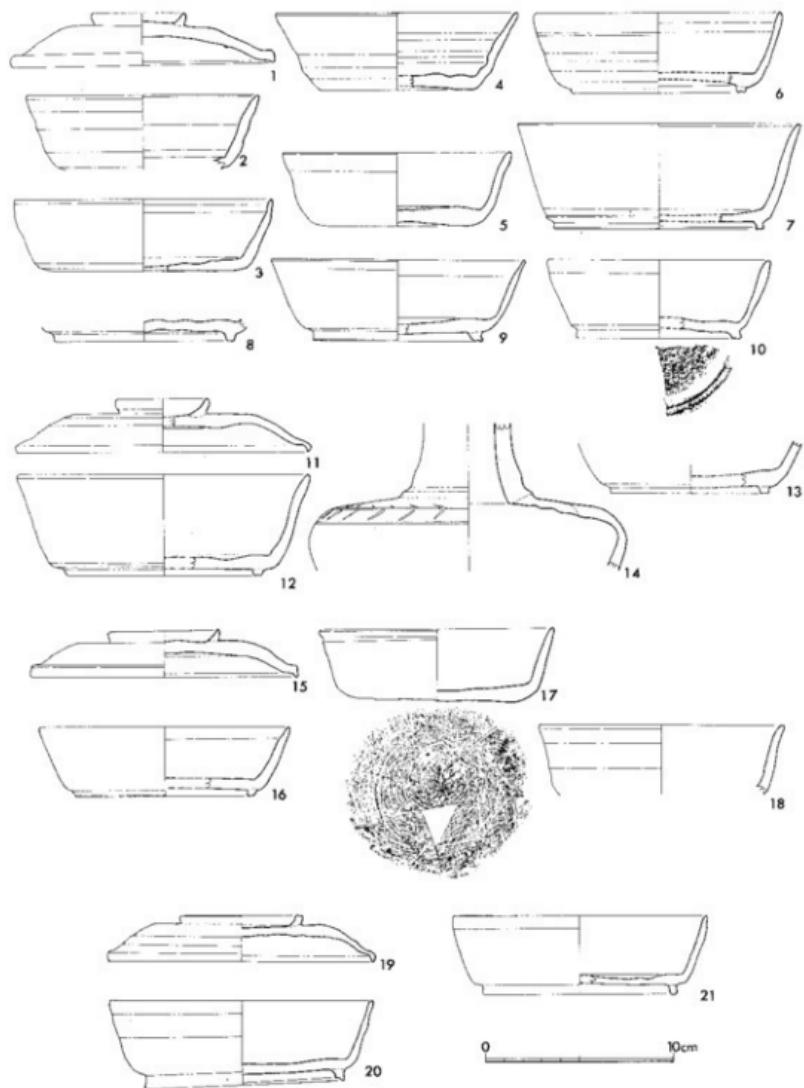
SI04（第92図、図版59-2）

SI02の南側に接し、  
壁面や溝の方向はSI02

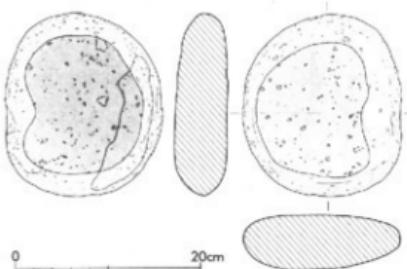


第94図 重富遺跡III区SI04・05遺物出土状況実測図

と同じである。壁面の長さは約5.75mだが、溝がさらに50cm程度北に伸びることから、当初は6.25m以上の壁であったと考えられる。溝幅は40cm、深さは10cm以下で、壁下南半ではかすかにその痕跡が観察されるのみである。床面には地山が直接現われており、貼り土はなかったものと推定される。



第95図 重富遺跡III区 SI02-04-05出土遺物実測図  
(1~10 : SI02第1面, 11~14 : SI02第1面貼床内, 15~18 : SI04, 19~21 : SI05)



第96図 重富遺跡III区SI05出土遺物実測図

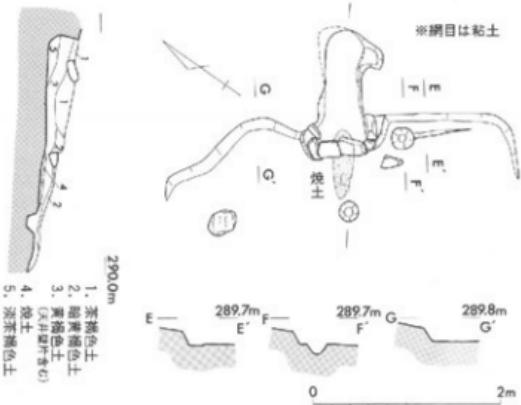
## SI05 (第94図、図版59-3)

壁上面で一辺5m、床面で一辺4.75cmの方形の住居跡で、西側半分は残っていない。東壁途中から壁面下に深さ5~7cmの溝が廻り、壁面中央に長さ1.3m、幅40cm、深さ55cmの煙道が確認された。煙道中央付近には天井も若干残っており、底には炭化物や焼けた壁片などが混ざった黒色土や暗茶褐色土が堆積していた。煙道口には煙道の壁面の延長線上にかまど用の石を立てたと考えられる小穴が2個あり、その間に焼土が観察された。床面に貼り土ではなく、北半に長さ約2mの弧状の溝も確認された。遺物は床面から、一部に火を受けて赤く変色した石皿風の石器(第96図)や須恵器、土師器類が少量出土したが、特に南東隅で集中していた(図版60-1)。須恵器の第95図19は輪状つまみの形態が異なるものの口縁端部が同図11に近似した蓋で、环身20・21は体部の立ち上がりがやや内傾するものである。第104図7~9はいずれも土師器彫形土器で8は端部が尖った珍しい形状の口縁である。

胴部は底部近くに最大径があり、外面刷毛目、内面下半も刷毛目、上半はヘラケズリ調整を施す。

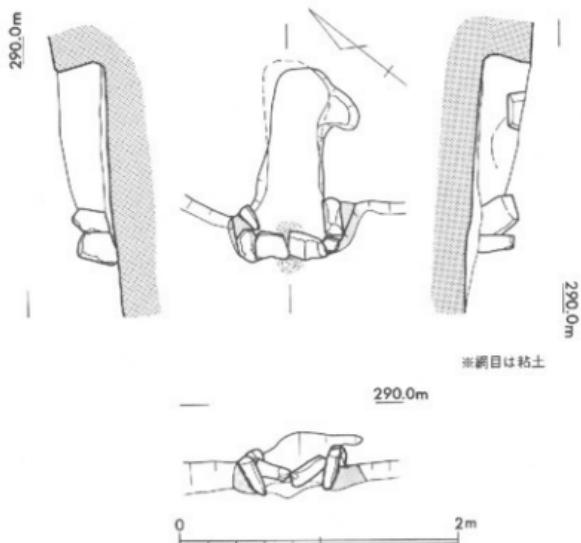
以上のSI02・04・05から出土した蓋環類

かまどや煙道、焼土などは観察されず、床面に堆積した明褐色土中から少量の須恵器類が出土した(第94図)。第95図15~18がそれで、15の蓋は1と形態的によく似ているが、端部下端のつまみ出しがやや大きい。环身類も同じような形態で外側に反りぎみに立ち上がり、17の底面には回転糸切り痕が残る。



第97図 重富遺跡III区SI03実測図

は、蓋・身とも  
体部は回転ナデ  
調整で、ロクロ  
からの切離し方  
法にはヘラ切り  
と回転糸切りの  
二種類がある。  
住居跡の変遷に  
伴って形態もわ  
ずかながら変化  
しており、坏身  
では体部立ち上  
がりがやや内傾  
した状態からや  
や外反へ、蓋で  
は断面方形のつ  
まみから断面三  
角形へ、口縁端

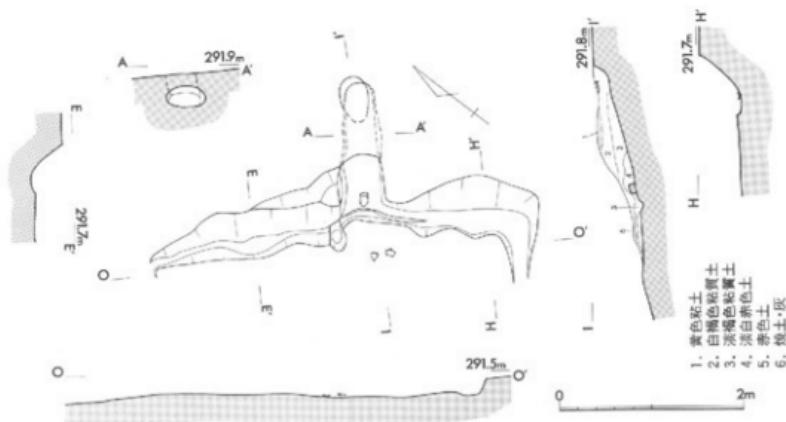


第98図 重富遺跡Ⅲ区SI03かまと石組および煙道部拡大図

部の長いものからわずかに突出するだけのものへという流れが追える。また、坏身の底部調整も、古い段階ではロクロから切離し後、あるいは高台貼り付け後回転ナデ調整を行うが、SI04以降未調整のままにする傾向が窺われる。蓋や坏身體部の立ち上がりの形態が平城宮Ⅲ～Ⅳ、大阪陶邑Ⅴ型式2～3段階に近似している。

SI03（第97・98図、図版60-2・3、61）

SI05の南東斜面下方で発見した住居跡で、SI05内にも堆積し、遺物も多く含んでいた茶褐色土層の上から掘り込まれたものである。山手側の壁と床面が幅1m程残っているのみで、壁面中央に石組みを粘土で固定したかまと煙道が築かれており、煙道から南側の壁下には幅20cm程度の深い溝が1mばかり掘られている。南側の壁が直線的であるのに対して北側のそれは大きく歪んでいるが、その原因は明らかでない。残存する床面の長さから一辺4.1m程度のはば方形の住居跡と考えられる。かまとは煙道口の両側に板石をそれぞれ2枚立て、住居中央側の石の上に長さ55cm、幅16～17cmのやはり板石を渡しかけているが、石組みを検出した時にはこの横石はすでにふたつに折れていった。横石の下の床面は梢円形に焼けていた。煙道は外に向かうにつれ、底面が少しづつ高くなっている。



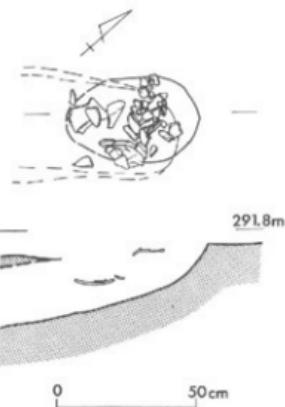
第99図 重富遺跡III区SI06実測図

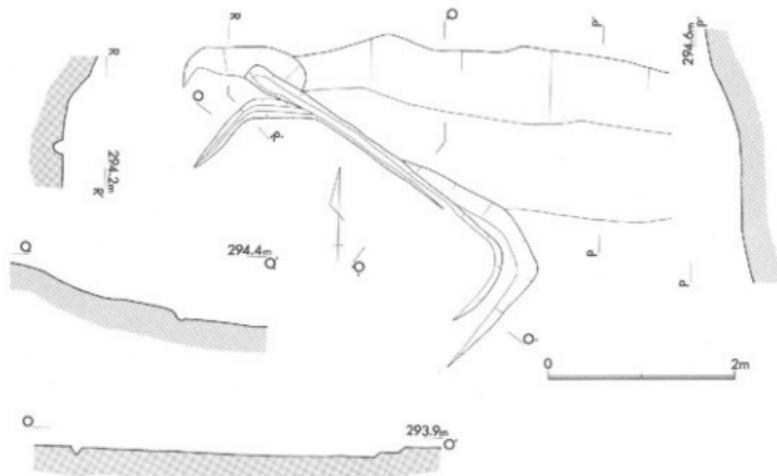
おり、先端南側壁面に段状の突出部が確認されたが、これがこの煙道に併設されたものがどうかは不明である。

床面から遺物は出土していないが、住居跡流入土と住居跡が掘り込まれていた茶褐色土から須恵器蓋坏および壺類と、土師器壺形土器片が出土している（第103図1～7、第104図10～13）。このうち、2は深さのある鉢形の須恵器で、底面に金属器を模倣したような断面三角形のシャープな突起が2本観察される。

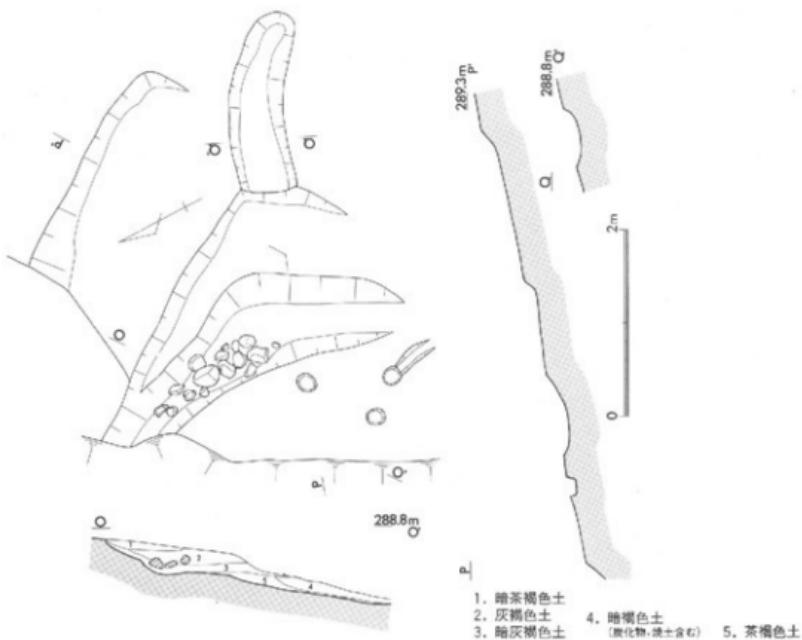
#### SI06（第99・100図、図版62、63-1）

SI02・04と同じ高さでその南側のところに作られた住居跡で、床面はかなり広く残っているものの様面は山手側の壁面とその両隅がわずかに残るだけである。平面プランは一辺4.25mの方形と考えられ、壁下には20～30cmの溝が廻っている。壁面中央やや南寄りには底面が床面に対して22～23度の傾斜で伸びる長さ1.3m、幅約40cm、断面梢円形の煙道が設けられており、先端には平面梢円形の煙出しが開口している。そして、この開口部からあたかも口を塞ぐように、土師器壺形土器が1個、口縁を上にして出土した（第100図、図版63-1）。底部の遺存状

第100図 重富遺跡III区SI06煙道口  
土師器出土状況実測図



第101図 重富遺跡Ⅲ区SI07実測図

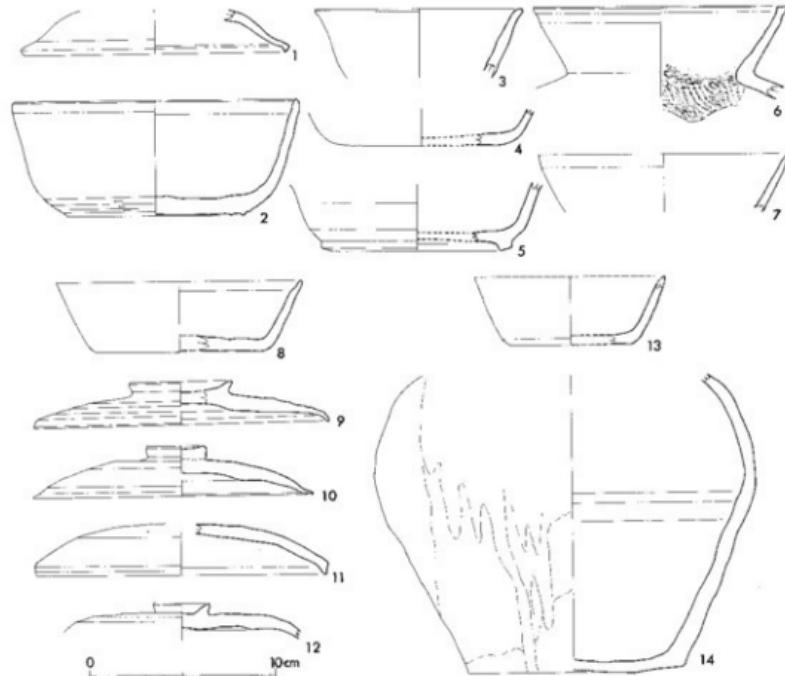


第102図 重富遺跡Ⅲ区SI08実測図

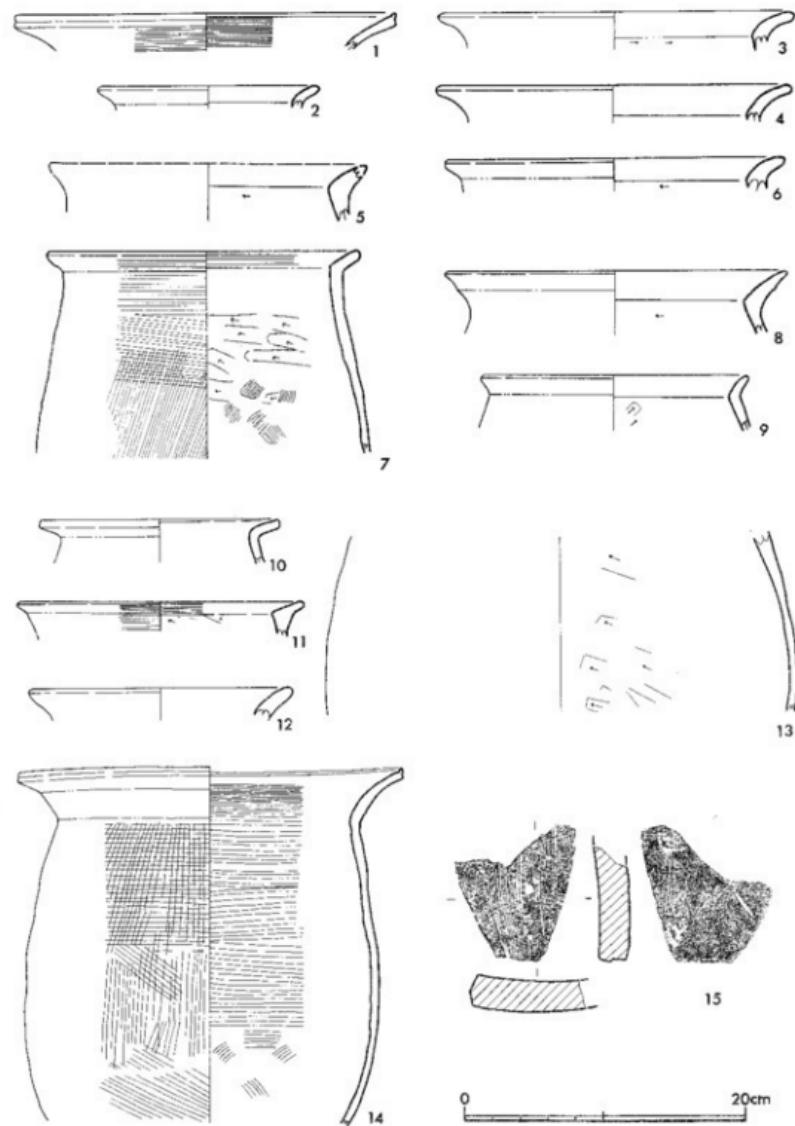
態が悪く、完全に復元はできなかったものの、口縁径27.5cm、推定高29cmの大形品で、器面調整は内外面ともに刷毛目である（第104図14）。住居跡内のかまど部分には北側に石を立てたと推定される小穴があったが、焼土は確認できなかった。なお、床面と南側溝内からも須恵器杯身片が出土した（第103図8）。やや軟質で色調は灰白色を呈する。口縁端内面につよい横ナデがはいる。

#### SI07（第101図、図版63-2）

北斜面東端に1棟単独に築かれた住居跡で、標高もこれまでのものより2m以上高い（第89図）。ほぼ同じ位置に少なくとも一度は建て直しが行われたようで、壁下に残っていたと思われる溝が2本検出された。どちらも幅20cm、深さ10cm前後の細く深い溝で、それぞれから推定される住居跡は、一辺4mと3.6mの方形プランの住居跡である。かまどや煙道、焼土等ではなく、貼り上も観察されなかった。流入土の暗青灰色土から須恵器（第103図9～12）と瓦片（第104図15）が出土した。9・10は口縁端部が細く尖り、垂直に立ち上がらずに外に開いたままのもので、これまでの住居跡から出土したものに比べ、時期的に新しい要素の加わった蓋と考えられる。瓦片は須恵質の隅切りの



第103図 重富遺跡Ⅲ区SI03-06-08出土須恵器実測図  
(1~3・6・7: SI03上斜面茶褐色土, 4-5: SI03焼土, 8: SI06, 9~12: SI07焼土, 13・14: SI08)



第104図 重富遺跡Ⅲ区S102-03-05~07出土土師器・瓦実測図  
(1~6: S102, 7~9: S105, 10~13: S103, 14: S106, 15: S107)

平瓦で、凸面はヘラ状工具による縦方向のナデ、凹面には糸切り痕が残っており、端部はヘラケズ

リで調整している。

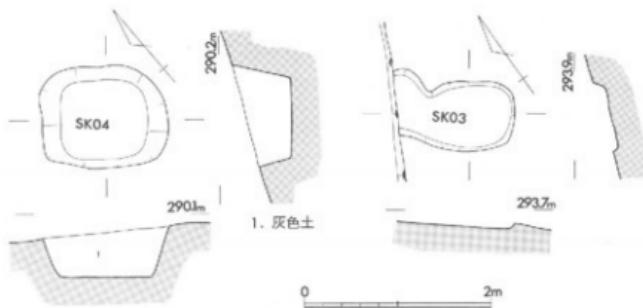
#### SI08（第102図、図版63-3, 64-1・2）

SI06の斜面下方で検出した住居跡で二段の加工段と溝、およびピットがある。北西側を後世の畑造成で削られており、全体像は掴むことができない。上の加工段は幅1.4m、長さ2.4m以上の平坦面があり、下段もこれとはほぼ同規模の平坦面が残存するが、ここにはさらに幅0.6~1m、深さ25~30cmの溝があり、中に流入土とともに長さ30cm程度までの円礫が堆積している。これらの段と溝は住居跡に伴う施設と考えられるが肝心の住居跡は残っていない。溝の内側にあるピットや溝がその一部であろうか。なお、下段壁面から東に伸びる溝が住居跡に伴うものかどうかは不明である。

住居跡流入土から須恵器环身（第103図13）が出土したほか、下段の細い溝から須恵器壺（同図14）が底部を下にして、あたかも据えつけられていたかのような状態で出土した。壺は肩部から上をすでに欠失してしており、現存高は16cmである。内外面ともに回転ナデ調整で、外面胴部下半にはナデ調整前にヘラケズが施された痕跡が認められる。外面には自然釉が著しい。

#### （2）土壙（第105図）

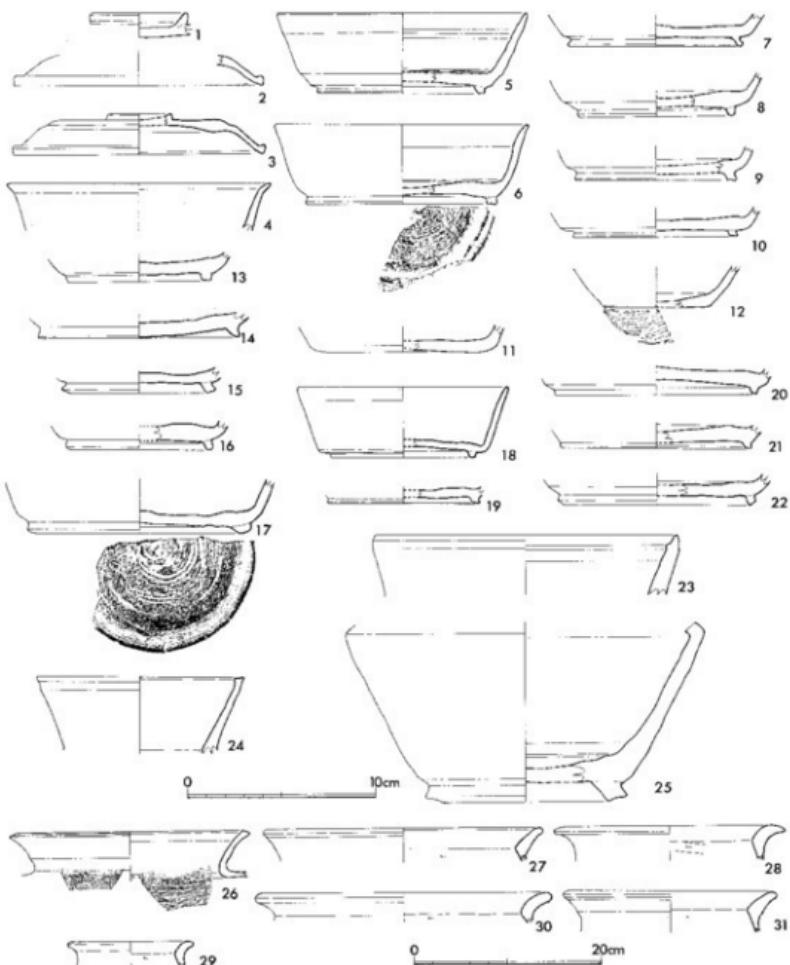
北斜面からは2個の土壙を検出した。SK03はSI06の斜面上方にあり、西側をトレンチで切ってしまっている。現存長約1.3m、幅約0.8mであるが、北側中央部がくびれているのであるいは二つの土壙が連なったものかもしれない。底面は斜面下側が深くなっている。内部には褐色土が堆積している。遺物は出土していない。SK04はSI06とSI08の間の斜面に掘られており、掘り方上面で長さ1.4m、幅1.1mの方形に近い隅丸長方形の土壙である。深さ約60cmで、内部には柔らかい灰色土が堆積している。土壙の形状から墓の可能性があるが、堆積土に締まりがなく、遺物も含まれていないことから用途がはっきりしない。時期的にも近世以降の可能性がある（図版64-3）。



第105図 重富遺跡III区SK03-04実測図

## (3) 北斜面西半包含層出土遺物 (第106図)

北斜面西半では遺構部分も含め、斜面全体に明褐色土ないし茶褐色土の遺物包含層が堆積している。遺物の多くは須恵器蓋坏類、壺類と土師器甕形土器類である。蓋はいずれも坏蓋で輪状つまみがつき、器高がややあって口縁端部の立ち上がりがほとんどないものである(第106図1~3)。坏



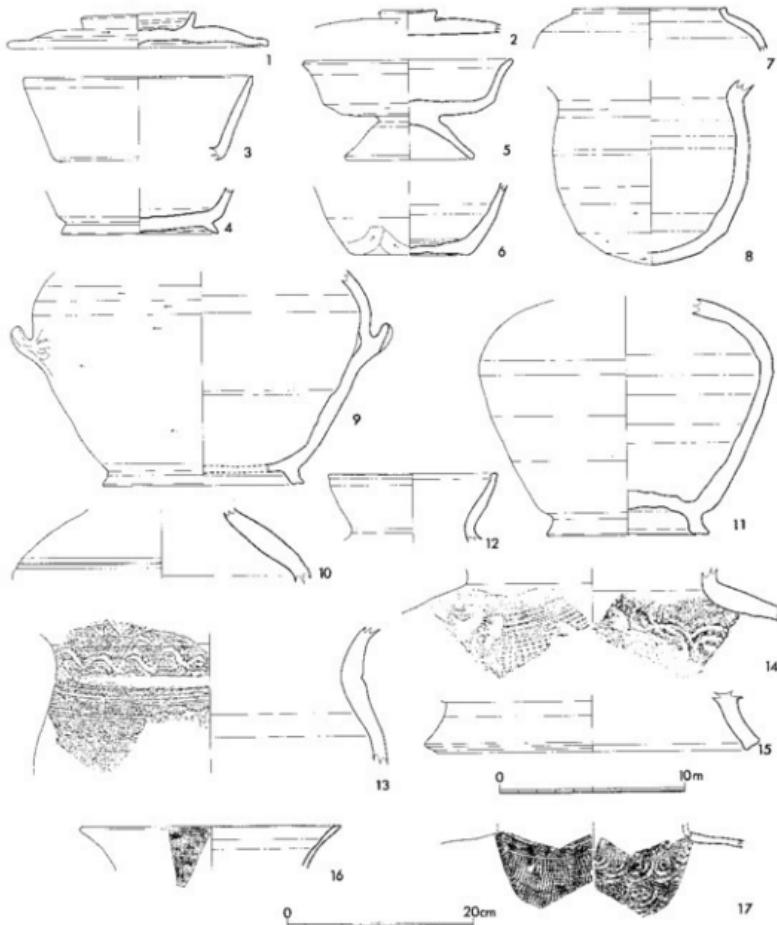
第106図 重富遺跡III区北斜面西半出土遺物実測図

(2・3・5~11・23・25: S.02・04層土、その他は明褐色土)



第107図 重富遺跡Ⅲ区北斜面東半遺構実測図

身は高台のないもの（11・12）もあるが大半のものには高台がついている。体部の立ち上がりは直線的に伸びるものが多い（5・6・18）が、4のように口縁部を短く外反させるものもある。高台は底面端部から若干内側のところにつけられており、断面逆M字ないし角形のものと丸形のもの（7・8・14・16）がある。また、底面に回転糸切り痕を残しているもの（6・12・17）がある。壺甌類には長頸壺または広口壺と考えられるもの（25）と中形の壺（23・24）、甌（26）があるが、全形



第108図 重富遺跡Ⅲ区北斜面東半出土遺物実測図  
(9-11-12-14:溝状遺構, 4:青灰色土, 5-8-10-15:明褐色土, その他の褐色土)

を窺い知ることのできるものは少なかった（23～26）。土師器甕形土器はいずれも口縁がくの字状のもので、29のように口縁径14cm以下の小形のものもあるが、総じて20cm以上の中大形品が多く見受けられた（27・28・30・31）。

#### （4）北斜面東半の遺構と遺物

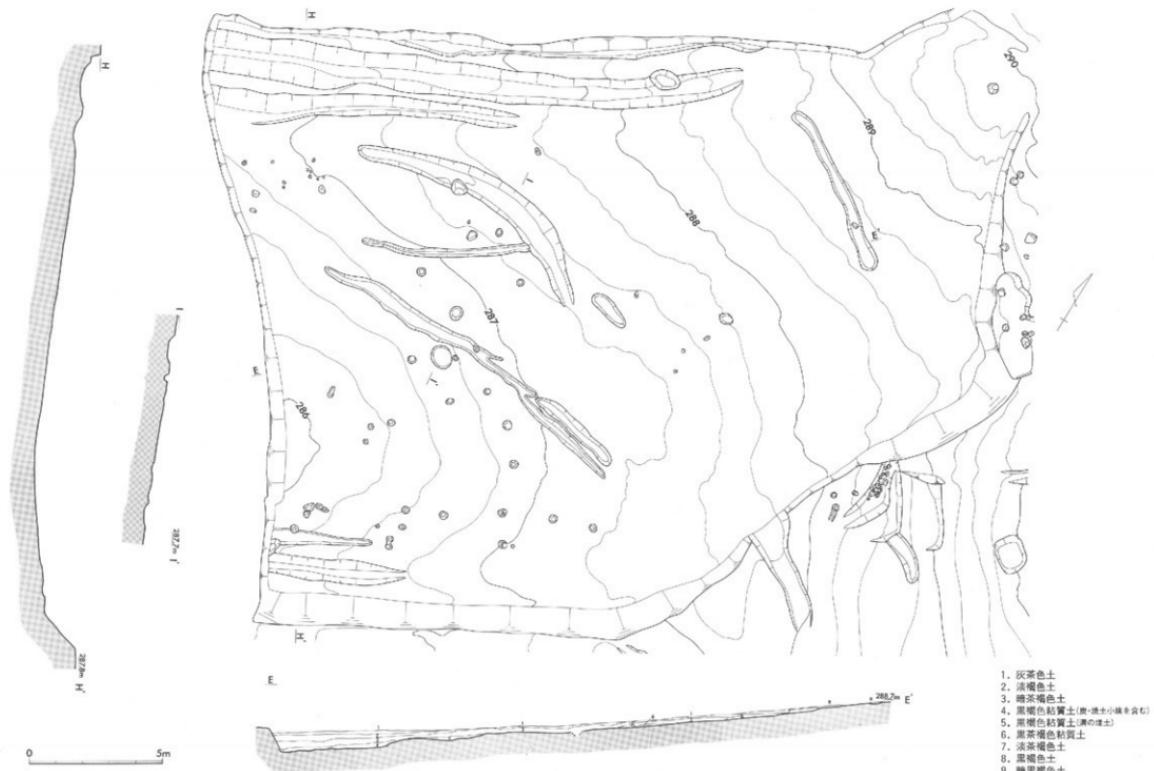
Ⅲ区北斜面のうち、東半のSI07の周辺では何本もの溝ないし溝状遺構を検出した（第107図）。SI07の斜面上方で検出した溝は、数本が平行して斜面を斜めに走っているが、全体に掘り込みが浅く、斜面下側の立ち上がりがほとんど残っていない状態である（図版65-2）。溝内には青灰色～灰褐色の砂が堆積しており、遺物も若干含まれていた（第108図9・11・12）。9・11はどちらも広口壺で、9には扁平で立面三角形の把手が2個つく。外面肩部以下にヘラケズリを施し、それ以外は回転ナデ調整である。11は肩部の丸いもので調整は9と同じである。12は立ち上がりがやや内湾ぎみの窓口縁であるが、胴部の形態が判らない。あるいは11の口縁がこれに相当するかもしれない。

溝状遺構は谷筋や尾根筋に添って走るもので、掘り込みが深かったり、幅広であったりするものである。砂の堆積は比較的少なく、粘質土の場合が多い。遺構底面に円形のピット状の窪みの並ぶもの（第107図左下）があり、これは南尾根で検出した遺構同様道のようなものと判断される。流入土に若干遺物を含んでおり、SI07東方の細い溝状遺構からは中形の壺片（第108図14）なども出土している。

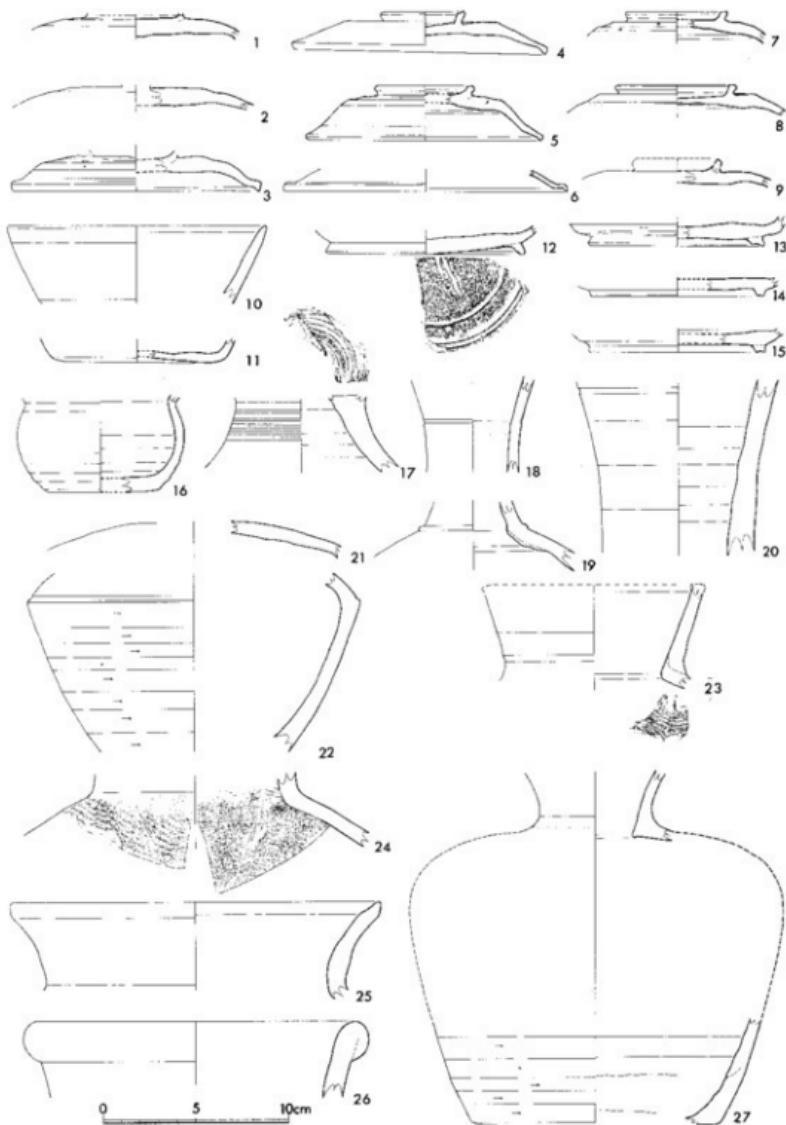
なお、溝周辺では青灰色土の、その他では明褐色土や暗褐色土の遺物包含層が広がっており、須恵器、上顎器の破片が多数含まれていた（第108図）。このうち須恵器は、蓋坏（1～4）、低脚付坏（5）、無頸壺（7）、広口壺（6・10・13）、大形壺（16・17）などである。低脚付坏の坏部は普通の浅い杯の形態と同じで、口縁端は若干外反する。脚部は盃を逆にしたように直線的に開き、端部をそのまま丸く收めている。8は口縁がくの字状に外反するが丸底で鉢のようなものである。13の頸部にはヘラによる波状文と沈線が1条ずつ廻る。

### 4. 谷底部の遺構・遺物

住居跡群の前面の谷底部でも厚い遺物包含層とその下から遺構が検出された（第109図）。遺物包含層は、基本的に上層から灰茶色土、淡褐色土、暗茶褐色土の3層から成っており、西端の最深部で全体の厚さは約60cmにも及んでいる。遺構は遺物包含層下の褐色土（東半）と黒褐色粘質土（西端）に掘り込まれており、この面が当時の生活面であったと推定される。ただし、谷底部の周壁は焼の造成によって地山まで削られており、古代の遺構、遺物はほとんど残っていなかった。なお、北斜面と南尾根との間の谷底部でも同様の層序で遺物包含層が確認され、土器類が多量に出土した。



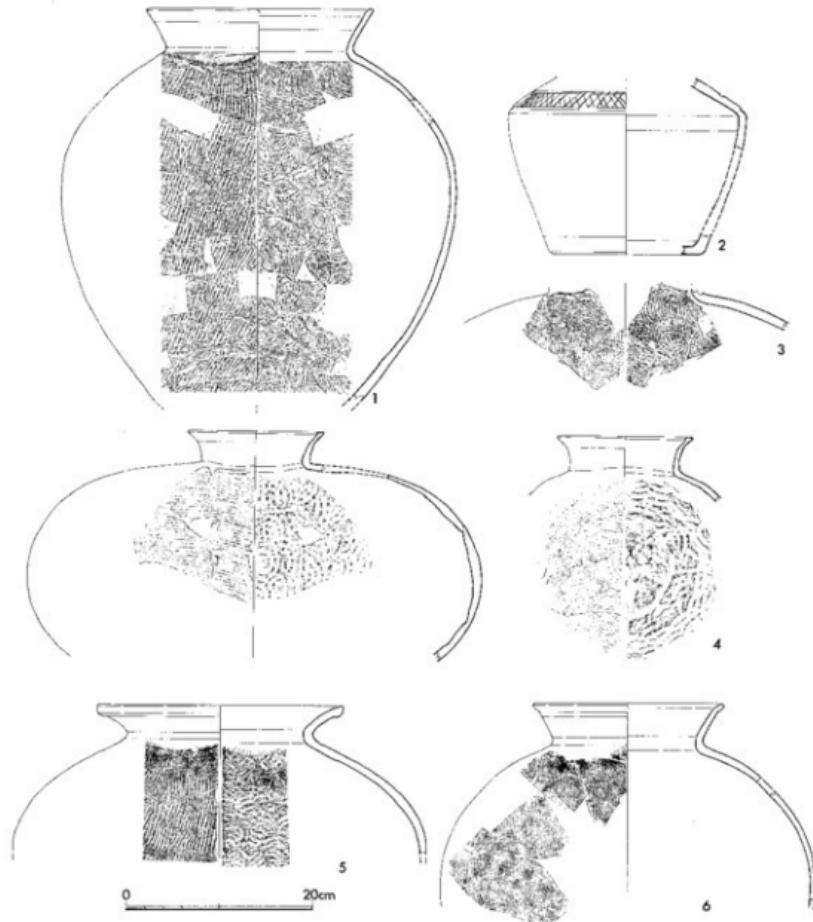
第109図 重富遺跡Ⅲ区谷底部造構実測図



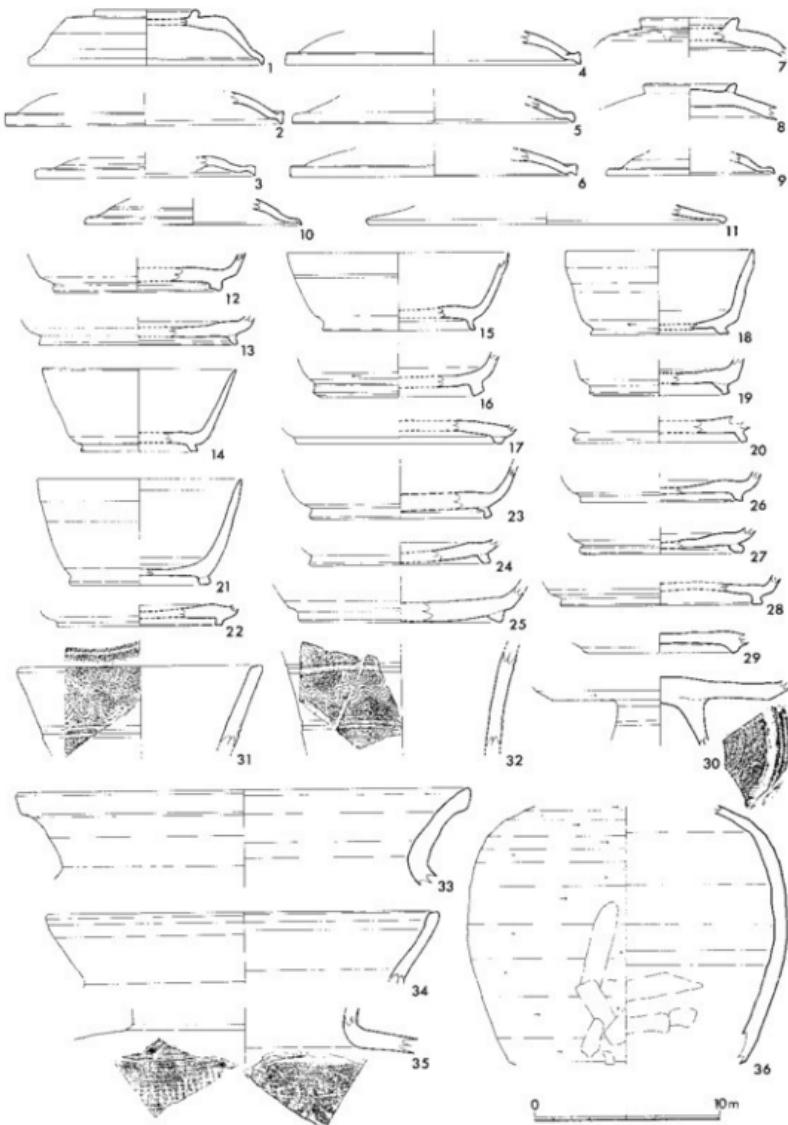
第110図 重富遺跡Ⅲ区谷底部(東側)出土遺物実測図(1)  
(1-5-8-11-13-15-24-26: 淡褐色土, 4-6-7-14-16-25: 茶褐色土, その他灰茶色土)

## 遺構(第109図、図版65-3)

谷底部南北端に東西に2~3条直線的に走る溝状の遺構は、近世以降の畠地造成を受けてからのもので、古代の遺構はその内側の傾斜地にあるものである。溝が5本と円形土壙1個、およびピット群からなっている。溝にはいずれも黒褐色粘質土が堆積し、中央を斜めに横切る溝状遺構からは遺物も出土している。この溝状遺構に隣接する円形の土壙は直径約1m、深さ15cmで内部には茶褐



第111図 重富遺跡Ⅲ区谷底部(東側)出土遺物実測図(2)(1:茶褐色土、他は灰茶色土)



第112図 重富遺跡Ⅲ区谷底部出土遺物実測図

(7-14・36: 西施溝状遺構, 2-20: 中央溝状遺構, 12-13: 黒褐色粘質土, 8-10-11-15-19-33: 暗茶褐色土, 26-29-34: 黒褐色土, その他灰茶色土)

色土が堆積する。性格は不明だが大半のピットと同じ堆積土で、作られた時期も同じと考えられる。ピット群は直径20cm程度のものから50cmの大きさのものまでさまざまであるが、いずれも平面円形で浅いものである。建物跡に組めそうなものはない。

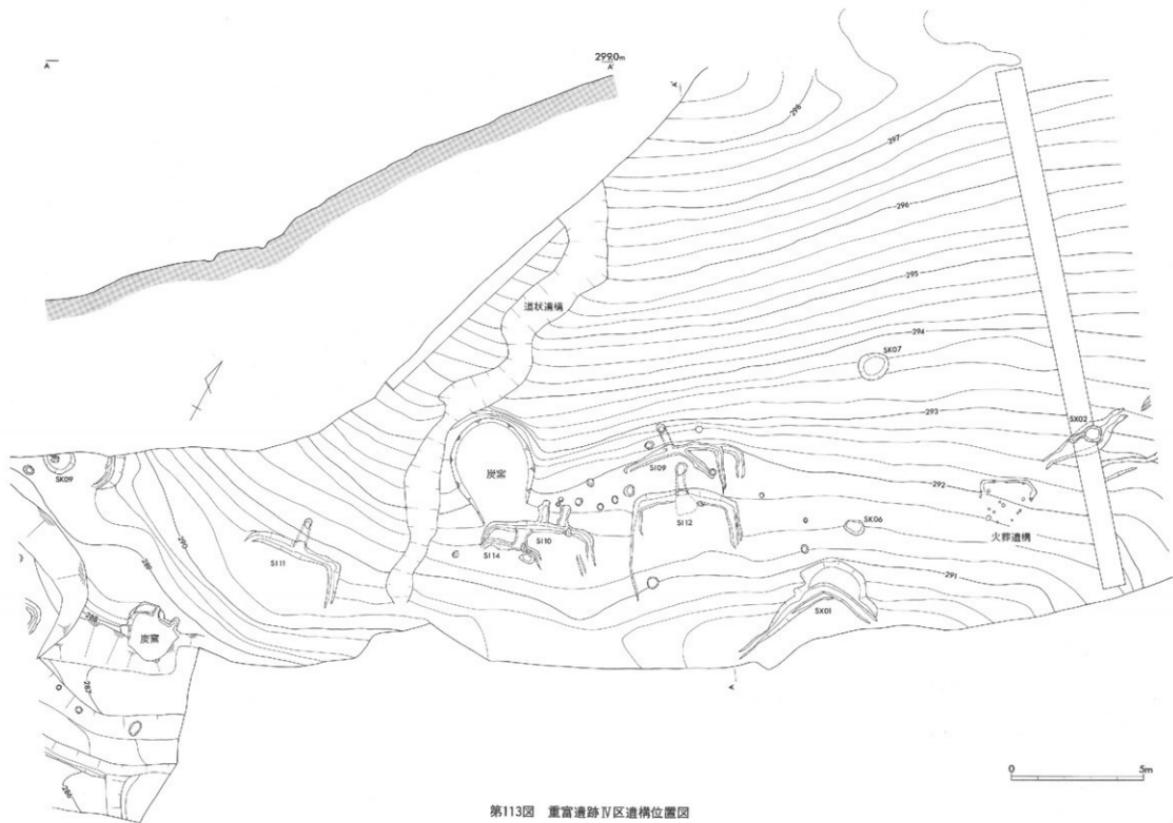
#### 出土遺物（第110～112図）

ここでは須恵器だけを取り上げる。まず、東側の一段上の谷底からは、蓋坏（第110図1～15）、広口壺（16）、長頸壺（18～22）、その他壺類（23～27、第111図2）、大形甌（第111図1・3・5・6）、横瓶（第111図4）などが出土した。蓋はいずれも輪状つまみで口縁端部の立ち上がりが小さい。坏は全形を窺えるものはないが、高台は底面端部からやや内側に取り付けている。12は坏以外の底部の可能性もあるが、底面にヘラ書きの沈線が二条認められる。ヘラ記号のようなものであろうか。17は杯の脚部の可能性がある破片だが、外面にカキ目調整を施している。長頸壺のうち、19は水瓶のような細長い頸部に丸い胴部がついたものと考えられ、18と同様白色の緻密な胎土をしていて注目される。27の胴部外面はヘラケズリ、第111図2の肩部以下もヘラケズリである。2の肩部には刷毛の小口を刺突して施した斜格子沈線文がある。第111図4は大形の横甌であるが焼成が悪くかなりもろくなっている。口縁端部が小中形甌のそれによく似ているのが特徴である。

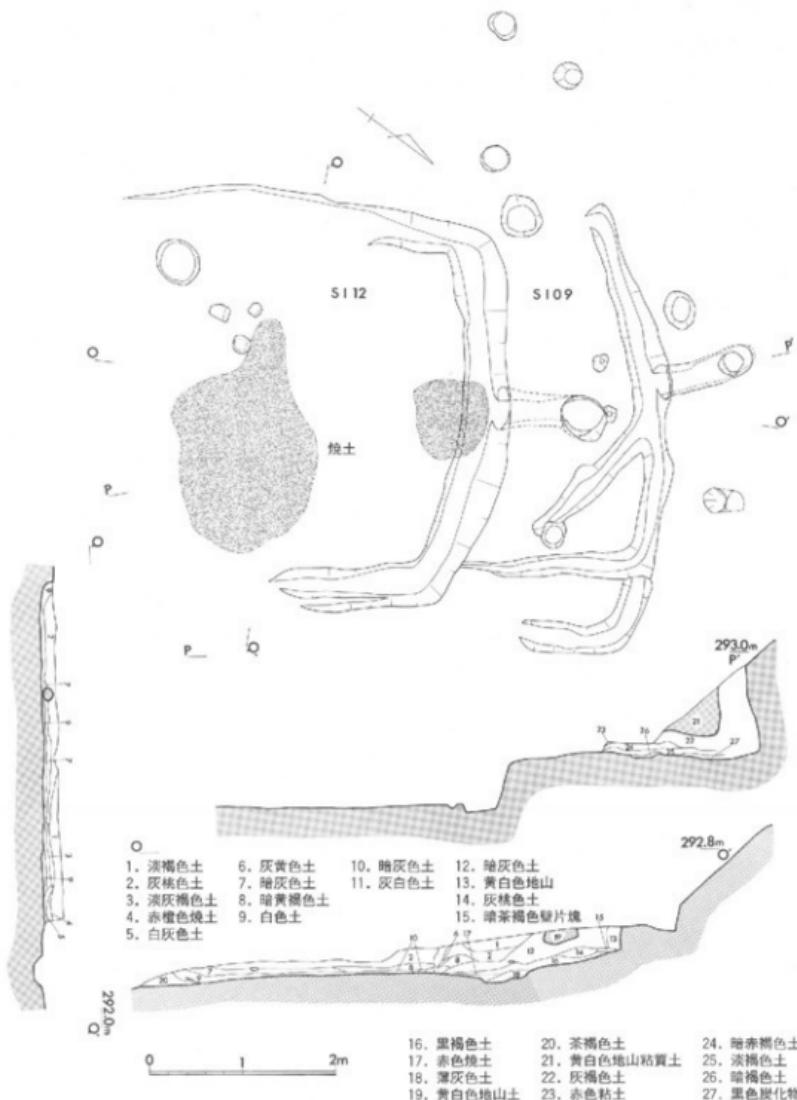
中央谷底部でも器種構成は東側のそれと同一である。蓋は輪状つまみに立ち上がりのない口縁端部がつくが、ここでは端部の屈曲の著しいものが多い（第112図1～11）。坏身は体部が直線的に開くものがほとんどで、高台径に比して器高の高いもの（14・18・21）も多く見受けられる。30は脚付き坏だが、坏底面は回転糸切り放しのままで二次調整をしていない。30・31は必ず口縁と思われ、外面に平行沈線文と櫛描き波状文が施されている。

### 第5節 IV・IV-2区の調査

重富遺跡IV区は、III区とやつともて古墳群の間のやや急な傾斜だが南向きの斜面にあたり、IV-2区はその西側に取り付けられる町道部分に相当する（第2図）。IV区とIV-2区の調査区境は段差が約2mある現在の畠地崖面をもってし、両区とも平成2年度に調査を実施した（第77図）。IV区ではやつともて19号墳の斜面すぐ下で瓦窯跡1基と灰原を検出したほか、Ⅳ区の堅穴住居跡とはほぼ同じ標高のところから堅穴住居跡、溝状遺構、土塊、近世以降と考えられる火葬遺構や炭窯跡等を確認した（第113図、図版79-1、89-1）。また、IV-2区では土壤と大量の遺物が出土する溝状遺構を調査した（第153図）。



第113図 重富遺跡IV区遺構位置図



第114図 重富遺跡IV区SI09-12実測図

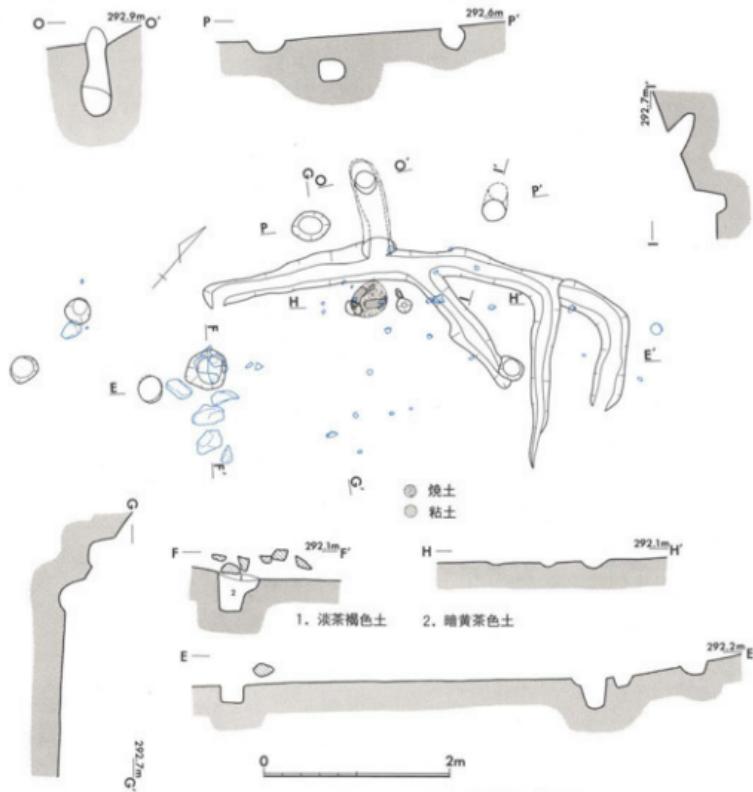
## 1. IV区の遺構・遺物

## (1) 穫穴住居跡

Ⅲ区の竪穴住居跡と同様に、傾斜角22~23度の斜面を四角く削って平面方形の床面を作り出し、山手側の壁面下に排水、湿気防止用と考えられる溝を廻らし、壁の中ほどに作り付けのかまどと煙道を設けた住居跡である。標高289.5mから292mの間の斜面の5個所から6棟以上を検出した（第113図、図版79-2・3）。遺構番号はⅢ区から継続して付した。

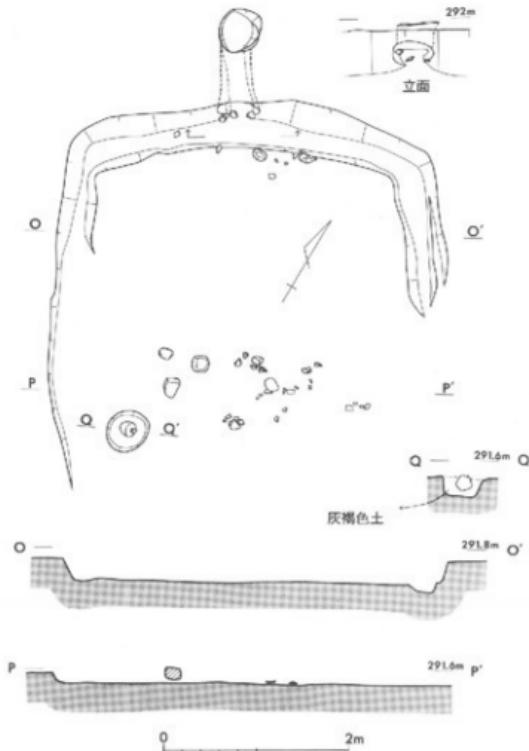
SI09（第114・115図、図版80）

IV区の中央にあり、住居跡群の中で最高所に位置する。後述するSI12を埋めて作ったもので、住居跡の東西にも幅4m前後のゆるやかな平坦面ができている。ほとんど同じ位置に2棟が重なった



第115図 重富遺跡IV区SI09遺物出土状況実測図

状態で検出された。1棟は北西隅の溝しか残っていないが、規模の判るもう1棟は山手側と東側の二面が残っており、壁面はゆるやかに湾曲しているが一辺4mの方形に近いものである。山手側壁面中央付近に断面楕円形の煙道を長さ1.1mにわたって掘り込んでおり、最深部からさらに垂直に立ち上がる。周壁下には幅約25cm、深さ約5cmの溝が廻り、煙道口付近では溝の上から焼土や赤色の粘土が観察され、それに統いて焼けた煙道壁面片の堆積層が検出された。また、焼土の両側床面には2



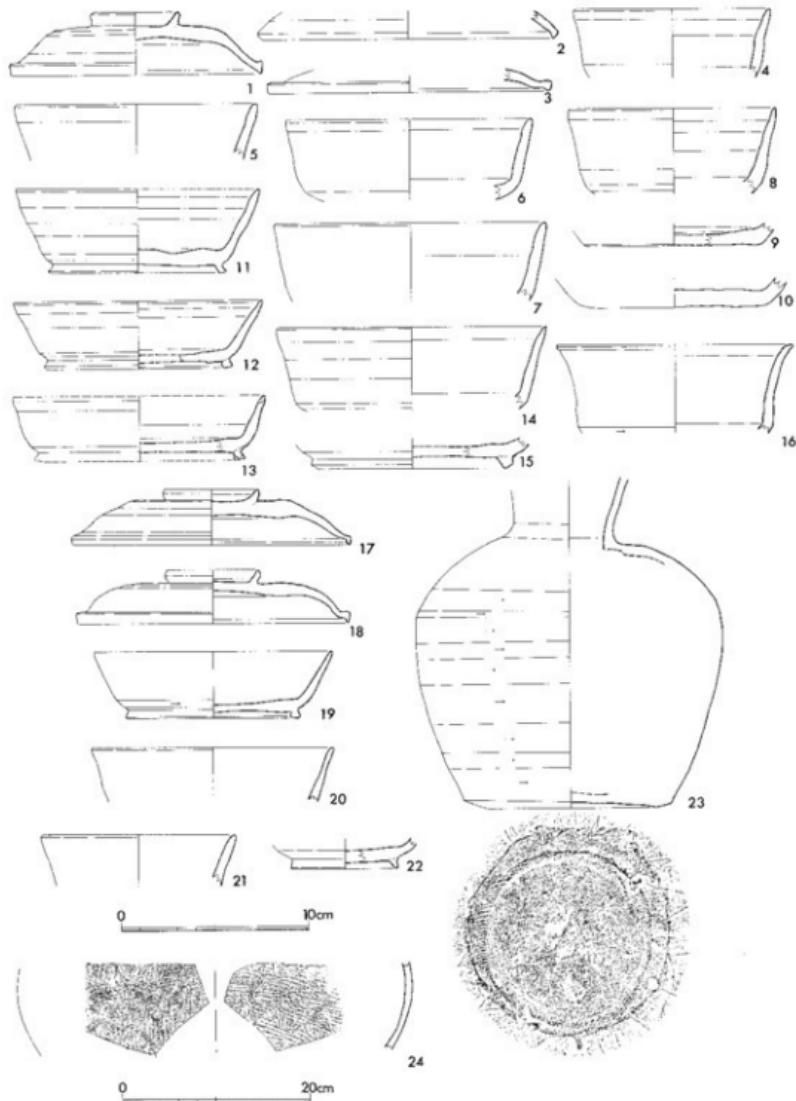
第116図 重富遺跡IV区SI12遺物出土状況実測図

個の小さな窪みがあり、かまどに用いた石組みの抜取り痕であると判断された。窓穴外側には煙道の両側に垂木穴と考えられるピットが2個確認された。

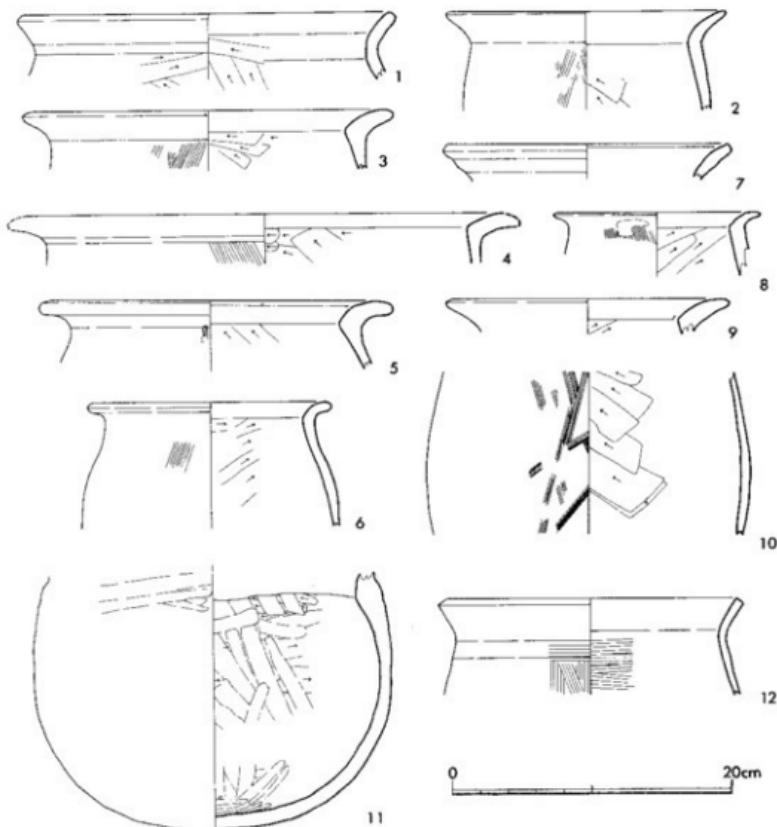
床面及び住居跡内に堆積した暗褐色土から須恵器や土師器が散在して出土した（第115図）。須恵器はいずれも蓋坏類（第117図1～16）で、蓋の形態はⅢ区の住居跡群から出土するものと同じだが、坏身は高台が底面端部に近く、体部の外反の度合が大きいもの（11～13）が多く見受けられる。16は体部がゆるやかに外反し、下半に明瞭な稜線があるもので、金属器を模倣した須恵器と考えられる。土師器は壺形土器のみ（第118図1）である。

#### SI12（第114図・116図、図版81・82）

SI12はSI09に先行する住居跡で、形態は極めて近似している。床面がほぼ完全に残っており、一



第117図 重富遺跡IV区SI09-12出土遺物実測図(1)  
(1～11・13～16: SI09埋土, 12: 床面, 17～21・24: SI12埋土, 22: 床面, 18: 床内)



第118図 重富遺跡Ⅳ区SI09・12出土遺物実測図(2)  
(1: SI09, 2~10: SI12, 11・12: SI12下面茶褐色土)

辺4.4mの方形の住居跡である。住居跡内に柱穴はなく、外側の煙道付近のピット (SI09床面) や西隅のピットには垂木穴の可能性がある。壁面は山手側で高さ約50cm、東西で20~25cmあり、やはりゆるやかに湾曲する。壁下の溝は全体を廻っている訳ではなく、東西両壁中央付近でなくなっている。床面のかまど付近と南半の広い範囲に焼土が確認され、かまどの焼土のそばで石の抜取り痕と考えられる窪みを1個検出した。また、両焼土の周辺からは土師器變形土器片が多数散らばって出土した(第116図)。図化できたのは大半が口縁部で、大きさは大小さまざまであるが、いずれも多くの字口縁を呈し、口縁部内外面とも横ナデ、胴部外面に刷毛目、内面にはヘラケズリ調整を施し